
世界を壊す救世主

結木しぐさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を壊す救世主

【Nコード】

N47210

【作者名】

結木しぐさ

【あらすじ】

“闇”と呼ばれる黒き獣たちから世界を守り救うを“天子”として召還されたわたし。

だけどこの世界を救おうなんてこれっぽっちも思わない。

——「こんな世界わたしがぶっ壊してやる」

異世界トリップファンタジー。

夢が夢でしかないように(前書き)

初投稿です。

夢が夢でしかないように

ファンタジーは嫌いじゃない。

こんなわたしだって金髪美形の王子様に憧れたり、魔法使いを夢見たり、たくさんの人から守られるお姫様になりたいと願ったり、そういう時期はたしかにあった。

だけどそれはまだ現実をよく知らない幼くて無垢な少女だった頃の話で、こんな年齢にでもなればそんなファンタジックなことが自分にふりかかればいいのに……なんてこと考えたりしない。

もしも……もしも本当にそんな非現実的なことが起きたとすれば、今すぐにでもどんな手段を使っても元の世界に帰りたいと願う。

それが普通ではないだろうか？

「世界を救え、天子」

その言葉は冷たく、どこまでも義務的にわたしに発せられた。

高い天井には無駄なくらい豪華なシャンデリア。白く美しい壁に大理石の床。入り口から最奥まで敷かれている金の刺繍の施された赤い絨毯はフカフカで見るからに高そうだ。

それはまさしくおとぎ話の世界そのもの。

目の前……というには遠すぎる位置には、金髪碧眼ではないものの銀髪の王子様が堂々とした様子で座っている。

王子とただけあって周りにいる野次馬のような奴らとは雰囲気がまるで違った。

こんなに遠くからみても美形なのだから、近くでみればどんなに美しいことだろう？

美しい王子様の顔を想像してわたしは小さく笑った。
それは自分でも分かるくらい暗い笑みだ。

「おいっ、聞いているのか？」

長い足をゆっくりと組み替えながら、なかなか返事をしないわたしに向かって痺れを切らしたのであろう。王子様は不機嫌そうな声でそう言った。

いったい何と言えばよいのだろうか？

“はい分かりました”と素直に言えばよいのだろうか？

この何がなんだか分からない状況で？

わたしは自問自答を繰り返しながら、高笑いしそうになるのを必死に押さえた。

わたしは今の状況というものがまるつきり分かっていない。なんせわたしが目を覚ましたのはこの無駄に広い部屋に連れてこられる30分ほど前のことなのだから。

夢が夢でしかないように（後書き）

1 話は短めとなっています。

2 話以降はもう少し長くなる予定。

読んでいただいてありがとうございます。

誤字脱字誤用が多いです。少しずつ直しておりますがそれでも多数あります。不快に思われた方は申し訳ありません。

本当はとつくに理解してる

目が覚めたときわたしは6人ぐらいの人に囲まれていた。
寝起きのぼやけた視界と思考のなかでも今の自分の状況があまりにも異常であることに気がついた。

わたしを見下ろす人たちが着ている服、そしてこの部屋の内装があまりにもおかしすぎたのだから当然といえば当然だろう。

「起きたか……」

「衛兵！すぐ殿下に報告をつ」

「ああそれから医者も呼んで来てくれるかな？」

まだ自分の状況が理解しきれない中で、わたしが起きたことに気がついた周りの人たちが急にあわただしく動き始める。

本当にどうなっているのだろう。わたしは一体何をしていたのだった？

まだ眠気が残っているのかいまいち冷静に頭が回らない。

どうしてこうなった？

今わたしがいるここはいつたいどこだ？

考えろ、考えなくては……

なかなか答えを導き出せない自分にイライラしてくる。どうしても思い出せないのだろうか。周りの音がわずらわしい。少しは静かに行動できないのだろうか？

わたしが沸き起こる苛立ちを納めるためにギュと目を瞑り拳を握り締めた……その時だった。

「……そなた」

自分のことに精一杯で気がつかなかったようだ。

きつく瞑っていた目を開けて、声のした方向へと目を向ける。

視界に入ってきたのは、40代くらいと思われる男だった。ほとんどの人間が慌しくこの部屋を出入りしているこの状況でとくに何をするわけでもなくじっとわたしを見つめている。

その青い瞳に少なからず恐怖を覚えた。

「そなた……私の言葉が理解できるか？」

低く重い声だと思った。威厳があると言ったほうがいいのかもしれない。

その声と瞳だけでわたしはこの男が普通の人間ではないことを理解できた。

この男は人の上に立つ人間だ……

よく分からない恐怖心が私の心を支配するが、目を反らしては負けたと思いわたしはその青い瞳を睨むように見返していた。

「なるほど、理解はできているようだな」

わたしの行動を見て分かったのか男は呟くようにそういった。

そして長く細い指を顎にあてて少し考えるようなそぶりをする。

だが、その瞳はわたしを見たままだ。体中を緊張感が包んでいく。

ここまで緊張したのはいついらいだろうか？

確か、大手の会社との契約を始めて一人で任されたとき以来のようない感じがする。

そして今わたしを包んでいる緊張感はそのときとは比べ物にならない。今にも冷や汗が頬を伝いそうなくらいだ。

わたしは耐え切れずゴクリとつばを飲み込みながら、それでも男を睨み続けた。

「フェジー様」

きつと数分は見詰め合っていたと思う。いや、本当はもつと短かったのかもしれない。あまりの緊張感に時間の感覚さえなくなっていたようだ。

一体いつまで続くのかと思ったこの無言の時間は男の後ろに膝をついた衛兵らしき人物によって終わりを告げた。誰かも知らないが今はこの衛兵に感謝したい。

“フェジー様”と呼ばれた男は振り返ると自分の前に膝つく男を当たり前のように見下ろした。その行動を見てやはりこの男はお偉いさんなのだと納得する。

「どうした？」

男は威厳のある声で衛兵に言葉をかけた。

「はい。その少女が目覚めたことを殿下に報告しましたところ今すぐにつれて来いとのご命令でございましたので、ご報告に参りました。」

固苦しい言葉遣いで衛兵はそういうと最後に深く頭をさげた。いやっ。それよりも衛兵の言葉の中に気になる単語が含まれてい

た気がする。

そう……今この衛兵は“殿下”という単語を言ったのだ。

わたしは男と衛兵から視線を外しグルリと今自分がいる部屋を見回した。窓の造りや柱の造り、扉の造りにいたるまでわたしが知っている日本の家とはかけ離れている。

どちらかといえば中世ヨーロッパのような……いや御伽話の中のようなその部屋はここが日本ではないことを教えてくれた。

それからもう一つ。

わたしは視線をもう一度その男に向けなおすとその衣装をマジマジと見つめた。

一言で言ってしまうはどこかの民族衣装のようだった。

世の中にはコスプレというものが確かに存在するが、この男が真面目にコスプレするようには到底思えない。これが趣味のコスプレだったらわたしはお腹を抱えて笑ってしまうところだ。

まあすなわち、この服装はここでは普通の格好であるのだろう。

そして最後に。

わたしはチラリと窓の外へ目をやった。

この光景を見て誰がここが日本で……いや地球であるなどと言えるのか。

空に浮かぶ赤と青……二つの三日月。

月があるということは今は夜なのだろうが、空は濁った白のような色をしていた。

もしかしたら月があるからといって夜だという概念すら間違っているのかもしれない。

ほとんどのことが日本とは違う。
それが意味することは一体何にか……

わたしは……異世界に来てしまったのかもしれない

一人ぼっち

わたしは異世界に来てしまったのかもしれない……

そんな重要ことに気がついたわりにわたしは冷静であった。長年の経験がそうさせるのかどうかはよくわからないが、思ったよりも冷静に頭が回る。

寝起きでばやけていた頭も随分とすっきりしてきたようだ。

「お嬢さん」

とにかくもつと情報がほしい。そう思ってもう一度考えだそうとした時だった。さっきまでわたしを支配していたあの威厳のある声とは違い、柔らかくどこか色気をかもし出した声が聞こえた。

邪魔が入ったことに舌打ちでもしてやりたい気分になったが、わたしは仕方がなしに声がした方向に視線を向ける。

「ごめんねお嬢さん。少し聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

サラリと肩から滑り落ちる長く綺麗な髪が印象的だった。一瞬その雰囲気から女の人かとも思ったが違うようだ。長く美しい髪や微笑み方は女性にそっくりだし、体格もどちらかといえば細身だけれども、その肩幅や髪を押さえる手は男性のものだった。

ふんわりと女性のような笑みをうかべてわたしを見つめてくる瞳から害を感じない。わたしは彼の言葉に小さく頷いた。

「ありがとう。僕の名前はセハン。セハン・ルフアシー……お嬢さんのお名前は？」

セハンと名乗った男はそう言ってより一層微笑む。
つられてわたしも名乗ろうと口を開きかけて、躊躇した。

本当に名前を言っているのだろうか？

この人に名前を教えて安全なのだろうか？

ここは異世界であることは分かったがそれ以外のことは何一つわかっていないのだ。うかつに名前など自分の情報を教えればどうなってしまうかわからない。

わたしは開きかけた口を閉じて、首を振った。
そんなわたしの様子を見てセハンは不思議そうに首を傾げる。

「もしかして、自分の名前分らない……とか？」

その言葉にも首をふる。

「それじゃあ……僕らに名前を教えたくないってことかな？」

そうセハンが言ったとき微かに恐怖を感じた。

甘く優しい笑顔に騙されてはいけないとこのとき思った。この人が安全である確立はきわめて低いのもしれない。そうか、誰も信じてはいけなのだ。

ここはどこで、わたしはどうしてここにいて、なんのためにわたしはこの人たちに囲まれているのか。疑問は尽きることなく溢れてくる。その疑問がなくなるまでわたしの安息の場などない。

周りは全て敵だと思わなくては……

わたしは意志を固くして、ゆっくりとセハンの言葉に頷いた。

「そう……」

わたしが頷いたのをみると、セハンは目を細めた。あの威厳に溢れる男とはまた違った恐怖を覚える。

わたしはいつたいていどうなってしまうのだろうか？

見つからない答え

「セハン」

なんともいえない緊張感が漂う一歩手前でセハンを呼ぶ声が聞こえた。

聞いたことのある声。あの男……フェジীর声だ。

「なんでしょうか？」

セハンはわたしから視線をはずして、後ろにいるフェジーを見た。

「その娘、どうだった？」

質問はセハンにしているはずなのに、その青い瞳はわたしを射抜くように見つめてくる。忘れかけていたあの恐怖心と緊張感が一気によみがえり、身体が強張るのがわかった。

「ええ、とりあいず見てみたところによると外傷もなく、怪しいものも持っていないようです。」

セハンは落ち着いた声で答えていた。フェジーが怖くないのだからか？

いや、それよりも気になることがあった。

セハンは今なんと言った？

“見てみたところ”と言わなかったか？

セハンはわたしと会話している中でわたしに一度も触れていない。

なら一体、何をどうやって見たというのだろうか？

分からない、分からない、分からない。

情報が足りない過ぎる。もっと情報がほしい。

「そうか」

分からない状況に苛立つわたしをよそに、フェジューはセハンの言葉を聞くと、まだ膝ついていていた衛兵に一言何かを言っただけの方へ近寄ってきた。

その瞬間恐怖が身体を駆け巡る。いったい何をされるのだろうか。これ以上無理というほど手を握り締めて、せめてもの抵抗としてフェジューを睨みつけた。

しかしわたしの睨みなどフェジューには全く無意味なようで彼は涼しい顔をしてわたしの真横までやってくる。

「悪くは思わない」

わたしに一瞬だけ視線を合わせたかと思うとフェジューはそう言うだけでわたしに手を伸ばしてきた。

おもわず目をつむり、よく分からない衝撃に耐える。

そして、それは一瞬のことだった。

フェジューがわたしの腕を掴み、数秒するとその手は離れていった。そしてその瞬間、わたしは自分の手首に違和感を感じたのだ。

瞑っていた目をそっと開けてみると、フェジューはすでにわたしに

背を向けていて、扉の近くにいる衛兵の人に何かを話しかけている。

セハンはまだわたしの近くにいて、少し申し訳なさそうな顔をしていた。

手首に感じる違和感。まさかとは思う。

しかし自分の手を動かそうとしてみても何かに邪魔されて動かすことは出来ない。想像できるものは一つしかなかった。

わたしはゆっくりと自分の首を反転させて、恐る恐る手首を見てみた。

するとそこには鈍く光をはなつ鉄製のもの。

これは……どこからどうみても“手錠”だろう。

はずれないかと、手を動かしてみるものの力チャカチャという音がするけどその手錠はとれそうにない。

しかし、一体どうやってつけたのだ？

確かにフェジーはわたしに触れたがそれはホンの数秒のことだし、触られたのあくまでも“腕”であり手首に触られた感触など一度もしなかった。

それなのに手錠はしっかりとわたしの手首についている。

また分からないことが出てきてしまった。

この感じからすると、もしかしたらこの世界には“魔法”と呼ばれるものがあるのかもしれない。そうでなくてはこの分からないことたちを説明できない。

「ごめんねお嬢さん」

手首にきらめく手錠を見つめたまま思考をめぐらしていると、セハンの申し訳なさそうな声が聞こえてきた。

さっきの恐怖を感じた彼とは別人のような態度に少し驚きながらも今はそれよりも大事なことがあると思いついて無視することに決めた。とりあえず、わたしはどうして手錠をされなくてはならないかと目で訴えてみる。すると以外にもそれは彼に伝わったらしく彼は説明してくれた。

「実はね、これから殿下にお嬢さんを会わせることになっているんだよ。危険なものは持っていないようだけど、何があるか分からないからね。その手錠は念のためだよ。僕は殿下を守ることが使命だからね」

優しく丁寧な説明になるほどと思うのと同時になぜ殿下に会う必要があるのか、と考える。

しかも殿下……すなわち王子様だろうが、そんな人がここにいるということはここは城と呼ばれる場所なのだろうか？

なぜわたしがそんなところにいるのだろう？

そうだ、そもそもわたしが何故こんな異世界に来てしまったのかもまだ分かっていない。

ああもう、頭がパンクしそうだ。考えるべきことが多すぎて考えられなくなってきたている。

つとその時扉の開く音がした。

「失礼いたします。殿下の準備が整いましたので、娘を王の間に」
扉から入ってきた衛兵はしっかり90度に腰を折った後そう言った。

「了解した。セハン、娘を連れて行け」

「わかりました」

フェジューは衛兵の言葉に頷くとセハンに目をむけてそう言い、自分は一足先にそこから出て歩き出した。

「さて行こうか、お嬢さん」

セハンは手錠のせいで平衡感覚がいまいちのわたしの肩を支えてくれる。

わたしはゆっくりと、王の間と呼ばれるその場所へ歩き出した。

止まらない苛立ち

王の間は無駄に豪華な部屋だった。

ここに来る途中セハンが教えてくれた情報によれば、王の間とは国王陛下専用の応接室のようなものらしい。

しかしなぜ国王陛下専用の応接室を殿下が使っているのかは教えてくれなかった。とうよりも聞く前に王の間についてしまったのだ。どうやらわたしが目覚めたあの部屋はさほど王の間から離れていない場所にあつたらしい。

「幸運を……」

王の間に入る直前にセハンはわたしから離れ、最後に小さくそう呟いた。言葉だけ聞けばわたしを心配してくれているようだが、その口元には隠せない笑みが浮かんでいる。

本当にあのセハンという男は読めない人間だ。

「殿下。例の娘を連れてまいりました」

意味もなく大きい扉の前でフェジーと思われる男がそう言う中からの返事も待たずドアを開け放つ。そこでわたしは少し首を傾げたくなった。普通こういうのは中の人の返事を待つものではないだろうか？とくにここには殿下がいるのに……なんて思っているうちにフェジーとその他数名の衛兵はドアを全開にしてしまった。

フェジーは中に一步入ると膝をつき頭を下げる。すると周りにいた衛兵も次々に膝をついていった。もちろんセハンも膝をついている。いつの間にかこの場で立っているのはわたしだけとなってしまうわたしは慌てて膝をついた。

「失礼致します」

フェジの低い声が部屋に響く。

少なからず、今までフェジが誰かに敬意を払うような姿を見たことがなかったので驚いた。やはりというか当たり前だがフェジも殿下にはこうやって膝をつくのだなと感心してしまった。

フェジは言葉を発して数秒すると何かを確認するかのよう顔を上げ一つ頷くともう一度頭を下げてから立ち上がった。それに習うように他の衛兵たちも立ち上がったので、わたしも立ち上がる。

「殿下の許可が下りた。入れ」

その言葉と共に、皆ゾロゾロと王の間へと入っていった。わたしは最後の方に流れるままに王の間に入り、その豪華さについて言葉を失ってしまう。中の広さも半端ない。これではドアの外から声をかけても奥のほうに居れば聞こえないだろう。だからフェジは返事がないまま扉を開けたのかなどと妙に納得してしまった。

はつきりいつて金のかけすぎではないかと思うが、そこも異世界の価値観の違いと思い無視することにする。

扉からさほど離れていない位置のところまで歩くとここに座れ、と言われたので大人しく腰を下ろした。わたしが座ったのを確認すると衛兵やその他の野次馬たちは壁のほうへと下がっていく。そしてゆったりとした動作で頭を垂れた。

その動作が向く方向は一点。わたしは意識的に見ないようにしていた正面にゆっくりと目を向ける。

「殿下、そちらに居るのが例の娘にございます」

部屋の最奥に居るその人の近くまで行っていたフェジが頭を下

げながら皆が殿下と呼んでいる“王子様”と思われる人にわたしのことを紹介した。

王子様は見るからに豪華そうな椅子に、足を組んで頬杖をつきながら座っている。美しい銀髪が目を引きいた。セハンの美しさは女性的だがあの王子様の美しさはどうみたって男性的だ。例えるならライオンとかがいい気がする。

王子様はその瞳でわたしを見ると、少し面倒くさそうな雰囲気をもし出しながら流れるような動きで腕を組み、その薄い唇を開く。

「いちおう名乗った方がいいだろう？我が名はアゼリ・ディア・アデュール。ここアデュール王国の第一王子だ」

初めて聞いた王子様の声はとても耳に心地よかった。それでいてわたしを酷く不快にさせる。その声色からすぐにわかるのだ。この王子様が全面的にわたしを馬鹿にしていると……。

遠くて目の感じまではわからないが、きつと見下したような目をしていることに間違いないだろう。

そのことを考えると少しだけ収まっていたはずのイライラがまたしても復活してきた。とにかくイライラして仕方がない。

「お前もよく分からないことが多々あると思うが、その質問にいちいち答えているほど俺は暇ではない。後で誰かに聞くといい。俺が言いたいことはただ一つだけだ」

わたしは上からモノを言う人間というのが昔から嫌いだ。見下すようなしゃべり方も気に触る。確かにこの王子様は偉いのだろうが……だからなんだというのだろうか？

わたしはこの世界の人間ではないし、この人に敬意を払う必要性も感じない。

目覚めて分けの分からない状況の中たいした説明もしてくれず、拳句の果てに手錠まで付けられる始末。

なぜこんな思いをしなくてはいけないのだろうか？

わたしは何のためにここにいるのだろうか？

わたしは一刻も早く元の世界に帰りたい。

「世界を救え“天子”」

どうしたらいいのだろうか？

イライラが、止まらない

苛立ちの限界

「さて……どこから話を始めるか」

王子様の説明はとても簡単で事務的なものだった。

その淡々とした口調すらわたしをイライラさせる。もうかなり重症なようだ。

「我がアデュール国をはじめ、この世界の人間はあるモノに今苦しめられている」

あるモノ？

そんな言い方せずはつきり言えばいいのに……

苛立ちのせいか、つい心の中で反論してしまう。それがいつ言葉となってしまうのか自分でもわからなくて少し怖かった。

「そのあるモノ……とはこちらの世界では“闇”と呼ばれている」

言いながら王子様は少し不快そうな顔をした。どうやらその“闇”とやらがお気に召さないらしい。それにしても“闇”なんてありきたりな名前だと思う。どこから見ても悪役ではないか。

「闇は黒い姿をした獣でな、人を食らう種族だ」

“人を食らう”？

その言葉にはさすがに驚きを隠せず目を見開いてしまった。

そりゃ日本にだって、人を食べようとする動物は存在するが、実

際に食べられたなんて話はあまり聞いたことはない。しかし今の王子様の口調からすれば、その闇は当たり前前に人間を食べてるみたいな言い方に聞こえた。

「ああ、それから上級の奴らは魔力も保持している。それこそ人間に引けをとらないほど強力な魔力をな……」

「……っ！」

王子様の発言について言葉を漏らしそうになった。

今この王子は“魔力”がなんちゃらか言わなかったか？ いや、絶対に言った。

これでこの世界には“魔法”が確かに存在することが分かった。ならやはり、セハンがわたしを“見た”というのも、フェジーがこの手錠をつけた原理も魔法が関係していると考えて間違いなさそうだ。

わたしはチラリと視線を自分の手首を拘束する手錠に向ける。もしこれが、魔法で付けられたものだとしたら、むやみやたらと動いて外れるようなことはない。きつと取るためにも魔法が必要になってくるはずだ。

わたしは今なお説明を続けている王子様に視線を戻した。王子様のおかげで重要な情報が手に入ったのだ。そのことには感謝するが、やはり苛立ちは止まってくれない。

「……そして、闇がここ数年で我ら人間を侵略しようと行動を開始したのだ」

声は淡々としているものの、王子様から感じる雰囲気はどこから怒りを含んでいるように思えた。

侵略とはまた……。その闇とやらは獣らしいが、魔力と同じく人

間に引けをとらないくらい知識も十分に高いのかもしれない。でなければ、侵略など考えるとはあまり思えない。

それにしても……その闇とわたしに一体どんな関係があるというのか。

と、そこまで考えてある嫌な予感がわたしの頭をよぎった。

この王子はさっき私のことを何と呼んだ？

“テンシ”と呼ばなかったか？

そう、まるでそれは御伽話に出てくる重要な役割のような名前に思えて他ならない。嫌な予想が頭の中を駆け巡り、どうが違くあつてほしいと心から思う。もしも、この予想が当たってしまったら……きっとわたしのイライラは限界に達してしまうような気がする。

「数年間闇と戦い続けたが、一行にこの戦いが終わる気配はない。むしろ、闇に侵略された土地が増えてしまっている。そこで……我が王族に代々伝わるある儀式を行うことが決定した。」

やめて、やめて、やめて、やめて、やめて、やめてっ！

悪い予想があたる瞬間が刻一刻と近づく感覚に、わたしのイライラは増幅していく。

「その儀式が、この世界を古くから守り続けてくれているという“天子”の巫女を召還するとう儀式だ。巫女といっても実質“天子”と変わらないらしいがな」

微かに笑いを含んだ王子様の声が聞こえた……気がする。

「そして昨日、我がアデュール王国の五大魔術師によりその召還の儀が行われ……お前が“天子”として召還された。お前は“天子”だ……世界を救え“天子”」

ああ……ついに。

わたしはもう自分のイライラを抑えることが出来そうになかった。悪い予想というものはどうしてこうもよく当たるのだろうか？
わたしはギョツと目を閉じる。

本当に、本当にもう……

「……おい、聞いているのか？」

なかなか返事をしないわたしに痺れを切らしたのであろう。王子様は不機嫌そうな声でそういった。

いったい何と言えはよいのだろうか？

“はい分かりました”と素直に言えはよいのだろうか？

この何がなんだか分からない状況で？

わたしは限界だった。あまりの苛立ちに高笑いしそうになるのを必死に押さえる。

もう限界だ……

わたしはゆつくりと顔を上げて、遠くに座る王子様を見た。日本でよく使っていた営業スマイルのような顔を顔に貼り付ける……

そして……

「……………王子様」

わたしはこの世界にきて初めて口を開いた。

奇立ちの限界（後書き）

やっと1話のところに話が追いつきました

前兆

「……………王子様」

そう言った自分の声は、自分でも驚くくらい淡々としていた。さつきまで説明していた王子様にも負けはしないだろう。

周りに野次馬たちは初めて言葉を発したわたしに驚いた様子で、少しのざわめきが王の間を包み込む。セハンやフェジーまでもが驚きの顔でわたしを見ていた。

王子様は多少驚いた様子であつたが、あまり変化はみられない。

「なんだ？」

偉そうな口調だと思った。それは妙にこの王子様に似合っている。きっと彼には王子としての気質があるのだろう。いや、もしかしたらその美しい容姿と口調が合っているだけなのかもしれないが……まあそんなことはどうでも良い。

彼が言葉を発したことで周りの野次馬は静かになったようだ。丁度いい。

わたしは営業スマイルを顔に貼り付けたまま、ゆっくりと彼に問うた。

「わたしの質問に答えていただきたいのです、王子様。よろしいですか？」

そう言えば、王子様は少し不機嫌そうな顔をした。

「お前、さっきの俺の言葉を聞いていなかったのか？お前の質問にいちいち答えているほど俺は暇ではない。質問なら」

「いいえ王子様」

わたしは王子様の声を遮ってそういった。すると周りの静かになつていた野次馬が少しざわつく。どうやら王子様の言葉を遮るのはあまりよろしくない行為だったらしい。

まあ、そんなこと知ったことではない。

「この質問は王子様に答えていただきたいのです。他の人間に聞いたのでは意味がありません」

真剣に、強い口調で言う。

まわりが一気に静かになった。この部屋に居る誰もが王子の返事を待っている状況だ。

数秒の沈黙。その後王子様は口を開いた。

「……いいだろう。申してみろ」

わたしは心の中で細く微笑んだ。この王子なかなか話が分かるじゃないか。

では早速……と質問始めようと口を開きかけたとき……

「ただし」

王子様の声が響いた。

わたしは微かに眉を寄せる。この王子は条件をつけてくるようだ。

限界までできていると思ったイライラがまた増徴する。どうやらこのイライラは無制限に拡大していくらしい。

「質問は1つのみだ。それ以上聞いてやる時間はない。公務が山のように残っているからな。お前とて王子という仕事がそんな暇なものだとは思ってなかるう?」

王子が首を傾げるしぐさをしながらそう言った。

確かに王子様は暇ではないだろう。いや、御伽話の王子様は案外暇そうだったような気もしなくもないが、それは御伽話のことなので置いておく。

とにかく、王子様が忙しいのは分かる。だからと言って“一つ”というのはあまりにも酷いのではないだろうか?

この王子、絶対に面倒くさがっているか、聞かれてはまずいことがあるに違いない。

だからと言ってこっちはお願いを聞いてもらっている立場なのでこれ以上強くはいけないのが現状だ。一つ聞いてもらえるだけマシだしよう。

本当なら文句の一つや二つや三つ言ってやりたいところだが、ここが我慢しなければ……

そう……

今考えるべきなのは“どう質問すれば多くの情報を聞きだすことが出来るか”だ。

わたしは頭をフル回転させて質問を考える。

と言っても聞きたいことはたくさんあるわけだ。その中からたった一つを選び出すというのはとても難しいことで、なかなか質問が定まらない。

だったら消去法でいくしかないだろう。そう考えてわたしは今まで聞いてた情報を整理していく。

そこで一つの答えが出た。

今まで聞いてきた情報の中で一番分けが分らないものをあげるなら“天子”がダントツなのだ。

ということはここは天子の質問をするのがベストということになる。

しかし天子の質問といっても、いろいろある。とういなかそもそも天子と言う存在自体、わたしは理解出来ない状況なのだ。

だからと言って、天子とはなんですか？なんて聞いたら「その他のヤツに聞けば良いだろう」と言われてしまふ気がするし……
……ああ、決まらない。

「さあ、早く申してみろ」

わたしは心の中で盛大に舌打ちをした。

王子様は残酷にも、わたしに質問を急かしてくる。というよりはわざとだろう。あまり考える時間を与えてはあちらに不利になる。

つくづくイラつく人だ。わたしは下唇をグツとかみ締めて王子を睨みつけてやった。

しょうがない。これ以上考える時間がないのだから言うしかないだろう。あまり時間をあけて、質問する権利を奪われたらたまったもんじゃない。

「では、お聞きしたいです」

わたしにもこの質問が最良のものは分からない。けれどこれ以

上の質問が見つからないのだ。

わたしは意を決して王子への質問を口にした。

静かな怒り

わたしは王子様の方を向きながら、口を開いた。

「わたしがその“天子”であるという確たる証拠は存在するのですか？」

そう問えば、王子は不思議そうに首を傾げる。

「正式な召還の儀を行いお前が召還されたのだ。お前が天子で間違いないだろう？」

何を当たり前のことを聞いているんだ。というような口調で王子様は言った。

確かそうかもしれない、だけど

「わたしは確かにこことは違う世界からきました。そのことは認めましょう。しかしながら、わたしは自分がその“天子”だとはどうしても思えないのです」

「なぜだ？」

わたしの言葉を聞き王子は意味が分からないというような声を出した。野次馬たちもコイツ何言ってるんだ？みたいな眼で見てくるがいちいち気になどしていられない。

「だってわたしにはこの世界を助ける力などもってないんですから」

につこりと微笑みながらそういった。

「王子様。わたしは元の世界ではしがない一般庶民です。何の力もない」

「魔術が優れていたりしないか？」

「いいえ。むしろわたしの国には魔術などというものそもそも存在してなかったのです。即ち、わたしにはその魔術とやらが全く仕えません」

そう言えば、誰かが息を呑む音が聞こえた。

「魔術が存在しない……だと？」

「はい。ここでは魔術が当たり前のようですが、わたしの世界では魔術など御伽話の世界のものです」

代わりに科学という素晴らしいものがありましたけどね。と心の中で言っただけ。

王子様や野次馬は魔術が存在しないということに驚き戸惑っているようだ。だがわたしの言いたことはまだ言い終わっていないので言わせてもらう。

「その様子ですと王子様たちが戦う“闇”は魔術を使って倒しているのですか？」

「……………ああそうだ。体力戦になるとこちらの方が不利になるからな」

それを聞いて、わたしはあふれ出す笑みを抑えきれなくなっていた。

「なら何故天子であるはずのわたしが魔術を使えないのですか？」

全く特別な力を持たないわたしにどうやって世界を救えとおっしゃるのです？」

わたしの言葉に誰もが押し黙ってしまった。この人たちは天子であるわたしが当然強い魔術を持っているものだと思っていたのだらう。

しかし予想がはずれた。

「しかし、お前は正式な儀で召還されたのだ。その事が何よりの証拠ではないか？」

「もしかしたら、その優秀な魔術師さんたちが儀式を失敗したのかもしれないではないですか？ ホンの少しの手違いでわたしが召還されてしまったとは考えられませんか？」

「そんなことあるはず」

「ないと言えますか？ その確たる証拠は？」

わたしはここぞとばかりに王子を攻めていく。ここで王子が崩れればわたしの勝ちだ。その五大魔術師の力とやらを借りて、さつさと元の世界に返してもらおう。

さあ、どうする王子様？

「……………そうだな」

王子様は呟くようにそう言ったあと、考えるそぶりを見せてみせた。どうやらいったん心を落ち着かせて考え直しているらしい。あのまま勢いに乗って崩れてくれれば楽だったのに。

わたしは少し残念な気持ちになった。

そして数秒の沈黙のあと、王子様はゆっくりと視線をわたしに戻す。

「たとえ、お前の前の世界に魔術がなかったとしても、こちらの世界にきたことで魔術がつかえるようになったかもしれない……と考えられないか？」

冷静な声で王子様はそういった。

「別に魔術ではなくとも良い。闇を倒すことの出来る特別な能力が召還されたことによって宿った。そういう可能性もある」

「……だけど、今のわたしには今までと何の変化もありません」

「それはまだ力が目覚めていないだけで、これから力が目覚める……ということもあるだろう？」

さっきまでわたしのほうが優位な状況にいたはずなのに、一瞬でわたしの立場が悪くなった。わたしは悔しくて下唇をかみ締める。

「そんなことっ」

「ないといえるか？その確たる証拠は？」

笑いを含んだ声で王子様は言った。

どうしてだろう、まだ五分五分くらいのはずなのにすごく負けた気分だ。足を組みかえる王子様をみて無性に腹が立つ。

どうしてわたしがこんなことに巻き込まれてしまったか。

わたしはこんなこと望んでいないのに。

元の世界に帰りたい。

またイライラが増幅する。
すべての原因は……………

「……確かに王子様の言うような可能性もあるかもしれませんが」

「だろう？」

「でも!!」

わたしはここに来て一番の大声を上げた。

「だけど……例えそんな力がわたしにあったとして……なぜわたしはその力を使って貴方たちを守り、救わなくてはいけないのですか？」

わたしは、周りの野次馬たちをゆっくりと見回し、そして最後に王子様を思いっきり睨みつけた。

「わたしは例えそんな力があつたとしても貴方たちを救おうなんてこれっぽちも思わない！」

そうだ……

こんな手錠を付けられて、まるで罪人のような扱いを受けてどうしてこの世界救おうなんて思える？

「わたしに貴方たちを救う義理はないわ」

わたしの声は思った以上に大きく王の間に響き渡った。

静かな怒り（後書き）

冷たい床

薄暗い部屋の中でわたしは盛大なため息をついた。

周りを覆うのは石のレンガ。所々にコケが生えていてどこか湿っぽい。目の前には鉄製の柵があり、いちおう置かれている布団らしき布は湿っていて寝れたものではない。

わたしは体育座りをしながらその湿っぽい壁に寄りかかっていた。背中が少し冷たいが仕方がない。

わたしがいるこの場所は簡単にいつてしまえば牢屋だ。

あの時……

「わたしに貴方たちを救う義理はないわ」

そう言っ たわたしを王子様はジッと見つめてきた。

「……フェジー」

「はい殿下」

しばらくの無言の睨みあいを先にやめたのは王子様で、軽くため息をついたあとフェジーの名を呼んだ。

「その娘の頭……少し冷やさせて来い」

王子様はそれだけ言うと、椅子から立ち上がった。そして彼が座っていた椅子の後ろ側にあった、小さな……といってもわたしが入ってきたメインの扉と比べればというだけだが、とにかくその裏の

扉から王の間を出ていつてしまった。

その瞬間周りにいた野次馬が騒ぎ始める。

「殿下あの顔ごらんになったか？」

「なんと命知らずな娘だ」

「見ているこつちがヒヤヒヤした」

「あんなのが天子のはずがない」

野次馬たちは思い思いの会話をし続ける、それが少し不快だった。

別にあそこまで言うつもりはなかったのだ。

だけど無性に腹がたつてついあんなことを言ってしまった。

だが、今言ったことに嘘偽りなど存在しない。

わたしがこの世界を救う気がないのは本当のことなのだから。

こんなよく分からない国をいきなり救えと言われてはい分かりましたなんていえるはずがない。

ましてやこの扱いだ。人としての優しさも荒んでくる。

わたしは今後の自分の扱いを考えながら小さくため息をついた。

「衛兵」

「はっ」

いつの間にかフェジーがわたしの直ぐ近くまで来ていた。衛兵に何かを伝えるとわたしの元に近づいてくる。

わたしは無意識のうちに手を握り締めていた。

「……そなた」

青い瞳がわたしをとらえて、少し呆れたような声をだす。王子に向かつてアレほどのことを言ったので絶対に怒られると思っていたため少し拍子抜けだった。

「頭がおかしくなったとしか思えぬ。殿下に向かつてあそこまで言う女など私ははじめて見たぞ」

すぐく馬鹿にされているような気もするが、あまり恐さは感じなかった。

最初この人に見つめられたときはあれほどの恐怖を感じたのに……

きつとフェジーはわたしに呆れる余り、わたしを威嚇することを忘れてるに違いない。

それを良かったと思うべきなのか、どうなのかよく分からないが、わたしはさっきの威嚇しっぱなしのフェジーよりも今のフェジーのほうが断然いいと思った。

まあ、当たり前か。

「殿下にたて突いたことは素直に感激するが、あのようなこと殿下に言つて許されることではない。自分で蒔いた種だ、覚悟はできているだろう？」

もちろん分かっている。わたしは素直に頷いた。

フェジーはそんなわたしを見ると、視線を外して後ろに居る衛兵を見て一言。

「牢屋につれて行け」

「……………えっ？」

わたしはきつとかなりの馬鹿面をしていたことだろう。

それなりの処罰を受けることは確かに覚悟していたが、まさか“牢屋”とは予想していなかった。

フェジーに命令を受けた衛兵が近寄ってきてわたしの腕を取る。

「ああ、待て。その前に」

なんだろう？

これ以上の処罰をゴメンだぞ、と言うような意味をこめてフェジーを見てやった。

「そなたという者は……」

フェジーは心底呆れた様子でそういうと、わたしの腕を手にとった。

なんだろうと思ってその手を見つめていると、案外フェジーの手が綺麗なことが分かった。これはセハンにも引けをとらないかもしれない。などと考えていると、フェジーはすでにわたしから手を離している。

そして、フツと手の違和感がなくなったことに気付く。

手を動かしてみれば、自分の両手が自由になっていることが分かった。

どうやら手錠を解いてくれたらしい。

なんで？という意味をこめてフェジーを見上げると

「牢屋にいる人間に手錠は必要ないだろう？」

と、なんとも分かりやすい答えが返ってきた。

「つれていけ」

フェジューは呆れた顔をそのままに衛兵にそういうと、野次馬の群れの中に消えていった。

わたしはといえば、そのまま衛兵に囲まれながら腕を引かれ、牢屋にぶち込まれたというわけだ。

手首も自由になったわけだし、逃げ出してみようかとも考えてみたがアレだけの衛兵を自分が倒せるとは到底思えなかったので諦めた。

そんなこんなでわたしは今この湿っぽい牢屋にいるという訳である。

こんなところに女性を入れるなんてどんな神経しているのだろうか

……

あの王子……次会ったら殴ってしまうかもしれない

記憶の欠片

わたしはあまりの寒さに目を覚ました。

ぼやけた視界と思考の中で起き上がろうとすると、身体が痛むことに気がつく。

周りを見回してみると、コケの生えた石のレンガに、冷たく湿った空気。

温かい自分の部屋のベットとは大違いだ。

しばらく、ぼーとしながら考えていると、だんだん自分の状況を思い出してきた。

ああそうだ、

確かわたしは、異世界に“天子”とやらとして召還されて、青い瞳のフェジーに会って、そのあと女性のようなセハンに会って、魔術で手錠を付けられて、王の間に行って、それから王子に会って、イラついて文句を言いはなって、最後にはこの湿っぽい部屋に連れてこられたのだった。

なんだが、思考回路がまだ眠っているらしい。頭の動きがいまいちだ。

わたしは小さくため息をつき、布団もどきから離れると相変わらず湿っぽい壁に寄りかかった。

毛布もどきがあったからといっても、ほとんど硬い石の床で寝ていたのと同じため体中が痛い。

本当に、女性をこんなところに入れる王子の気が知れない。

ついでに言えばその命令を素直に受け止めたフェジー率いる衛兵たちも気に食わなかった。一人ぐらい女性の身体を氣遣うことができる紳士的な男がいたっていいのではないだろうか？

わたしは盛大なため息をつきうな垂れた。

いったいいつまでこの地下に閉じ込められなくてはならないのだろうか？

いや、もしこの部屋から出してもつらたとしてもわたしは“天子”としての役割を押し付けられるだけで、元の世界には帰してもらえない気がする。

というか絶対そうに決まっている。

わたしは、天子なんてものになりたくはない。

何の恩義もないようなこの国を助けたいとは思わない。

わたしが願うのは唯一つ……もとの世界に帰ることだ……

家に帰れば、今までわたしを温かく見守ってくれた両親や、生意気だけどなんだかんだで優しい弟がわたしを待っていてくれる……

どうしてだろう……？

この世界に来てまだ1日と少ししかたっていないのに、ものすごく自分の部屋が恋しい。お母さんが作ってくれたお味噌汁が飲みたい。お母さんの味噌汁は絶品なのだ。

そう考えた、その時だった。

「……みそ……しる？」

わたしはフツとあることを思い出したのである。

それは、今まで全くと言って良いほど思い出せなかったここに来る直前の記憶だった。

そう……わたしがここに来る前の日本。あの日の晩御飯は鮭と味噌汁だった。母の味噌汁は昔から大好きで、その日はもお替りしたのをしたのを覚えている。
デザートのアイスを弟と取り合って、結局文句をいいながらも弟が譲ってくれた。

そしてそのあと……わたしは自分の部屋に行ったのだ。

自分の部屋でくつろいでいた時、いつもと変わらないその時間にアレは起こった。

アレは落ちる感覚に近かったと思う。

急にふらつと眩暈がして、次の瞬間にはまるで床が抜け落ちたかのようにわたしは落ちて行った。

そう、落ちたのだ。

あんな奇妙な体験をしてどうして忘れていたのだろうか？

まあとにかく、あれが召還というものなのだろうか？

「……………あれ？」

いや待てよ、その前に何かあった気がする……

わたしはまだ重要なことを忘れていないだろうか？

あれは……そう、眩暈がする前だ。

『……………を……………っ』

何かが聞こえて……

あれは誰かの声？

わたしは何かを言われたのだろうか？

いや、あの言葉も召還の一種だったと考えられる。そうすればあまり重要なことではないとも思うが……

「あぁっ……………もうー!!」

あの言葉、あの言葉が何故かすごく重要な気がするのだ。

ただはつきりしないから気になるというだけかもしれないが、とにかく気になる。

あと一歩というところで記憶の中の言葉が出てこなくなる。そこまで分かっている気がするのに、出てこない。

わたしは苛立ちのままに頭を掻きむしった。

あの声の主は、わたしに言ったのだろうか？

自分の記憶力の悪さに苛立ちはじめたとき

「娘……」

聞き覚えのある声だった。

ハツとして顔を上げると、青い瞳と目があう。

そこには昨日知り合ったフェジーがいた。手に持ったランプの光が微かに彼の顔を照らしている。

何しに来たのだろうか？牢屋に入っているわたしを珍獣のように笑いに來たのだろうか？

わたしはわけが分からず首を傾げると、フェジーは懷から何かを取り出し、牢屋を閉ざしている鍵をカチャカチャと弄った。

わたしはますます分からなくなり、その手をぼおつと見つめてみると次の瞬間には鍵が外れてフェジーが牢の扉を開いてくれた。

わたしが目を丸くしながら、フェジーの顔と開いた牢屋の扉を交互に見うめる。するとフェジーは昨日と同じく呆れ顔をした。

「出る」

一体どういう風の吹き回しだろうか？

わたしは思わず不審な目をフェジーに向けた。

部屋

“もしかしたらわたしを逃がしてくるのかも”

そんなことを予想したわたしが馬鹿だった。

一日あの牢屋にいたせいで思考回路が少し壊れかけていたのだらう。

「王子がさすがにこのようなところに閉じ込めるのは女性に対して申し訳ないことだったと反省している。とりあらず客室に移動させるとの命令が出たので迎えに来た」

そういうことが……

にしてもあの王子。自分の失態に気付くのが少し遅すぎはしないか？

普通小1時間もすればこんな冷たくて硬くてコケまで生えてる牢屋に女性を入れることが間違いだって気付くだろう。

わたしはついつい眉をしかめてしまった。

「言いたいことは分からなくもないが、殿下はまだ幼い。自分の怒りのままに行動してしまうことも多いのだ」

まるで、だから許してやってほしいとでも言うような口調に嫌気がさす。この男少し……いやかなり王子に甘すぎはしないか？

しかも王子が幼いつて言ったけれど、わたしが見た感じの王子様は17、8くらいに見えた。日本の基準で考えるなら確かにまだ子

供ではあるものの、もうすぐ大人という丁度境目あたりの時期である。

怒りに任せて、女を一晚牢屋に閉じ込めるのはいただけない。

一般庶民で、頼りない両親やなかなか行動しようとしなない弟の変わりにゴキ退治をやっていたようなわたしだからまだよかったものの、これがどこかのお嬢様だったら壁を歩くゴキそっくりの物体を見つけた時点で泣き喚くだろう。

いや、もしかしたらこの湿った石レンガに座するという時点でアウトかもしれない。

とにかく、王子はもう少し大人になるべきだ。

「娘……眉間のしわをどうにかしろ」

そう言ったフェジীর眉間にもすっかりとしわが出来ていたのは黙っておくことにした。

牢屋をでると、長い螺旋階段を登りやっとな豪華な装飾がされた廊下へと出ることが出来た。

いちおう言っておくが、わたしの年齢は決して若くなどない。運動をすることなんて滅多にないのだ。

わたしは螺旋階段のあまりのキツさに、廊下に出る頃には額に汗を掻きながらゼイゼイと息を切らしていた。

一方わたしのかなり前方を歩いていたフェジীর息の一つも切らしていない。まあその肉体からしてかなり鍛えているような感じが

するから当たり前だろう。

わたしは涼しい顔をするフェジを恨めしく思いながら、そんなわたしの思いなど知りもしないでサッサと歩き出す彼の後を追いかけた。

こっちは疲れているのだから、小走りするのは止めてほしい……

しばらく長い廊下を歩いているとフェジはある扉の前で足を止めた。

「ここが客室だ」

そういつて扉を開くとわたしを中に促す。どうやら昨日わたしが目覚めた部屋とは違う部屋のようにだ。

わたしはおそろおそろ中を覗き込むと、言葉を失った。

「どうかしたか？」

なかなか部屋に入ろうとしないわたしを不振に思っつかフェジが声をかけてくる。

どうしたもこうしたもないだろう。

「……あの王子には女性の扱いというものを教えたらいかがですか？」

呆れて声も出ない……じゃなくて呆れて声も出てしまった。

フェジはわたしの言葉の内容よりもわたしがしゃべったことに

驚いているように見える。昨日一回しゃべったのにどうもわたしがしゃべることに慣れていないようだ。

わたしは目を見開いたまま固まっているフェジをほったらかしたまま一歩その部屋に踏み入れてみた。

普通、こういう話では豪華な部屋があてがわれるものではないのだろうか？豪華でなくともせめてまともな部屋であろう。

しかしこの部屋はどう見てもまともじゃなかった。

床に錯乱した本と紙くずの山。ベッドはあるにはあるが埃をかぶっているし、壁は黄ばんでいた。端のほうに置かれている木の机は少し腐りかけているように思える。一人がけのソファは一見平気そうに見えたがよくよく見れば虫に食われたいた。

なんなんだこのボロ部屋は……

フェジは客室に案内するといっていたが、これが客室？

わたしはどういうことだ！っという意味をこめてフェジを睨みつける。

フェジはため息を一つつくと重たそうな口を開いた。

「この家はかなり古くてな。いちおう王家の持ち物らしいが、ほとんど使われていないのだ。使用人もおいてないので部屋は汚れまくっている。なんとか綺麗な部屋は他の人間が使っているから、残っている部屋で一番綺麗な部屋がこれだ。文句を言うな」

いや文句がありまくる。

どうしてこうも女性を気遣える人間がいないのだろうか

女性のために自分の綺麗な部屋をゆずろうとする心の優しい人間
はいないのか……全く。

「あつ……………わたしが最初に目覚めた部屋は？」

あの部屋はなかなか綺麗だった。開いているならぜひともあちらにうつりたいと思ったが……

「あの部屋は、王族が使っている客室だ。あときは召還のために特別に使わせてもらっていたがもうつかえん。使いたいのなら王にでも申してみろ」

はい……

そういわれて“それでもいいわ”なんて言えるほどの度胸はなかった。

しょうがない、まずは掃除からはじめましょうか……

それにしても

仮にも“天子”なのにこの扱い……………どうなのだろうか？

感情

「すみませんが掃除用具はありますか？貸して頂きたいのですが……」

掃除をしなければ寝る場所しないと判断したわたしはファジーにそう尋ねた。

「……衛兵に聞いてみよう」

どうやらまだわたしがしゃべることが可笑しいらしい。こっちは一度しゃべってしまえば口を閉ざすのが馬鹿らしくなってきたというのに。

やはり言葉がないというのは不便だ。目線だけで訴えるのはどうも難しい。

ファジーは衛兵を探しに部屋の外に出て行き、その数分後。一人の衛兵が掃除道具をもって部屋を訪れた。衛兵はそれをわたしに手渡すとさっさと帰ってしまう。

さっきも思ったが

“天子”の扱いが少し酷くないだろうか？

仮にもわたしは世界を救うために召還された天子であるはずなのに、どうも周りの反応がおかしい。あたしの想像だと、こういう特別な人間はもつともてはやされるものだと思うのだ。

手錠を付けられたり、牢に入れられたり、この部屋にしたってどうも天子の扱いぼくはない。

わたしは何か引つかかるものを感じながら掃除を開始することにした。

まず手始めに床に散らばっている紙くずたちを拾い本を本棚（腐りかけ）にしまっていく。何気ない気持ちで本の題名に目を通して見たが、やっぱりというか読めなかった。

分厚いその本には見たこともないミミズのような文字が書かれている。やはりここは異世界なのだと再確認して、はたと思った。

ここは異世界で、わたしは異世界の文字は読めない。
しかし、会話は出来る。

これって少しおかしくないか？

字はちがくても、言葉は日本語ということなのだろうか？

「……うつん……ちがう」

わたしは呟いて、そして自分の言った言葉に驚いた。いままで無意識に使っていたがわたしがしゃべっている言葉は日本語ではない。

簡単に言ってしまうえば、こちらの言葉だった。

わたしは驚愕して日本語を思い出す。

『あっあっ、あ、い、う、え、お』

「……言えた……」

なるほど、意識をすれば日本語がしゃべれるようだ。しかし、無意識にでてくるのは日本語ではなくて何故かこちらの言葉と思われる言語になってしまう。

どうして気付かなかったのだろうか？

ふつつ気がつくはずだ。

なのに気がつかなかった。それほどまで自然に、こちらの言葉がこちらの言葉が出てきていたということだ。

なぜ？

どうして？

こちらの世界に来てから疑問だらけである。

なぜわたしが天子として召還されたのか。

なぜ天子であるはずのわたしへの態度が悪いのか。

天子とはそもそもどういう存在なのか。

こちらの世界に来る前にわたしが聞いた言葉はなんだったのか。
どうしてわたしはこちらの言語を理解しているのか。

これだけじゃない。

もっともつとあるはずだ。

疑問は増える一方で一つだって解決しない。

どうして、どうして、どうして、どうして！

そればかりが頭に浮かぶっ

そこでふつりと糸が切れるような感覚がした。

「もうやだ……」

わたしは小さく呟く……

家に帰りたい。

母に会いたい父に会いたい弟に会いたい友達に会いたい。

牢屋にいるときもそうだったが、わたしはどうも一人になると考え込んでしまう性質のようだ。

こちらの世界に来てあまり動揺などしていなかったはずなのに、どうしてか今は心にぽっかりと穴が開いているように感じる。寂しさと切なさが増え、涙腺が緩んできた。

家族や友達の温もりがとても恋しく感じる。

わたしは上を向き涙が零れ落ちないようグッと下唇をかみ締めた。

泣いている場合ではない。なんとしても帰らなくては……

そのためにはもっと強くならなくてはいけない。わたしはこんなに弱い人間ではなかったはずだ。周りに流されて、心を痛めている暇などない。

もっと情報を集めて、この世界のことを知り、自分が天子などではないとあの王子たちに知らしめてなんとしても帰る方法を探します。

涙は家族との再会までとっておこう。

わたしはギュッと一度強く目を瞑り、掃除を再開した……

そうして一通りの片づけが終わるとふうと息をはく。

することがあつてよかった。あのまま何もすることがなかったらずっと考え続けていたことだろう。

ふわりと窓から風が入ってきて気持ちいい。

わたしは少しだけ笑みをこぼす。

窓から見えるアデール国はとても美しいことが分かった。ビルなど一つも建っていないくて、緑に囲まれていたる町並みはとても美しい。

空は日本と同じ青色であったが、太陽と思われるものではなくて空には昨日と同じように赤と青二つのつきが浮かんでいた。

しかし昨日と違うのは、赤い月の方が前に出ていると言うこと。

青が前に出るときは夜ということになるのかもしれない。

「本当にキレイ……」

わたしはしばらくの間その美しい町並みを眺めていた。

美しいと思う反面、グチャグチャに壊してやりたいと思う憎しみの心を抱きながら……

感情（後書き）

見直ししてませんので多少の間違いは許してください

訪問者

掃除さえしてしまえば、この部屋はそこまで汚くはなかった。

確かに床には消えない汚れがあるし壁も黄ばんだままだけど、床に錯乱していたものを片付けて、埃だらけのシーツを新しくし、虫食いソファはもう一枚シーツをいただいてソファカバーとすれば大して気にならなくなった。本棚や机、窓などは雑巾で拭けば、見れるようにはなる。

窓の外を眺めながらわたしはぼおとしていた。なるべく何も考えないように努力する。

これ以上思考回路がめちゃくちゃになつては正しい判断もできない。

やるべきことはまずはじめに情報を集めること。それ以外のことなど考えず行動しなければと自分に言い聞かせる。

どれくらいそうしていたのだろうか？

ふいに部屋をノックする音が聞こえた。

ぼおとしていたわたしはビクツと肩を震わせて目を見開いたままノックされた扉を凝視する。

いったい誰がきたのだろうか？

フェジーが掃除は終わったかどうか見に来たのかもしれない。

わたしは恐る恐る扉に近づくと扉を小さく開く。

開いた隙間からドアの外を見ると、女性のような美しい笑み

を浮かべた人物がそこに立っていた。

「こんにちはお嬢さん、お部屋の居心地はどうかかな？」

45度に首をかしげて聞く姿はなんとも美しい。

わたしは部屋を訪れたのが見知った人物であったことへの安堵とともに、昨日わたしが牢屋に入れられても助けてはくれなかった彼に微かな怒りを覚えた。

しかし、そんなことなど表情には出さないように必死に表情を押さえる。

「……こんにち……セハンさん」

張り付いた喉からなんとか声を絞り出す・

するとセハンは少し驚いたような顔をした。

この人もわたしがしゃべることになれていないだろうか？　と思っただが

「僕の名前……覚えてたんだね」

どうやらそのことに驚いたらしい。

そりゃ、おぼえているだろう。

会社にいるときは得意先の人間の名前を覚えることなんてよくあったことだし、名前を覚えるということはそこまで難しいことじゃない。

そこまで驚くことはないと思うのだから？

わたしは不思議に思いながらセハンを見つめた。

「いや……だってお嬢さんかなり警戒してたからね。聞いてないかと思ったよ」

「……そうですか」

警戒はしていたが話は聞いていた。少しでも情報を集めようと必死だったからだ。

それに今だって警戒していることに変わりはない。ただそれなるべく顔に出さないように努力しているだけだ。

「えっと、少し入れてもらってもいいかな？」

セハンの言葉を聞き、わたしは扉を大きく開け彼を中へと促した。すると彼はありがとうと言いいながら笑顔を向けてくる。

部屋の中に入った彼はへえ……と感心したように部屋の中を見回した。

「あのボロ部屋をよくここまでキレイにしたね」

その言葉に、そうだろうと言ってやろうかと思ったが止めておいた。

しかし、部屋をほめられたことは嬉しかったのでありがとうございますと例を述べておく。

部屋には一人がけのソファにしかないので、そこをセハンに進めてわたしはベットの端に腰をかけた。

「それで……何のようですか？」

わたしはさつさと本題に入ろうと思いそう言う。
するとセハンは、少し驚いたように目を見開いた。

「何って、お嬢さんの診察にきたんだよ」

その言葉に今度はわたしが驚きで目を見開いた。

「診察……って、セハンさんお医者さんだったんですか？」

「そうだよ。言ってなかったっけ？」

聞いてません。

「わたし……セハンさんは魔術師だと思っていました」

「へえ……どうして？」

「だってセハンさん、最初に会ったとき“見た”って言ったの
で……」

あれは魔術の一種だと思ったわたしは、彼が魔術士なのだろうと
思っていたのだ。

わたしの言葉を聞いてセハンはああと頷いた。

「魔術師であることには違いはないけど、治療とか心理専門の術師
なんだ。攻撃系の術は僕に向いてなくてね」

そう言っただけで笑った。

その笑みがなんだか暗い気がしてわたしはその話にはあまり触れ
ないようにしたほうがいいなと思った。

「じゃあ、さっさと診察してくださいよ」

話を変えるために、わたしはそう言って両手を広げ、どんと来いと構えてみせる。

医者に身体を見られて恥ずかしがる年齢などつくに過ぎた。それにセハンは女性ばいのでさらに気にはならない。

とっとと見てもらおうと思ったのだが、そんなわたしにセハンは苦笑した。

「いや、診察はもう終わったよ。お嬢さんには悪いけどさっき術をかけて軽く見させてもらったんだ」

いつの間に……と思いながら魔術ってすごいなと感心する。

「ああでも、もっと詳しく見るためには触れないといけないんだけどね。ご希望なら診察するけど？」

につこり笑って笑顔で言ってくる彼にわたしは引きつる顔を隠せずにいる。

「……丁重にお断りします」

「それは残念」

残念がらなくてよい。

外に出たら

診察もどきを終えたセハンが部屋を出て行くと、室内は急に静かになった気がした。

セハンはこのあと他の診察が詰まっているらしい。
なんだかんだでちゃんと医者をやっているようだ。

また一人に戻り、少しずつ思考はおかしくなる感覚をおぼえたわたしは何かすることはないかと考えて、散歩でもしようかと考えた。
しかしそこで、わたしはこの部屋を出ても大丈夫なのだろうかと考える。

少しだけ部屋のドアを開けて周りを見回してみるが、衛兵の姿は見当たらない。

出来ればここを出て良いか聞きたかったのだが……

わたしは少し考えて、部屋から出た。
とりあえずこの階を歩いて衛兵を探し出そうと思ったのだ。

しばらく歩いてみるが、都合が悪くなかなか衛兵が見当たらない。
わたしは困り果てて、一回部屋に戻るうかと思った。しかし部屋に戻ったら戻ったで、深く考え込んでしまうことは分かりきっている。

わたしはその場にたたずんだまましばらく考え込んでいた。
そのときだった……

「そこで何をしている？」

いきなり背後から声をかけられてビクツと肩が震えた。振り返ってみると、衛兵らしき人物がこちらを睨みつけるように見ている。その手が腰に付けられて剣の鞘にかかっていることをみてわたしは驚愕した。

目を見開いて、この状況をどうしたらいいのか考えるも頭が白くなってしまうてどうしようもない。

「聞いているのか？何をしているのかと聞いている」

衛兵は答えられずにいるわたしに警戒した様子で剣を鞘から引き抜いてわたしに向けた。

「あつ……そのつ、違います！違うんです！」

「何が違うと言う」

衛兵は低い声でわたしに問う。

どうしよう、どうしよう

そんなにわたしは怪しかっただろうか？

というかこの衛兵はわたしが“天子”だと知らない？

だってわたしが天子だと知っていればここまで警戒することもないだろう。いや、知っていて天子が目障りだからこうして剣を向けていると言っこともある。

わたしは恐怖のあまり一歩後ずさった。

「わたし……その、この階にある客室を使わせてもらって……さっ散歩をしても良いかどうか聞こうと思ったら誰もいなくて……その……人を探してまして……」

混乱しているからか言い方が変になっている。

今まで刃物を向けられた経験などないのだ。さすがのわたしだってこれには対応できない。

衛兵はわたしの言葉を不振そうに聞きながら、首をかしげた。

「この階の客室を使っている人間がいるとは聞いていないが？」

「えっ……ああ、その今日から使っているの……まだ伝わっていないでしょう」

伝わってないって……

人を部屋に置くらせめてそのことを衛兵全員に伝えておいてほしい。

このまま疑われて牢屋に逆戻りとか絶対に嫌だ。

あんなコケが生えていて、湿っぽくて、ゴキそつくりの物体が壁を這い回っている牢になど二度と戻りたくはない。

衛兵はわたしに剣を向けたまましばらく考えていたが、少しするとその剣をおろしてくれた。

わたしはそのことにホッと安堵のため息をつく。

なんとか信じてもらえた……のだろうか？

「……王都騎士団2番隊隊長のレヴォラ・シールドだ。先刻、外の警備より戻ったばかりなので屋敷内の状況がよくわかっていない。お前が本当に客人であるのなら無礼は詫びよう。とりあえず確認を

とるためにもついてきてもらいたいのだが良いだろうか？」

まだ疑われているらしいが、まあなんとか即効牢屋行きということとはなくなったらしい。

にしてもこの男いま騎士団のナンチャラ隊長とか言った気がする。そんなに偉い人なのか？

はつきり行つてそうは見えない。

筋肉はたしかに無駄なくついているように見えるが、服装がそのへんにいる衛兵とさほど変わらないし、なんというのだろうか？顔というか雰囲気と言うかそういうのがどうも隊長という感じではないのだ。

わたしはうーんと首を傾げる。

「……聞いているのか？それとも確認を取られたら困ることも？」

そこまで言われてわたしは彼……レヴォラと言ったか？ものすごく言いにくい名前だな……

じゃなくてレヴォラに質問をされていたことを思い出した。

「ち、違います！！確認でもなんでもとってください！牢屋に行かなくていいならなんでもしますから！」

ちょっと観点がずれた気もするがこれが本音だ。

レヴォラは牢屋？とわたしが言った突拍子もない言葉に首をかしげている。

しまった。余計なことを言ってしまったかもしれない。

「なっ、なんでもないです。確認取るなら早く行きましょう。ついでに散歩をしても良いのかとか聞きたいです」

「……そうか……ならお前を客として招待した人物の名前を教えてくださいのだから……」

わたしを客人として招待した人物？

そんなの、人の気持ちも考えずに自分のことしか考えていないあのクソ王子に決まっているだろう。

いや、わたしを召還したという五大魔術師とやらでもいいかもしれない。

そう思っ言ってやろうと思っただがフツと思う。この男に、“わたしを招待したの王子です” または“五大魔術師です” なんていつて信じてもらえるだろうか？

もらえない気がする……

ならセハンだとも言おうか？

いや駄目だ、セハンは診察があると言っていた。邪魔をするのは大人の礼儀としていただけない。

と、すると……

わたしの頭に浮かぶ人物は一人しかいない。

「ああえとその……フェジーさんです……」

神塔

わたしは前方を歩く衛兵レヴオラをについて行きながら、心の中で自分の大失敗を攻め立てていた。

わたしを招待したのはフェジーだと言った瞬間のあのレヴオラの顔……

驚きと困惑、そしてありえないという言葉が顔全面に書いてあるように思えた。

「……………フェジーさん……とは、神官長の聖・フェジー様のことと言っているのか？」

しばらく黙り込んでいたレヴオラが確かめるようにそう言ってきた。

確かに上にたつ人間だろうとは思っていたが、フェジーが神官長とは驚きだ。

というか神官長？

あの男が神官長って……

どう見たってあの男は軍隊に入っているようにしか見えないのだが……？

あの筋肉にあの睨み。思い出すと今でも少し怖い。戦場に出ればどれだけ活躍することだろうか。

神官というと神様に祈を捧げているイメージだが、フェジーは祈を捧げているというよりも、剣を振るっている姿が一番想像できる。

はつきり言おう、似合わない。

フェジューは仕事の選択を大いに間違ったような気がする……

そんなことはどうでもいいとして

フェジューがそんな大層な人だとは思っていなかった。これでは王子に呼ばれました、もしくは五大魔術師に呼ばれました、と言ったときに想像した反応そのままだ。

まあ言ってしまったものはしょうがないだろう。

「そうです。そのフェジュー様です」

疑われないように強めに言ってみたが、やはりレヴォオラは疑っているようだ。

どうするかな考えてみるが、どうしようも出来ない。

やはりこれは牢屋戻り決定だろうか？

そうしたらまたフェジューが助けてくれるだろうか？ いや、きっと2度目はないだろう。

「……分かった。とにかくフェジュー様のところに向かおう」

わたしがこれからのことをどうするか考えていたところで意外にもレヴォオラはそう言ってくれた。

もしかしたらレヴォオラは今まで出会った人間の中で一番良い人間かもしれない。

わたしはヒラリと使い古したマントを翻しながら歩き出すレヴォオラに好感をおぼえた。この世界にきて初めてのことだろう。

わたしはそのことに感動して少し機嫌良くレヴォラの後について行ったが、歩きはじめて20分。

わたしはさっきまで浮かれていた自分に馬鹿と言ってやりたくなかった。

周りを見わたすとその景色はさっきまで自分がいた廊下や部屋とは次元が違っている。

フェジーに会いに行くということはかなり大変な作業らしい。わたしはやつとそのことに気がついた。

迷わず家の外に出て行くレヴォラを見て思わず首をかしげたわたしを見かねてかレヴォラは“フェジー様は裏の神塔にいらっしゃるからそちらに向かっている”と説明してくれた。そこまではいいのだが、その神塔とやらが無駄に豪華なのだ。

門もわたしがいた家に比べたら無駄に豪華だし、中に入ればそこ中に神様が女神様と思われる絵が描かれている。

銅像もかなり多い。

ついキョロキョロしながら神塔内を見回すわたしをよそにレヴォラはずんずんと進んで行った。

螺旋階段を登り、長い廊下を進み、そしてやつと一つの大きな扉の前で足を止める。

「ここがフェジー様の執務室だが………入るぞ？」

いちおう確認を取ってくるレヴォラはやはり優しいのだろう。

わたしは小さく頷いた。

ここまでできたらどうしようもない。腹を決めるしかないだろう。

レヴォラはそんなわたしの様子を一瞥した後、部屋の扉をノックした。

「……誰だ？」

「王都騎士団2番隊隊長レヴォラ・シールドでございます。確認していただきたいことがございますので少々お時間よろしいでしょうか？」

フェジীর声がして、その後レヴォラが答える。なぜかものすごく緊張してきた。

わたしはドキドキとする胸に手をあて、心を落ち着かせる。

「確認？ いいだろう入れ」

フェジীর許可が出たので、レヴォラは一瞬わたしを見ていいか？と聞くような素振りを見せてくれた。わたしはその行動に頷くとグツと手を握り締める。

「失礼致します」

そう言っ て礼をとりながら部屋に入るレヴォラ。わたしの姿はレヴォラの影に隠れてまだ見えていないだろう。

「どうしたレヴォラ。外に何か異常でも？」

そういえばレヴォラは外の警備から帰ってきたばかりだと言っていたな。

「いえそうではなくて、少々会っていただきたい人物がいるのですが……」

「会わせたい？誰だ」

その言葉にレヴォラは少し体をずらしてフェジーにわたしが見えるようにした。

「そなた……」

フェジーはつい数時間前に会ったはずのわたしの姿に分けが分からない……というような、呆れたような顔をした。そして何か言おうとして、すぐ口を閉じる。何と言っているのか分からないのである。

「ああ……その」

わたしだって何を言っているのか全く分からない。

レヴォラはレヴォラでわたしとフェジーの何とも言えない空気はどうしたものかとわたしたちの顔を交互に見る。

何だか面倒なことになってしまったな。

こんなことになるのならやっぱり大人しく部屋で休んでいたほうが良かった。

神塔（後書き）

運命

「それでレヴォラ。そなたのいう確認とその娘に何の関係があるというのだ？」

しばらく無言の空間が続いたがそれを破ったのはやはりというかフェザーだった。その言葉を聞いて不思議そうな顔をしたまま気を緩めていたレヴォラは表情を引き締めた。

「あつはい。実は警備から帰ってきて廊下を歩いていたのですが、その娘が廊下を歩いていまして、見たことのない顔のため確認を取ったところ、ジェシー様の客人だと言うものですから確認をと思いまして……」

レヴォラの言葉を聞いたジェシーはわたしを見ると心底呆れた顔を見せた。一体何をしていたんだと顔に書いてあるようにしか見えない。

別に散歩をしようと思ったただけなのだが……。

「……わたし個人の客人ではないが、この娘は怪しいものではない気にするな」

フェジーは呆れ顔のままレヴォラに視線を戻すとそういった。レヴォラはそんなフェジーの表情をみて少し驚いたような顔をする。しかしすぐに表情を戻すとフェジーに礼をとった。

「そうでしたか。お忙しいところお時間をとってしまい申し訳ございませんでした。それでは失礼致します」

そう言つて扉から出て行こうとしたとき。

「いや待て」

フェジ―はそういった。

なぜ止めるのだから……。

出来ればこのまま何事もなかったかのように部屋に戻り、今度こそ大人しくしていようと思つたのに。いや戻つたら戻つたでいろいろと考えてしまふのは嫌だが、こういうトラブルを起こすよりは数倍マシだ。

「何でしょうか？」

レヴォラは身体の方を戻してフェジ―に問うた。その顔にはわたしと同じく困惑の色が浮かんでいる。

「とりあはず入れ」

困惑を隠しきれないわたしたちをさして気にした様子もなく、フェジ―は仕事をしていたのである。机から立ち上がると、その机の前に置かれていた対面式のソファに腰掛けた。

「さつさと座れ」

そんなフェジ―を見て仕方がなく部屋の中に入る。
しかしそこで困ってしまった。

この部屋にあるのは二人がけのソファが二つ。そのうちの一つはフェジ―が占領しているので座ることは出来ない。
のこるソファは一つだが、さすがにさつきであつたばかりの人物

と肩を並べて座るのは気が引ける。

どうしたものかとレヴォラに視線を向けると、彼はソファの後ろに立っていた。

「娘、お前が座って構わない」

レヴォラはそういった顎でソファをさす。

「……いいのですか？」

一緒に座るのは嫌だが、だからと言って一人で座ると言うのも良心が痛むと言うものだ。わたしはチラチラとソファとレヴォラを交互に見た。

「娘、気にすることはない。そなたと違ってレヴォラは騎士だ。立つことには慣れている。それにそなたは女性であろう？ 気にすることはない」

どうしたものかと考え込むわたしを見かねてフェジーがそういった。

本当にいいの？ という意味をこめてレヴォラを見上げると彼は少し面倒くさそうに頷いてくれた。

「ありがとうございます」

せつかくのご好意をいつまでも跳ね返すのもなんだろうと思いはたしはレヴォラに一礼をした後ソファに座った。

そしてそのソファの柔らかさに驚愕する。フワフワしてバウンド

してしまった。生地もとても高級そうで肌触りが良い。あのボ口部屋の虫食いソファとは比べ物にならない。どうしてここまで扱いが違うのかとわたしはまたあの疑問を思い浮かべた。

「それにしても、まさかそなたたちが偶然出会ったとは思ってもいなかった。運命と言うか何と言うか……」

やっと話を出来る状態になったところでフェジューはそう言う。

運命？

何を言っているのだ……

なんだかものすごく嫌な予感がするのだが……

「どういふことですか？」

レヴォオラもわたしと同じことを思ったのか困惑ぎみにそう聞いた。するとフェジューはわたしの方をチラリと見る。そんなフェジューにつられるようにレヴォオラもわたしを見た。

何なんだ。

これは絶対嫌なことが起こる気がしてならない。というか起こるだろう。

「レヴォオラは、そなたは外に警備に言っていて知らないだろうが、この娘が今回召還された天子だ」

フェジューはわたしを見ながらサラリとそう言ったのけた。

「……は？」

レヴォラは分けが分からないと言うような顔をしながらわたしを見て、説明を求めるようにフェジーを見る。わたしもいきなり何を言ってるんだと驚いた瞳をフェジーに向けた。

そんな中でフェジーは涼しい顔をしている。なんなんだいったい。今それをいう必要があったのか？というかわたしは天子だとは認めていない！

「……そうでしたか……それでそれが何か？」

レヴォラなるべく冷静を保ちながらストレートにそう質問した。するとフェジーは一つ頷いて言葉が続ける。

「レヴォラも知っていると思うが、現在の天子は非常に危険な状態にある」

は？

なにそれどういうこと？

今すぐにでもそのことを問いただそうと身を乗り出しそうになったが、その前にフェジーが衝撃の言葉を発した。

「そこで、そなたに今回の天子の護衛役を頼みたいのだ」

一体何言ってくれるんだ……

天子

「護衛？」

わたしは意味が分からず小さく呟いた。
それに今フェジーは気になることを呟いた。

“ 今回の天子は…… ” と言ったのだ。
それは、“ 前の天子 ” がいたことを指す言葉に他ならない。

また分らないことが疑問が増えてしまった。どうして一つも解決していないのに次から次へと疑問が増えていってしまうのだろうか。
心で盛大に舌打ちをしながらわたしはフェジーの言葉の続きを待った。

「 ああそうだ。そなたには言ってなかったが天子は今この世界で
余り慕われていないのだ。そのため天子という理由だけで害を与え
られる可能性もある。だから護衛が必要なんだ 」

また引っかかりをおぼえた。

天子が慕われていない？

この人たちの話では天子は“ この世界を救う存在 ” ではなかった
のか？ その天子を崇め慕うことは会ってもその逆は普通考えられな
いだろう。

おかしい。おかしい。おかしすぎる。
わたしはフェジーを小さく睨みあげた。

「なぜ……？」

増え続ける疑問にさすがのわたしも耐え切れなくなっている。さすがにそろそろちゃんとした説明がほしかったところだ。今このときが丁度いいだろう。

「ん？」

「なぜ天子は嫌われているのですか？」

わたしは護衛の説明そっちのけで質問タイムを始めることにした。

「わたしがこの世界に来てから疑問に思っていたことがいくつもあります。そのうちの一つが天子に対する扱いです。ずっと分からなかった。王子は天子が来たというのに上から目線。衛兵はどこかよそよそしく、部屋はあんなにボロボロで……。仮にも天子と呼ばれる存在のわたしがなぜここまで酷い扱いをされなくてはいけないのか……。どうみたって変でしょう？」

言えばジェシーは苦い顔をした。

これは……。やはり何かある。わたしは確信した。

「答えてください。わたしに知る権利がある。そうでしょう？ だってわたしは天子なんですから」

ふんわりと微笑みながら言っちゃった。

フェジーはしばらく黙り込んでいたが、やがて小さく口を開いた。

「天子の召還は……。実はそなたが初めてではない」

わたしはハッと息を吞んで目を見開いた。

さっきの予想が綺麗に当たってしまった。今回の天子がわたしなら前の天子がいるはずだとは思っていたが本当にいるとは……。

しかしそうなるとその“前の天子”はどうしたのだろう？なぜ天子がいるはずなのにわたしを召還する必要があった？

駄目だ。さっきよりも疑問が増えてしまった。

「前回の召還は今から1年ほど前に行われた。そのときは五大魔術師ではなく我が国トップの魔術師一人が召還を行い見事成功した。わたしたちは神に感謝したものだ。これで“闇”から世界が救われると誰もが思った」

フェジーはどこか遠い目をしながらそういった。

「だが自体はそう上手くは進まなかったのだ。彼女はそなたと同じように特に特別な力など持っていなかった。“闇”に会えば力が目覚めるのかと思いきや戦場につれて行ったら泣き叫び暴れ、あやうく闇に食われるところだった」

と言うことは前の天子もわたしと同じ日本人だったという可能性が高い。

「天子が来たときは皆崇め、祭りを行った。王族も彼女に期待していたから王宮に彼女を住ませていた。王宮には貴族たちから絶えず贈り物が届いたものだ」

「でも、天子は使い物にならなかった。だからみんな手を返したように酷い扱いをした？」

今のわたしのよう……と心の中で付け加える。

フェジーはチラリとわたしを見たがすぐに視線をそらしてしまっ

た。

「いや……そのときはまだ皆力が目覚めていないだけだと思って天子に優しくかった。もちろんあの天子は偽者だと言うような人間も現れたがそういう人間は王子は押さえ込んでいた」

その言葉に一番びつくりした。

あの王子が？と思わずにいられない。

それにしても、そこまで優しくったこの国の人間がなぜこんな酷い扱いをするようになったのかが分からない。

わたしは話の続きを促すようにフェジーを見た。

「……決定的になったのは彼女がここに来て半年したときのことだった。さすがに国民たちは待つことに疲れてきたのだ。天子がきてすぐに終わると思った闇との戦い一向に終わらず、天子は何も出来ないままなのに王宮でお姫様のように扱われている。不満に思う人間は日に日に増えていった」

それはそうだろうと思う。

わたしがここの国民だとしても不満を持っていたと思う。

「天子は週に一回国民と触れ合うという時間を作っていた。その日も丁度国民と天子が話をしていて……そこに、闇が現れたのだ」

フェジーの声色が低くなる。

「闇が街に来说うことはその頃には珍しいことではなくなっていたのだ。天子には何人かの護衛がついていたが、その日は王都

内ではかの事件が起きていたため護衛の人数が少なく、天子を守りきれなかった。闇が目の前に迫ってきていて天子も焦っていたのだろう」

わたしがゴクリとつばを飲み込んだ。

「天子は、近くにいた子供の手を引っ張り、自分の盾にしたのだ」

貴方を信じましょう

さすがに衝撃を受けた。

いくら自分の身が危ないからって子供を盾にするなんてどういう神経しているのだろう。

「子供は闇に食われ……死んでしまった。天子は生き残ったがな。そのことをきっかけに民衆の怒りは爆発したのだ。天子を罵り、あんなやつは偽者だと騒ぎ立てた。王宮の人間ももう庇いきれなかった。というより子供を犠牲にするような人間を天子とは思えなくなつたのだな」

確かに言い分は正しいのだろう。

「それで、その天子は今どうしているのですか？」

「……さあ？だれも知らない」

わたしは眉を寄せた。分からないとはどういうことだろう。

「いつのことだったか。急にどこかに消えてしまったのだ。王がこれ以上詮索するなど言つたので誰も詳しいことは聞けなかったのだ。今もどこかで生きているのか……あるいは……」

わたしは言葉を失った。

急に消えただって？そんなことありえるわけないだろう。

王が検索するな、といったことは王が何かを知っている可能性が高い。

「天子がいなくなっても民衆は荒れていたが、また半年もすれば落ち着きを取り戻していった。しかし天子はいなくなったが闇と戦いは一向に良くなる。人々は苦しみ、嘆き、王に懇願した。

“今度こそ本当の天子を召還してほしい”と」

「そうしてわたしが召還された……ということですね」

フェジーは頷いた。

「一人の魔術師が召還を行ったから失敗したのだと貴族の誰かが言ったので今回は五大魔術師総出で召還を行った。今度こそ成功する。闇との戦いが終わる。そう思って召還を行ったが……」

「二人目に召還されたわたしも、何の力もなかった」

だんだん話が分かってきたように思える。

この国の人間のわたしの扱い。それはわたしを天子とっていないから起こる扱い方だったのだ。わたしはあの王の間で術が使えない人間だと公言してしまった。それはすなわち自分が術師でないと言っているようなものだ。

天子でない自分を特別に扱う必要はないと言うことだろう。

しかしわたしが天子ではないと分かっているのなら何故さつさと元の世界に返してくれないのだろうか？何の力もないくて、この世界を救うことができない自分はもう用なしだろうに。

あの王子が言っていたようにこれから力が目覚めることを本当に期待しているのだろうか？

いや、そんなはずはないだろう。だって前回の天子は半年待っても力が目覚めなかった。きっとわたしも力が目覚めることはない

思っているはずだ。

ならなぜ？

また疑問が増えてしまった。

それにもう一つ気になることがある。

「わたしはこれからどうなるのでしょうか？」

聞けばフェジールは分からないというように首を振った。

天子でもないわたしを王子はこの世界にとどめてどうするつもりだろう？

分からない、分からない、分からない

しょうがない

この話は保留にして次の質問をするか……

そう考えたその時、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「……誰だ？」

「フェジール様この後、貴族の方との対談の予定がありますのでそろそろ……」

扉の向こうからくもぐった声が響いてくる。

わたしは小さく舌打ちをした。

何てタイミングの悪い。まだまだ聞きたいことは山ほどあるというのに……。

「……ああ分かった。娘、悪いが予定があるので」

「分かっています。後日また聞かせてもらえると嬉しいですが……」

そう言えばフェジューは頷いてくれた。

まだまだ足りないと思うが、とりあえず貴重な情報が聞けたことには感謝しよう。前の天子のことが聞けたのは本当にありがたい。この男はそこまで悪い人間ではないのかもしれないと思う。

フェジューはソファから立ち上がるとわたしの後ろに目を向けた。

「レヴオラ、護衛の話は考えておいてくれ」

「はい、了解いたしました」

急に後ろから声が聞こえて少々びっくりする。

そういえば何もしゃべらなかつたので忘れていたがレヴオラもいたのだった。

「それでは、失礼する」

そう言って、部屋を出て行くとするフェジューを見てわたしの口は勝手に動いてしまった。

「待ってください」

立ち上がりながらそういうとフェジューは不思議そうな顔で振り返る。

何をしているのだろうわたしは……

そう思いながらも、自分の言いたいことは分かっていた。なぜ言おうと思ったのかは分からない。でもこれはわたしなりの感謝の気持ちで、多少は信頼しているという意味表示だった。

「改めまして、長沢花音といいます。ナガサワが性でカノンが名前です。今回は貴重な話を聞かせてもらってありがとうございます」

そう言って頭を下げて、ゆっくりとあげる。

視界に入ったフェジューは驚いた顔をしていた。これほどまでにガンをとして名前を言わなかったわたしが名乗ったことに驚いたのだらう。

しかししばらくすると元の表情に戻って彼も礼をとった。

「王都神殿神官長の聖・フワン・フェジュー・リードだ。こちらこそ、そなたには迷惑をかけて悪いと思っている」

わたしはフェジューも名乗ってきたことにびっくりして目を見開いた。

「フェジュー様お時間が……」

「分かっている。それでは失礼する。話はまた後日」

そう言っただけフェジューはこの部屋から立ち去っていった。

掴めない真実

「申し訳なかった」

フェジーが出て行き、わたしとレヴォラが二人きりになった部屋。これからどうしようかなどとわたしが考えはじめようとした瞬間レヴォラはそう言った。

「え……何がですか？」

つい聞いてしまう。

わたしにはレヴォラに謝られる心当たりがなかったのだ。ついつい首をかしげてしまう。

「天子だとは知らずに、お前を疑い剣を向けたことだ。本当に申し訳なく思っている」

腰を折って本当に申し訳なさそうに誤るレヴォラにこっちが頭を下げたくなった。

あの時のわたしが怪しい人物であったのは確かだし、レヴォラは自分の勤めを果たしただけで何も悪いことなどしていない。

「頭を上げてください。勝手にウロウロしていたわたしも悪かったですから」

そう言えば、レヴォラはしぶしぶという感じで頭を上げた。なるほどこのレヴォラという男はかなり律儀な人間らしい。しかし律儀すぎるのも時にはどうかと思うのだが……

「お前が関係者であることは分かった。だから散歩なり何なりするといい。だがくれぐれもあの屋敷の敷地内のみにおいてくれ……危険だから」

その言葉にわたしはさっきの天子の話を思い出した。

前回の天子は確かに酷いと思う。子供を盾にするなんて絶対にありえない。だがしかし、それは他者から見ただけの意見だろう。

前回の天子はこの世界に来て何を思っていたのだろうか？
いきなり天子として期待されて、力がないと分かれば用なしだとも言うように貶されて……

わたしは……この世界へわたしを召還した奴らが憎くてしょうがない。

召還している人間には分からないかも知れないが、あまりにも身勝手すぎるのだ。自分たちの世界が危険にさらされて、自分たちにはどうしようも出来ないから他の世界にいる人間に頼る。その人のそれまでの生活も何もかも全部お構いなしに……だ。

そして召還したその瞬間世界を救え、お前になら出来るはずだ。だって“天子”なのだからと言われたって困るだろう。当然だ。

その後、予想外にも世界を救えるはずだった天子が何も出来ないと分かれば自分たちの酷い行いなど知らぬ振りをして天子だけを責める。自分たちの召還が失敗だったなどということはしない。力を使えない天子が悪い……そんなの勝手すぎるだろう。

本当に身勝手すぎて、ム力つく。

「天子、天子……花音殿！」

ハッとして辺りを見えれば、急に黙ってしまったわたしをレヴォラが呆れ気味に見ていた。

「お前は少し考えすぎる癖があるようだな」

「……そのとおりです。ごめんなさい」

「いや、構わないが……」

そういえば、今レヴォラは私の名を呼んだ気がする。“花音”という自分の名前の響きがものすごく懐かしく感じた。誰かに自分の名を呼んでもらえることが幸せだとあらためて実感する。

本当に……この世界に来てから自分の日常がどれほど幸せなものだったかということ进行思い知らされるばかりだ。

「この後はどうする？ 散歩に行くのか？」

「……いえ、いろいろ考えたいことが増えたので一度部屋に戻ります」

まだ全然情報が足りないが、今回の天子の話は本当に有力なものだった。少し自分の頭を整理する必要があるだろう。多少余計なことを考えてしまうことは仕方がない。

「そうか、なら部屋まで送ろう」

「……ありがとうございます」

本当にレヴォラはいい人間だと思う。今のところフェジの次に信頼できる。

とはいってもレヴォオラもフェジーも出会ってホンの少しの人間だ。わたしが見たのは上辺のものでしかない。本当に心から良い人間であればいいのだが……

わたしは小さく苦い笑みを浮かべた。

フェジーの執務室をでると、わたしが住むあのボロ部屋がある屋敷に向かってゆつくりと歩き出す。歩調が遅いわたしになるべく合わせてくれるレヴォオラはやはり優しい。

そのときわたしの頭にフツとある疑問が浮かんた。

聞いてみようかどうか少し迷うが、わたしは思い切って口を開いてみる。

「レヴォオラさんは……前回の天子はどのような人だったのでしょうか？」

王宮でお姫様のように扱われていたという話だが、子を盾にするほどに酷い人間だったのだろうか？

わたしの疑問を聞いたレヴォオラは少し考えるようなそぶりをした。

「俺はそんなに関わった経験はなかったが……大人しい女性だったと聞いている」

“大人しい”？

そんな女性が子を盾に？

少しおかしくないだろうか？

「彼女が子供を盾にするはずなどないと……そう言っていた人間

もいたな。そういえば」

「っそれは誰ですか？」

これは……かなり重要なことではないか？

子を盾にするくらいだから自分勝手に高飛車なお嬢様タイプを思い浮かべていたのだが、本当の天子は大人しく人だった……

「彼女の護衛の代表者であつた、第1隊隊長だ。彼女がそんなことするなんてありえないと王にたて突いて今は解職されたが……」

どこかで何かがずれている。

急にいろんなものが崩れだした。

わたしが持っているこの情報は本当に全て正しいのだろうか？

「……その方に……お会いすることはできませんか？」

少し分かりかけたと思っていたのに……それはまた遠のいていく

……

願う心

「いや、1番隊隊長も解職された後どこに行ったのか分からなくなってしまったのだ。申し訳ないが会うことは出来ない」

「……そうですか」

本当に、この世界は上手く行かない。

というか誰かが仕組んでいるとしか思えなかった。

噛み合わない前回の天子の話。フェジーが言っていることが嘘だったという可能性も考えられるが、あまり疑いたくはない。

「役に立てなくて悪かったな」

「いいえ、十分です。ありがとうございました」

わたしはそう言って頭を下げた。

だがその前回を知る天使に会えないことは残念でならない。その人に会えればこの胸に突っかかりが解けると思ったのに……

「お前の護衛の件だが……少し考えさせてくれ。自分の隊のこともあるからそう簡単に決断できないのだ」

「はい。別に無理になつていただかなくてもいいですよ。天子の護衛なんて、嫌味を言われるのではないですか？」

「否定はしないが……」

やはりそうか。

この世界に慕われない天子を守っては文句の一つも二つも言われるであろう。

レヴォラは悪い人ではない。わたしが天子と知っても変わらない

対応をしてくれることが実はかなりうれしかった。

そんな彼を悪い立場にするのは気が引ける。

「俺は、やりたい仕事をするだけだ。周りの声など気にしない」

ホンの少しだけ笑み見せながらそう言ってくれた彼に、わたしは心のそこから感謝したくなった。彼を悪い立場になどしたくはないが、出来れば彼に護衛をやってほしいという気持ちもある。

人の心とは複雑なものだ。

「さあ着いた。天子も疲れたであろう。今日はゆっくり休むと良い」

いつの間にかわたしが住んでいた屋敷の前についていた。わたしは周りにある建物に比べて数倍ボロイその屋敷を見た後、レヴオラに視線をもどす。

「今日は本当にありがとうございました。おかげでたくさん貴重な話を聞けました」

「いや、俺のほうこそ今日はすまなかった」

剣を向けたことをまだ気にしているらしい。

確かにあの時は混乱したが、もうほとんど気にしていないというのに。わたしは小さく笑みをこぼした、

「そうだ、レヴオラさん。わたしのことはどうぞ花音と呼んでください」

「いや、しかし」

「さっきわたしのことを一度名前と呼んでくれたでしょう？その

ときすごく懐かしい感じがして……だから呼んでくれると嬉しいんですけど」

そう言えばレヴオラは戸惑ったような顔のまま悩んでしまった。
わたしはジッと答えを待つ。

本当のことを言えばわたしはこの時、一つ嘘を付いていた。
花音と呼んでほしいといった理由……

確かに花音と呼ばれる懐かしさもあるのだが、本当の理由を言うならば“天子”と呼ばれることが不快でしょうがなかったのだ。

わたしは天子などではない。

天子になりたいとも思わない。

のぞむことは元の世界に帰ることだけ……

「分かった……花音殿とお呼びしよう」

わたしはホンの少し恥ずかしそうなレヴオラに満面の笑みを見せた。

「ありがとうございます。レヴオラさん」

本当は……もう一つレヴオラに聞きたいことがあったのだ。
だけど聞くことは出来なかった。

わたしは屋敷に背を向けて歩き出したレヴオラを見ながらそのことを考える……

“天子を憎んでいないのですか？”

そう聞きたくて、聞けなかった。

レヴォラは優しい。わたしがそう思う一番の理由は、わたしが天子と知っても対応が変わらないことにある。

わたし個人としてはそれはとても嬉しいことであるが、そこで疑問が生まれるのだ。

彼だってこの国の人間である。世界を救ってくれなかった天子に……そして救うことが出来ないであろうわたしに……他の人間と同じように憎しみを向けてもおかしくない。

だから憎んでいないのか？と聞きたかった。

理由は知らないが“憎んでなどいない”と、そう彼が言ってくれるだろうと思いつながら、もし“憎んでいる”と言われたら？と考えた。

もしそういわれたら、わたしは本当に何を信じていいのか分からなくなる。

この世界でわたしが今のところ信じられるのはフェジーとレヴォラだけだ。

しかしフェジーの言った前回の天子の話が本当かどうかが分からなくなった今、フェジーを疑いたくないと思っているのに、言葉にズレがあるから疑ってしまう自分がいる。

となると今の時点でなんの疑いもないのはレヴォラだけ……
そのレヴォラに天子を憎んでいると言われたら……

わたしは考えるのも嫌になり、頭を振ってその考えを飛ばすと自分の部屋に向かった。

それから数日。

わたしは日々はとても穏やかだった。

何が起こるわけでもなく、ただ時間がだけが過ぎていく……

途中レヴォラに3回ほど出会い、セハンが1度遊びにきてくれたがそれ以外には何もなかった。

天子の何かが分かるわけでも、もとの世界に戻るすが分かるでもない。ただただ過ぎるだけの日々にはわたしはイライラとしていた。

そんなときのことだ。

部屋で考え事をしていたわたしの耳に扉をノックする音が聞こえてきた。

「誰ですか？」

「……………わたしだ」

その声は数日振りに聞く声だった。威厳に溢れた声……それは間違いなくフェジーのものだ。

急いで扉を開けると、そこには厳しい顔をしたフェジーがいた。そのことに一瞬出会ったばかりのときと同じ恐怖を感じるも、慣れたのか直ぐに落ち着いてきた。

「何か御用でしょうか？」

今まで来ることがなかったフェジーが来たのだ。何か重要なことでもあったのかもしれない。

首をかしげて聞くわたしにフェジーは強烈な言葉を落としてくれた。

「殿下がそなたに会いたいと言っている」

王子の用件

わたしはぐったりとしながら椅子に深く座り込んでいた。

「大丈夫か？」

今にもぶっ倒れそうなたしをみてレヴォラが心配そうに声をかけてくれる。そんなレヴォラに大丈夫だと言うように頷いたあとわたしは椅子から身体を起こした。

そのとき自分の背後でカチャリと金属の音がして、わたしはあまりの不快感から眉を寄せる。

レヴォラも痛々しそうな目でわたしを見ていた。

わたしの手首はまたしても手錠につながれている。

それもこれも全部全部あの王子のせいだ。

王子がわたしに会いたがっているとフェジーが報告しに来たあと、わたしはどこから現れたのかも分からぬ侍女たちに連れられアレよコレよと身だしなみを整えられ、拳銃の果てには例の魔術手錠をかけられたのだ。

唯一の救いといえば、この部屋の護衛役がレヴォラだったということだけだろう。

わたしは今、純白の長いドレスのようなものを身にまとい、金で出来た首飾りをして、髪を綺麗に結われて王子の準備が整うのを待っている状態にある。

スラリとして純白のドレスはまさに“天子”を連想させて引きち

ぎってやろうかと思った。

が、わたしもそこまで子供ではないので我慢する。この服はかなり高価そうだから破ったりしてお金を求められたりしたり困る。

わたしは無一文の状態なのだ。

「何も手錠までしなくても、と言ったのだが……お前が前回殿下に暴言をはいたという理由でとってもらうことは出来なかった。力が及ばなくてすまないな」

「いいえ。気にかけてもらっただけで十分です。それに、王子様に暴言を吐いたのは本当ですから」

ホンの少し苦笑を浮かべながら言えば、殿下にたて突くななんてすごい度胸だなと感心されてしまった。

わたしはその後始終笑顔で対応したが、心の中では不満が止まらない状態が続いてる。

なぜまた手錠など付けられなくてはいけないのだろうか？

わたしがあの王子に言ったことは全て本当のことなのに……

いやそのことよりも、また王子に会ってわたしは冷静でいられるだろうか？

もしもう一度王子にたて突いたら、今度こそ殺されてしまうのは？

いろいろな感情がわたしの中を駆け巡り、またぐったりとした身体の重みが襲ってくる。さっきからこの繰り返しだ。

会っのなら早く会ってしまいたい……

そんなことを考えながら、数十分後
部屋をノックする音が聞こえてきた……

「殿下の準備が整いました。天子様移動をお願いします」

“天子様”……ね。

少しも敬ってないくせにわたしのことを“様”づけするその侍女
に虫唾が走った。

王子とは数日前と変わらず、堂々とした様子で広い部屋の奥にあ
る椅子に悠々と腰掛けていた。そしてまた、わたしも始めてこの王
の間に来たときと変わらず、扉の一番近いところの地べたにそのま
んま座らせられている状態である。

そして周りにいる野次馬たちの数も前と変わらない。いや、前よ
りも増えたかもしれない。

本当にこの扱いには笑ってしまいそうになる。
どこからどうみてもこれは罪人だろう。

「こちらの世界での住み心地はどうだ？天子」

しばらくの沈黙の後言葉を発したのは王子のほうだった。

それにしても今の発言……わたしに嫌味を言えと言っているよう
なものであろう。

こちらの世界の住み心地？最高に最悪としか言いようがない。

さっさとこの話あいの様なものを終わらせたくて、わたしは嫌味

な笑顔を浮かべているように見える王子にふんわりと微笑んだ。

「世間話などせず本題に入っていたいただいて構いませんよ？王子様は多忙なのですから」

そうわたしが言葉を放った瞬間、一瞬その場がシーンとなる。だが、すぐに王子のクツクツとした笑みが響き渡った。

「話が早くて助かる。天子は随分と優秀なようだ」

頭に響くようなその笑い声がム力ついた。

どうやらわたしはこの王子が心底大嫌いなようだ。初めて会ったときも嫌だとは思ったが、あらためて会ってみると本当に気に食わない。

わたしはこの人を好きになれる気がなかった。

「お褒めに預かりありがとうございます。それで、今回はどうしてわたしを呼び出したのですか？」

「そう慌てるな。そうだな……天子としての力は目覚めたか？」

世間話などいらないと言っているのにこの男は……
ついつい握り締めるてに力が入ってしまう。

「いいえ、全く。どうやらわたしは“使えない天子”のようです。王子様も分かっているのでしょうか？できれば元の世界の帰っていたきたいのですが」

「いいや、まだ来て一ヶ月もたっていない。これから力が出る可能性も考えられるから帰すわけにはいかないな」

白々しい。

わたしが前回の天子と同じように何の力もなく、その力が目覚める可能性もないかと思っっているはずなのに……

「王子様……わたしは回りくどいのは嫌いです。用件があるのなら早く言っていたきたいのですが？」

そういえば、王子が楽しそうに笑う声が聞こえてくる。

「天子はどうやら俺のことが嫌いなようだな」

クツクツと笑う声が部屋に響く。野次馬たちは妙に静かだ。

「今回お前を呼んだのは……“闇”に会ってもらおうと思ったからだ」

王子の笑い声が妙に感に触った。

それぞれの企み

「闇に……会う？」

わたしはついつい顔をしかめてしまった。

「ああそうだ。闇に会ってみれば力が目覚めるかもしれない思
つてな。よい考えだろう？」

笑いを含んだような王子の声を聞きながら、イライラする心を抑
え冷静になれと自分に言い聞かせる。

“闇に会ってみれば力が目覚めるかもしれない”ね……
どこかで聞いたことがあるフレーズを言ってくれる。

前回その事を試してみても力など目覚めないことは王子のほうが一
く知っているはずなのに、いったい王子は何を考えているのだろ
う。

この世界の人たちの心理が全くといっていいほど分らない。
力のないわたしをこの世界にとどめて何の意味があるというのか。

「闇とはそんなにも簡単に会えるものなのですか？」

本当は王子に向かって突っ込んでやりたかったが、そんなことを
すれば誰がわたしに前回の天子のことをしゃべったかという話にな
る。そうすればフェジーに迷惑がかかるわけだ。

それだけは嫌なので、しょうがなく話題を変える。

「ここからそう遠く離れていない小さな町の泉に闇が現れるという情報があった。さして強い闇でもないと聞いているし、試しに行ってみる価値はあるだろう?」

まるで自分の言うことには間違いなど一つも存在しないというよ
うな自信たっぷりな言い方が本当に気に食わない。

だが、わたしも闇に会う価値はあると考えていた。

王子が何を考えてわたしに闇と会えと言ったのかは知らないが、
闇と会うことでわたしが本当に役立たずだということが証明できれ
ば、それによって元の世界に帰ることができるようになるかもしれ
ない。

少しでもわたしが元の世界に……愛しい家族に会えるようになる
可能性があるのなら

「そうですね……会う価値があるとわたしも思います」

「ほお。それはそれは……それなら話は早い」

王子は可笑しそうな笑い声を立てながら続ける。

「なるべく早いほうがいいだろう? 出発は3日後……それでいい
か?」

「構いませんよ」

別に遅かるうが早かるうが構わない。

わたしには何の不都合もないのだから……

「安心しろ。もしものために俺の直属の部下にあたる隊から数名護衛を出す」

王子直属の部下という時点で何も安心など出来ないのだが……

ほんの少し笑みを浮かべたあと、わたしはあることを考えチラリと部屋の隅に立つ男を見た。

これはわたしのわがままだ。彼を悪い立場にしたいと思ったのはわたしなのに……やっぱり自分が一番可愛いらしい。

心の中で彼に誤りながらわたしは視線を王子に戻す。

「一つ、お願いがあるんですけど……よろしいですね？」

そう言えば、周りの野次馬がやっとそれらしくざわめきをたて始めた。

「あの娘、無礼者が！」

「殿下になんという口のように」

「異界の娘とはやはりはしたない生き物なのだな」

ザワザワと騒ぎ立てる声のいくつかがわたしの耳に入ってきた。本当に、天子というものは嫌われた存在なのだかと再確認してしまふ。

「……少し黙れ」

しばらくの間野次馬たちの声が部屋中に響き渡ったがそれも王子の声で一瞬にして終わりを告げた。

またしても静かな空間が生み出される。

「天子の願いだ、聞き入れぬわけにもいかないだろう？ 申してみる」

少し大げさに肩をすくめて王子はそういつてきた。

その姿、態度に頭のなかの血管が一つプチツときれたように思える。でもそれは微かなものだ。

それでもホンの少しだけ怒りが漏れ出てしまった。

「天子の願いなら…… ですか。 なら…… 今わたしがこの手錠をはずして今すぐにも元の世界に帰らせてくださいと頼めば王子様はわたしを元の世界に返していただけるのですか？」

冷やかな笑みを浮かべたまま小さな嫌味を言つてやる。

そのことでまたしても周りはずわめくかと思つたが、以外にも静かなままだつた。かわりにその視線はただ一点、王子へと向けられている。

それは何かを恐れているような瞳だ……

そして視線を向けられる王子はといえば……

「冗談ですよ、王子様」

遠めでも分かるほどにこちらを睨みつけてくる王子にわたしはにこやかに微笑んだ。

ホンの少しわたしの心がスツキリとする。

「ごめんなさい。 異世界では冗談の基準も違うようですね」

そういえば、まるで押さえ込むように王子のにらみが納まっていた。腐っても王子ということか。この程度の嫌味で崩れることはないらしい。

「そうだな。文化の違いとは恐ろしいな天子。そのような冗談はあまり言わないでほしいのだが？」

「今度からは気をつけます」

ピリピリとした空気が部屋をまとっていた。

「それで、本題ですが……」

すこし危ないかもという感情が頭を横切り、ここでお願いを聞いてもらえなくなったら困るのでわたしは話を切り替えた。

「わたしの護衛にもう一人……」

わたしがそうしてお願いを言おうとしたとき……

「殿下」

間に入るようにその声は響き渡った。野次馬たちの視線がそちらに向き、わたしも声がした方向へ視線を向ける。

「え……」

わたしはついつい間の抜けた声を出してしまった。

「殿下、許可のない発言お許しください」

「………何用だ」

視線の先にはわたしが今から迷惑をかけるはずだった男……

「わたしに天子の護衛をさせていただきたいのです」

そう言った彼……

レヴォラを、わたしはただ凝視するしか出来なかった。

闇のいる町

闇がでるのは近くの町だとあの王子は言っていたが、土地勘のないわたしにとつてはこの町があ場所から近いのかも遠いのかもよく分からなかった。

「お前の素性は地方に住む貴族の令嬢ということになっている。村人に会うことは極力ないようにするが、それらしい振る舞いをしてもらえたら助かる」

……いちおう言うがわたしは一般庶民なのだ。そんな貴族の令嬢のふりをしろって言われたってそうそうできるはずがないだろう。

もしわたしに説明しているのがレヴォラではなくて、後ろで嫌々ながらわたしを護衛しているあの衛兵たちだったらわたしは絶対に文句を言っていたと思う。

「努力はします」

努力はしても出来ないことがある。と思いながらわたしは小さくため息をついた。

レヴォラが王子にわたしの護衛になりたいと言ってくれたことはかなり意外であったが同時にうれしくもあった。

あの後、わたしからもレヴォラの護衛をお願いしたところ案外すんなりとレヴォラの護衛としての同行は認められた。

レヴォラに立場が悪くなったのでは？とこっそり聞いてみたと思っただけがなかなか機会が訪れず、出発の3日後はすぐに訪れてしまい

今日に至る。

町までは馬車を使っていくということでした。それに乗ったわたしは微かに幼い頃の夢物語を思い出し柄にもなく胸をときめかせたが乗って数分後にはかなり後悔した。

道が現代のように舗装されていないため所々でこぼこしていて、それに馬車の不安定な揺れが加わり、乗って数分で酔いはじめてしまったのだ。

今はだいぶ落ち着いたものの、一刻でも早くこの馬車から降りたいと言うのが本心だ。

本当にこの国にはいいことがない。

「あともう少しで着く。ついには町長にあいさつをしてその後は部屋にこもっていてもらって構わない。今回の闇が出てくるのは基本的に日が落ちてかららしいからな。それまではゆっくりしている」
「わかりました」

本当にレヴォラがついてきてくれてよかったと思いつつ、わたしは揺れる馬車の中で目を閉じた。

闇とは一体どういうものなのか？

やっとそれを知ることが出来る。

「狭く汚くない町ですが、どうぞこゆるりとおくつろぎ下さいませ」

町の町長は以外にも年配の女の人で、少々きこえないわたしを優

しい笑顔で迎えてくれた。

「ありがとうございます」

わたしは先ほど教えてもらったばかりの貴族の礼をとると、なるべくそれらしく微笑んで見せた。本当に無理がある。

なんとか挨拶を済ませた後、つれて行かれたのは今日の宿となる店。店主は「貴族の令嬢を泊めるなんておがましい部屋ですが……」と言いながら案内してくれたが、わたしに言わせればあのボロ部屋に比べたら数倍マシな部屋だった。

あちらでの自分の扱いの悪さあらためて確信し心底イライラさせられたのは言うまでもない。

「花音殿」

部屋にたどり着き荷物を置いて一息ついたわたしにレヴォラが話しかけてきた。

「なんですか？」

「いや、思った以上に移動に時間が掛かってしまつて申し訳なかった」

そういわれて外を見てみればもう夕方のようなだった。あちらの屋敷を出た時間もそこまで早くなかったので当然と言えば当然だが、夕方ということはもう直ぐ夜が来ると言うことである。

「それで、夜まで余り時間がない。ここは日が落ちるのが早いから夕食を食べたら直ぐに出発となるかもしれないんだ。身体は大丈

夫か？」

そう言われて、わたしは軽く身体を動かしてみた。

確かに疲れはたまっている。出来ることなら今日はこのまま眠ってしまいたいが、今回は闇に会うことが目的でここに来ているのだから仕方がないだろう。

「大丈夫ですよ、たぶん」

「そうか…… 本当に申し訳ない。行くのは明日の夜にと交渉してみたのだが、王の部隊の人間が頷いてくれなくてな」

やはり王側の人間は天子を人一倍嫌っていると言うことなのか。うんざりする。

わたしはそうですかとだけ呟いた後、レヴォラに出て行ってもらった。ホンの少しの時間でもいいから眠りたかった。

「大丈夫か？」

仮眠をとった後、一人で夕食を食べすぐに出発となった。護衛にはレヴォラと王の手先の兵が着く。

「大丈夫です。それで……これはどこに向かっているのですか？」

レヴォラの問いに答えながら辺りを見わたせば、生い茂る緑が目に入る。たいして歩いてはいないものの、これはどう見ても森の中だろう。

「この町にでる闇はこの森の中にある湖に居座っていると町長が

教えてくれた。そんなに離れていないらしいからもうすぐ着くだろう」

「そうですか……………あっ」

そう言っているうちに森が開けて美しい湖がわたしの目に入った。微かに光を放つ湖は幻想的で、ついつい見とれてしまう。

「綺麗ですね……………」

素直にそう感想を述べるだが、レヴォラはなかなか返事を返してくれなかった。不思議に思い湖に向けていた視線をレヴォラに戻すとそこには眉を寄せた厳しい顔のレヴォラがいる。

「どうか……………したんですか？」

もしかしてすでに闇がいるのかと思って辺りを見わたすが、美しい湖が目に入るだけで特に変わった様子はない。王の衛兵に目を向けてみれば彼らもかなり険しい顔つきをしていた。いったい何があるというのだろうか？

「……………天子、のん気にしていると食われるぞ」

疑問に思いながらも何も分からないわたしに、衛兵の一人がそう低い声で呟くと同時に彼らは次々と剣を引き抜いて構えていった。何人かは何やら呪文のようなものを唱え始めている。となりに立つレヴォラもゆっくりと剣を抜きそれを構えた。

その光景にびっくりしながらもわたしは冷静になり、状況を理解しようとする。

彼らが見る先は同じだ。わたしはゆっくりと彼らの視線の先に視線を向けて、目を凝らした。

そこでわたしは初めてその存在に気がつく。

あまりにもこの夜の世界になじんでいて気がつかなかったようだ

……

そこにあるのは夜に溶けるようにしてこちらを見つめる無数の目

……

「来るぞ！」

誰かの叫ぶような声が聞こえた。

あれが……………“闇”

迫る闇

わたしが闇を見つめたまま動けずにいると誰かがわたしの腕を引っ張った。

それと同時に無数の目たちが間近にせまってくる。

「……っ！」

あまりのことに声も出ずにそれを見つめていた。

無数の目の正体は真っ黒な毛を纏った見たこともない生物だ。開かれた大きな口には恐ろしいほど長く鋭い牙が並んでいた。

鳴き声というかうめき声のようなものをあげてこちらに迫ってくるその闇をレヴォラをはじめ何人かの衛兵が切り落とすが、数が多いため全く減らない。

それにあまり大きくもないのにその闇はものすごく力があるようだ。

「おいっ、術はまだ出来ないのかっ！」

「もう少しです」

何人もの衛兵がやみに噛み付かれて腕や足から血を流していた。わたしを守ってくれているレヴォラも左腕から血を流している。

わたしを庇いながら戦っているのだからやりずらいのだろう。

それでも迫ってくる闇にわたしが狙われないように、腕を引っ張ってくれるレヴォラになんと言っているのかわからない。

今この場でわたしを守ってくれているのはレヴォラだけである。

わたしの護衛という名目の衛兵は自分のことに精一杯でわたしのこ

となど眼中にも入っていないようだ。

もしもレヴォラが護衛でなかったら……？

考えるだけで恐ろしい。わたしは最初の一撃で命を落としていたに違いない。

そんな恐怖を感じていたとき、フツと不自然な光が辺りを包んだ。レヴォラはそれをチラリと確認するとわたしに目を向ける。

「術が発動する。巻き込まれないように出来るだけ遠くへ！ここは俺が食い止める」

「でも……っ」

「自分でも分かっているだろう。お前がここにいてなんの役に立つ！？」

「置いてなんていけない」そう言おうと思ったのに、レヴォラは言わしてくれなかった。レヴォラの声はかなり焦りを含んでいる様子だ。

わたしは一瞬迷ったがすぐにレヴォラに背を向けて走り出した。置いていくことはかなり心苦しいがわたしがいっても邪魔なことは分かっている。迷っている時間すら無駄であることも簡単に理解できた。レヴォラの瞳は一刻も早くここから逃げろという思いがヒシヒシと伝わってきた。

それを自分の罪悪感から無視して、あの場に残ったとして何の利益がある？

被害が大きくなるだけで何の意味もないだろう。

わたしはなるべく遠くにといいレヴォラの言葉に従って全速力で

走った。こんなに走ったのはいつ振りだろうか。学生時代は体育という授業のせいで無理やり運動させられていたが、卒業してからはこんなに全力で走る機会なんてなかった。

もつれそうになる足をなんとか動かしていると、後ろのほうで爆発音が聞こえてきた。

思わず足を止める……。

振り返った先には淡く光を上げながら煙をだす何か……。あれが魔術というものののだろうか？

レヴォラは？無事でいる？

わたしはその場に立ったまま動けなくなった。光はだんだんおさまり、煙も空に溶けるように消えていく。あたりは静かになった。

あの闇のうめき声も聞こえない。

あれだけの爆発音。何かあってもおかしくはない……

王の衛兵などはつきり言っただうでもいいが、わたしを守ってくれたレヴォラに何かあったら……そう思う気持ちがわたしを動かした。

駄目だと思っただけでも足は先ほどの湖へと向かう。

草を掻き分けて舞い戻ったその湖には、レヴォラの姿どころか王の衛兵の姿もない。しばらくあたりを見回してみるが人の気配はしなかった。

もしかしたらあの爆発の前に逃げたのかもしれない。

わたしはとりあわずレヴォラが倒れていないことに安堵すると、これからどうしようかと頭を働かせた。が、しかし妙のものを感ずてもう一度辺りを見回してみる。

そこでわたしは自分の失態に気がついた……

どうして気付かなかったのだろうか？

さっきの術で残ったモノなのか新しく来たモノなのか……それは分からない。

闇に溶ける無数の目……それは容赦なくわたしに近づいてきていて……

何も出来なかった、叫ぶことも出来ず逃げることもできず、ただ自分の馬鹿な失態を情けなく思いながら迫ってくる闇を見ることができない

「……………つぁ」

初めて感じる死の恐怖。喉から掠れた声が出たが自分が何を言うとしたのか分からない。

わたし、死ぬんだ……

最後にそう思って、素直に目を閉じた……………時だった。

「……………あら？」

闇に響く、美しいソプラノトーンの声。

驚いて目を開ければ、目の前には口を大きく開いたまま静止している闇の姿があった。

「やつー!!」

ギョロリとむき出した目と、大きな口から覗く牙が恐ろしくて腰

を抜かしたまま倒れてしまった。闇はそんなわたしをギロリと見つめる。

「あらあら……ふふつ、戻りなさい」

もう一度あの美しい声が響くと、闇たちはそれに従うようにわたしから離れてある一点の場所へと戻っていく。

その先を見つめて、わたしは驚いた。

湖の中央にある大きな岩に誰かが腰をかけていたのだ。

その人物はしつとりと濡れた黒髪に、夜に溶けるような黒い瞳をしている。黒髪に黒い瞳というと日本人を思い浮かべるが彼女の目鼻立ちは日本人とはかけ離れていることがわかった。

「なーんか可笑しいと思ったら」

色気のある瞳でこちらを見つめ、周りにはあの闇を従わせるその女。クスクスと可笑しそうに笑っている。何が可笑しいのか？……そう思いながらよくよく目を凝らして彼女を見るとその下半身は鱗のついた尾っぱであることがわかった。

真っ黒な……人魚……

彼女も“闇”？

「気をつけなさいな。ただの人間と間違っただけで殺してしまうところでしたわ」

夜の闇に黒き人魚の声が響き渡った。

黒き人魚

一体何を言っているのだろうか？

“ただの人間と間違えて殺してしまうところだった”？

確かにわたしは天子と呼ばれる存在ではあるが、闇もそれをしっているのだろうか？ いや、知っていたとしても闇を滅ぼして世界を救うのが天子の役目であるはずだ。だったら闇にとって天子は邪魔な存在と言うことになる。

だったらさっさと殺してしまうのが普通だろう。

それに、この人魚の話しかけ方がどうも引つかる。

「どうしてこんなところにいるのか知らないけど……なあに？ 人間の馬鹿と遊んでいるの？」

彼女はまるで、わたしを知っているみたいに話しかてくる。もちろんわたしがこの人魚にあうのは始めてこのとだ。

「？……随分と静かねえ」

わたしが思考をめぐらしていると、人魚は不思議そうな声をだして首をかしげた。

そしてその次の瞬間

「……っ！……！」

地面に倒れこんだままのわたしに覆いかぶさるように人魚が現れた。濡れた髪から冷たい水滴がポタポタとわたしの頬に落ちる。

人形はその真っ黒な瞳でわたしの顔をじーと見つめてきた。もう少しで唇が触れ合いそうなほどに顔が近い。わたしは思わず息を止めて彼女を見つめた。

「貴方……カノンでしょう？」

こちらを見つめたまま問うてくる人魚にわたしは微かに頷いて見せた。どうしてわたしの名前を知っているかなんて今は考えられない。

「変ねえ……おかしいわ」

しばらくの間人魚はわたしを見つめ続けていたが、フツとした瞬間にはわたしの目の前から消えており先ほどまで腰掛けていた岩に戻っていた。

あれも闇の力なのだろうか？

「……ねえ貴方……この私が誰であるのか……分かっていて？」

人魚は考えるように綺麗な指に顎を乗せながらわたしにそう言うてきた。

知るはずがないだろう。こんなファンタジックな知り合いがいたら忘れるはずがない。わたしは否定の意味をこめて首を振った。

「なるほどねえ……」

彼女は、そう呟くように言うと目を伏せて考えはじめた。
ということだろう？ 彼女はいつたいわたしの何をしている？

たくさんの疑問がわたしの脳内を回るが答えなど出るはずもない。
どうしようもなくただその人魚を眺めているときだった。

（ナナリ姫、ナナリ姫）

深く地を這うような声がわたしの耳に聞こえてくる。

いや、耳にというよりは脳に響くような感じといったほうが正しいかもしれない。

わたしはその声にびっくりとして視線を彷徨わせてみる。

ここにはわたしと彼女しかいないと思っていたが他にも誰かいたのだろうか？

だが辺りを見回しても一向にその声の主は見つからない。

（ナナリ姫、ナナリ姫）

（なぜその人間を殺さぬのです）

（ナナリ姫ご命令を）

（人など八つ裂きにしてくれる）

（人間ごときがナナリ姫と会話するなど）

（ナナリ姫、ナナリ姫）

（さあ殺せとおっしゃりください）

最初の一声が響いた後、ざわめきと共にいくつもの声が響き渡った。それはわたしに対する憎悪が含まれた声。

脳に直接響くような声に恐怖を感じて、耳をふさいだが一向に声はやまない。

あまりの恐怖に叫びそうになったとき、彼女の声が響いた。

「少し黙らっしゃい」

それと同時にその声はピタリと止まる

「私の考え事の邪魔をするなんて、ずいぶんと偉くなったものねえ」

閉じていた目を開いた彼女はそう言って自分の周りに目をやった。そこにあるのは、無数の目たち……

もしかしてあの声はあの闇の声？

わたしはゆっくりと耳をふさいでいた手をどかし呆然と彼女を見た。

「ふふふつ、ねえカノン？」

彼女は闇たちから目を離すとその黒い視線をわたしに向けてくる。その瞳はどこか面白可笑しそうだ。

「貴方のその記憶、どうやら弄られているらしいわねえ」

彼女はクスクスと笑いながら楽しそうにそういった。

記憶を……弄られている？

わたしは意味が分からずただ彼女を見つめることしか出来ない。だが、少し落ち着けばわたしの頭は冷静に回転し始めた。

記憶が弄られている……そう言われて納得してしまう部分がたし

かにわたしには存在するのだ。

異世界に來るなんて衝撃的な体験をしていれば絶対に強烈に残るはずのその記憶がわたしには欠落しているのだ。

何かとつじつまが合うかもしれない。

「まさか！！」

そんなこと思われることすら気に食わない。わたしはあの王子にしたがつて天子になるくらいなら、五大魔術師がわたしを元の世界に返してくれる可能性など切り捨てて、あの屋敷をでるつもりだ。そして自力で元の世界に変える方法をさがしてみせる。

「わたしはこの世界が憎い！わたしを大切な家族から引き離れたあの王子が憎い！出来ることなら……こんな世界ぶっ壊してやりたいわ」

「ハハハハハハハハっ、フフフフフ、あー可笑しいっ！」

「頭は忘れていても心はちゃんとして憶えているようねえ……ふふ
ふっ」

彼女はニヤリと妖美な笑みを浮かべた。彼女の色気に一瞬クラリ
ときそうになる。

「やーっぱり貴方は……ふふ、闇側の人間ねえ」

わたしは一体、何を忘れているのだろうか？

わからない気持ち

闇側の人間……

もちろん王側の人間でないことは確かだが、闇側についた覚えなど全くない。それなのに黒き人魚は自信満々にそういう。

その言葉に引っかかりを覚えたのは何もわたしだけではないようだ。

（ナナリ姫、ナナリ姫）

（何をおっしゃるのですかナナリ姫）

（人間と我ら闇が同じだと？）

（この女のどこが闇と申すのですか！）

（ナナリ姫、この女はなんなのです？）

（納得いきませんナナリ姫）

黙っていた闇たちがここぞとばかりに騒ぎ出した。しばらくの間闇のざわめきが湖を占領する。

わたしはその声に顔をしかめ、黒き人魚はそれを無表情に見つめていた。

しかし、しらばくしてもおさまらないざわめきに人魚は苛立たしげに目を細める。

「お前たちは私に同じことを2度も言わせるつもりかしら？」

淡々とした口調で人魚はピシヤリとそう言った。

その一言で闇は一斉に黙り込む。

闇に溶ける目が不安げに揺れながら人魚を見つめているのがよく

分かった。

「まったく。そう言えば貴方たちはまだウマレタテだったわね」

人魚はそんな闇を見ながらフツと思い出したようにそう言った。
そしてチラリとわたしの方を見る。

「カノン……貴方どうして王の下になんかいるの？」

「なぜ……ね。わたしが聞いた話が本当であるのならば、わたしは貴方たち闇を倒す世界の救世主として召還されたいわ。五大魔術師とやらにね」

「へえ……」

わたしが聞いた話が本当に真実であるかは分からない。

この人魚にあつて余計に分からなくなってしまった。

本当にこの世界にいることはイライラする。

「ふふふつ……貴方が救世主、ねえ。なーんの力もないくせにどうやって私たちを倒すのかしら？」

ただ一つ思うことは、王側の人間から聞く話よりも、よっぽどの人魚の話のほうが真実味が感じられると言ふことだ。

人魚と会話すればするほどこの人はわたしのことを知っていると
いうことがヒシヒシと感じられる。それにわたしが思っていること
と同じことを言ってくれる人魚の話をわたしは嘘だと蹴散らすこと
ができないようだ。

王の話はすぐに嘘だと言ってやれるのに。

口元に手をあてながらニヤリと笑みを浮かべて人魚はそういった。その瞬間尖った水がすごい勢いで私の横を通り過ぎ、闇たちがニヤニヤとしながらその後を追った。

わたしはその姿を視線で追いながら意味が分からず呆然とする。しばらく彼らが消えた方向を見てままだったが、ゆっくりと視線を人魚に戻した。人魚は呆然とするわたしをゆったりとした笑みで見つめる。

「こんなところで野暮を売っていていいのかしら？救世主さん。ふふふつ、あの子達が向かった方向には何があるか分かってる？」

闇が消えた方向？

あれは……町の方向だ。

わたしはそこでハツとして目を見開いた。

「さつき愚王の犬たちを一匹も食べられなかったからあの子達もイライラしていたみたい。犬どもを追いかけなさいってわたしは命令したけど……どうやら犬たちは町にいるみたいだし、あの子たちイライラしているからもしかしたら町の人間も食べてしまつかもしれないわねえ」

全部聞き取らないうちにわたしは走りだした。

別に王の衛兵がどうなるうが構わないが、レヴォラと町の人間。彼らが闇に襲われてでもしたら……そう考えると恐ろしかった。

なぜ人魚はいきなりこんなことをするのか？

さっきまであんなに友好的な態度だったのにアレは演技？

自分が力のない人間だと分かっているても足は進んでしまった。

もう少し、もう少し……

やっと踏み入れた町で見たものは、あまりに悲惨だった。

飛び交う水の槍と闇たちは容赦なく町の人間を狙っている。
逃げ惑う住民たちを守ろうと王の衛兵が剣を向けているがそんな
のちっぽけな力に過ぎない。

さっきみたいに魔術を使えばいいのにと思ったが、ここは町だ。
あんなに爆発的な魔術を使えば家は壊れてしまうだろう。

誰かの悲鳴が聞こえる。

助けたいと思っても何もできはしないだろう。

どうしてこんなことをするの？

「やめて……」

いくらこの国が憎いと思っけていてもわたしはこの状況を喜べるほど
残忍な人間にはまだなりきれていなかったようだ。

「やめて……！……！」

わたしの声が夜の闇に響く。

その瞬間、闇たちは一斉に動きを止めた。

耳には微かに、人魚の笑い声が響く。

“あながち嘘でもないかもねえ”

あの人魚は、一体わたしに何をさせようというの？

手に入れたもの

馬車に揺られながらわたしはぼおと外を眺めていた。

「花音殿、大丈夫か？」

あまり生気を感じられないわたしに対してレヴォラが心配そうにわたしの顔を覗き込んでくる。そんなレヴォラの腕には包帯が巻かれていて、顔にも傷があった。

わたしはそれを見て顔をしかめることしか出来ない。

レヴォラはそんなわたしの視線に気がついたのか、さりげなく包帯の巻かれる腕を隠した。

「慌しくて疲れたであろう？ 屋敷に戻るまで眠っていたほうがよいのではないか？」

「……………平気です」

わたしは素っ気無く言うともう一度小さな窓の外に目を向けた。

外は雨である。

そのせいで地面はぬかるみ、行きよりも数倍馬車は不安定であった。

それでも急いで屋敷に戻っているのにはわけがある。

あの日、あの時、わたしは本当の天子であると認定されてしまったから。

わたしがやめたと叫んだ瞬間、闇の動きも水の刃も動きを止め、その事を不思議に思った人たちの視線はたくさんの方に彷徨った。そのうちの誰か…… たぶん王の衛兵だろう。

町の入り口に呆然と立ち尽くすわたしをみて、「天子……」と呟いたのだ。

確かにわたしの一言で闇は止まった。

別に魔術とやらを使ったわけではないが、その事実は魔術をつかって闇を倒すことよりも不可思議で天子らしい争いの止め方であったのだろう。

「本物の……天子だ」

そう呟かれた一言で、わたしの世界は一変とした。

騒ぎ立てる町人からわたしを守るように王の衛兵がわたしを連れ出して、部屋もあの宿から町長の家の豪華な客室へと移された。

昨日までのうやうやしい扱いとは違く衛兵たちはわたしをそれはそれは天子らしく扱った。

わたしに言わせればそれはあまりにも身勝手な行為であり、やはりこの国の人間は身勝手であるなと再確認したのだ。

きっとあの町でわたしが闇を止めてなどいないと気付けたものはいなかった。

本当にあの人魚は上手くやる……

あのとき闇を止めたのはわたしなどではない。

あの人魚が命令して止めたのだ。一度わたしを食らおうとした闇が急にわたしの言うことを聞くはずなどないであろう。

あれは全部あの人魚の作り舞台。

わたしを本当の天子に仕立て上げるための……

あのあとわたしはきつちりと王の衛兵たちの監視がつき身動きもとれず、一晩明ければあの子が会いたいと言っているからと急いで屋敷に戻ることにが決まったのだ。

町人にばれないようにと朝早くでることになったのだが、それでもどこからか聞きつけたのであろう。町長の屋敷の前には“天子”を見ようと集まっていた。

それを切り抜けるのにはかなり時間かかり、馬車に乗って町を出る頃にはかなり疲れきっていた。唯一の救いは昨日から見ていなかったレヴォラの姿が馬車の中にあつたこと。

それ以外にいいことなんて何もない。

「まさかお前が本当に天子だったとはな……あの力どういう原理なんだ？」

しばらくしてわたしが落ち着き始めた頃、レヴォラはわたしにそう聞いてきた。

わたしが首だけレヴォラを見ると、その顔は困惑している。

「さあ……自分でも何がなんだか」

わたしが知るはずがないであろう。
聞くならあの人魚に聞いてくれ。

レヴォラの顔がすこし悲しそうに揺れたが気がつかない振りをした。

「だがしかし、本物の天子が現れてくれて嬉しく思う。これでやっと戦争が終わるな。お前がきてくれて本当に良かった」

今までの闇との戦いでも思い出しているのだろうか？
レヴォラの瞳はやっぱり悲しそうだった。

そんなレヴォラにわたしは天子じゃないと言うことなどできない。

「そう……ですか」

そのとき馬車がひととき大きく揺れた。
倒れこみそうになったわたしの身体をレヴォラが支えてくれる。
さすがと言えはさすがであろう。

「どうかしたのか？」

わたしを元の位置に戻すとレヴォラは窓の外に顔をだしそう聞いた。

「ああ……ぬかるみにはまったようだった。手伝ってくれ」
「そうか……悪いが手伝ってくる。お前は乗ったままのいい」

レヴォラはわたしに一言断ると馬車を降りていく。
外の雨は一層激しくなっていた。

その雨の中に黒髪の女性の顔が見える。
わすれもしない黒き人魚。

“ やつぱり貴方は闇側の人間ね ”
“ あながち嘘でもないかもねえ ”
“ いーこと思いついちゃったわ ”

頭を掠める言葉たちに顔をしかめたとき、パシャリと水のはねる音が聞こえてきた。

『 分かるでしょう？ 』
「 …… 何が？ 」

わたしは苦笑するように答えた。

『 私が何をしようとしたのか …… ふふふ、分かっているのでしょう？ 』

「 分からないわ …… 」
『 嘔吐きねえ …… わかるはずだわ。だって貴方は昔から頭が良かったもの 』

その言葉に舌打ちしたくなった。
そう …… わかっているのだ。あの人魚の突発的な行動の裏に何があるか。どうしてわたしを天子にしたてあげたのか。

だけど、その意味を汲み取った上でわたしはその事を実行する勇

気がまだなかった。

『憎いのでしょうか？』

「憎いわ」

『復讐したいのでしょうか？』

「復讐したいわ」

『だったら迷うことなんてないのに。わたしはもちろん、闇のすべてが貴方に協力するわよ？』

クスクスと人魚は笑みを浮かべる。

「どうしてわたしに手をかすの？理由が分からない」

『そんなの貴方が忘れているだけよ。貴方のためと分かれば闇はいつでも貴方の味方となるわ』

分かってる。ちゃんと分かっている。

これいほど良い復讐の方法なんて存在しないだろう。

『信じさせるだけ信じさせて、どん底に落としてやりなさいな』

この世界が憎い。わたしを家族から引き離した魔術師が憎い。わたしに命令する王子様が憎い。

そして今

わたしはこの世界を壊す力を手に入れた。

帰還

「……ん…の。花音殿」

「んっ……」

名を呼ばれて目を開ければ、微かな日の光に目を細めた。
ぼおっとしながら視線を惑わせて、フッと自分の状況はおかしい
ことに気がつく。

「目が覚めたか」

その声はレヴォラのものであるが……気になるのはそこではない。
彼が声を発したときに微かに髪に触れた吐息。

わたしは自分の状況に気がつくともバツと姿勢を正した。

「あっ……ごめんなさい」

最後のほうは消えいりそうになってしまう。

この年にもなってこんな失態をおかすなんて……恥ずかしい。

わたしはどうやらレヴォラの肩に寄りかかって眠ってしまったよ
うだ。

「いや、大丈夫だ」

レヴォラは何ともなさそうに言うが、こっちはかなり恥ずかしい。
ただでさえわたしには危機感が足りないと言うのに、レヴォラの

前では全くと言っていいほどなくなってしまうてる気がする。これでは命のふたつ簡単にとられても文句は言えないだろう。気をつけなければ……

そもそもどうしてこうなってしまったのか分からない。

確かわたしは……

そこまで考えて、わたしは勢いよく視線を窓の外に向けた。雨は……上がっている。

確か馬車がぬかるみにはまったとき、雨の中に人魚の姿が見えて……声がした。
そこでわたしは……

「花音殿？ 顔色が悪いが……大丈夫か？」
「……平気です」

世界を壊す力……か。
なぜ闇がわたしに協力するのか、誰がわたしの記憶を消したのか。わからないことはたくさんあるけれども、わたしがこの世界に復讐する力を手に入れたことは確かで……

あの人魚は随分と難しい選択をわたしに与えたものだ。
確かにこの世界は大嫌いだが……壊す力を手に入れたからといってそれをすぐに何の躊躇もなく使えるほどわたしはまだ……

「花音殿、もう屋敷に着く。そしたらすぐに殿下と面会の予定だ」
考え込んでいたわたしにレヴオラの声が聞こえた。

王子と面会……。

またあの手錠を付けられ、扉の前で座らされ、貴族だかなんだかしらないけどあの野次馬たちの前でまるで罪人のように見られるのかとおもつと嫌気がした。

しかし、

「大丈夫だ」

わたしの顔をみてレヴォラは極力優しい声でそうやってきた。
何が大丈夫というのだろうか？

疑問に思いながら首を傾げると、レヴォラはほんの少しだけ微笑んだ。

「手錠を付けられることはもうないだろう。もっとまともな客……いや目上の客として扱われるはずだ」

なぜ？

と思つたがその矢先に今の自分の状況を思い出した。

「なんせ前回とは違う。お前は本物の天子なんだからな」

本物の天子……？

わたしは皮肉な笑みを浮かべた。

違う。

わたしは天子なんかじゃない。

屋敷に戻ると、わたしは思った以上のかわりように驚きを隠さずにいられなかった。

あのボロ屋敷の前にはきらびやかな衣装を見に纏った人が群れている。

それを見ただけで、この馬車からおりたくないと思ったのは言うまでもない。

しかし降りないわけにもいかず、レヴオラとその他に守られながら馬車を降りれば貴族と思われるその人ばかりは待ってましたと言わんばかりにはわたしに群がってきた。

「天子殿、ご苦勞様でございました」

「本物の天子とは知らず、非礼な行いを……」

「こんなボロ屋敷天子様には似合いませんわ。どうぞ我が屋敷へ」「いや、それよりも私の屋敷へ」

「天子様このドレス天子様によくお似合いになると思います。どうか受け取ってくださいませ」

「天子殿、こちらも受け取ってください」

この身の変わりよう。

あきれて何も言えない。

これでは明らかにわたしが天子と信じていなかったとモロバレではないか。

彼らがわたしを本物と置いていなかったのは前回の天子が偽者だったからということは分かっている。でももしわたしが前回の天子がいると知らなかったら絶対におかしいと思ってしまっただろう。

フェジーのおかげでわたしは前回の天子がいることを知っているが、本当ならわたしは前回の天子の存在など知らないはずである。もう少し頭を使って行動したらどうなのだろうか？

貴族のあまりの馬鹿さに呆れながらもわたしはその声を無視してずんずんと前に進んだ。王の衛兵が貴族を掻き分けて道を作ってくれるので貴族の群れに埋もれることはない。

なんだかんだ王の衛兵だけあって能力は高いらしい。

だがしかし、もうすぐ屋敷の入り口というところでフツとそのざわめきは消えた。

それがあまりにも唐突でわたしは不思議に思いながら辺りを見わたす。

貴族たちや衛兵たちの視線はわたしの後ろに向いているようだ。チラリとなりのレヴォラを見れば彼も他の人と同じ方向を向いていた。

わたしも振り返って見ると、いつの間にそこにいたのか。わたしが乗っていた馬車のとなりにもう一つの馬車があった。しかしそれはわたしが乗っていたものとは比べ物にならないほど豪勢である。

嫌な予感がわたしの頭を掠めた。

一人の衛兵がゆっくりとその扉を開けて、中に乗っている人物の姿があらわになる。やっぱりと言うべきか……彼は相変わらず堂々とした態度でわたしの感情をいちいち刺激してきた。

貴族たちはゆったりとした様子で礼をとり、衛兵たちは剣を置い

て膝をついた。レヴォラも同じように膝をつく。

この場所で彼に敬意を払っていないのはわたしだけだろう。

「わざわざこんなところまで来てくださるなんて……思ってもなかったです」

わたしはその人物に笑みを浮かべながらそう言った。

「本物の天子のご帰還だ。迎えにいくのは当然であろう?」

あっちもわたしに負けなくらいの仮面の笑顔である。

「それはそれは……ありがとうございます……王子様」

これが……3度目の対面……

皮肉な謝罪

今回の対面は今までとはだいぶ扱いが違った。

これが天子の扱いなのかと思いながらも、わたしはため息をつく。

今いるのは王の間ではない。

なんでも王の私用に使う応接間らしく、そのわりには無駄に広い部屋だった。部屋の中には対面式のソファが置かれていて、その一つには王子、もう一つにはわたしが座っている。

手錠はもちろん付けられていないし、あの野次馬こと馬鹿貴族も一人だっていなかった。

この部屋にいるのはわたしと王子、その近衛らしい人物が3人。それからわたしの護衛としてレヴォラ。そしてたぶん神官の代表とされているのだろうフェジーがいた。

部屋に入ってきた侍女がお茶を入れる様子を視界の端に入れながらも、わたしは始めてこんなにも真近に見る王子をついつい眺める。

女性らしいセハン顔負けのサラサラした銀髪は肩くらいまで伸ばされている。王の間ではよく見ることの出来なかった瞳は青色だ。しかし同じ青色の瞳をもつフェジーとよりもずっと薄い色をしている。

遠目から見てもかなり美形だとは思ったが、ここまでの美形とは

……

さぞや女性から人気があるのだろう。

入れられた紅茶を節目がちに飲む姿など絵になると思う。もしかたしがこの王子の性格をしらなければ頬を赤く染めていたかもしれない。

とはいってもこの男はわたしにとって今一番憎たらしい相手であることには変わらない。

王子が静かに紅茶を置くと、こちらに瞳を向けた。わたしは知らず知らず身体に力が入るの感じながら負けずと王子を見返してやる。

さあ、今回は何を言ってくる？

「……まず最初に、これまでの非礼をわびよう」

……はっ？

「お前は知らないだろうが、実はお前の前にもう一人天子が存在した」

うやうやしく説明を始める王子を見ながらわたしはただ呆然としてしまう。

「それはそれは悪行のすごい天子だった。国を助けるどころか子供を殺すような残忍さだ。その天子は今消え……新たな天子であるお前を召還したが、皆すぐにお前を信じることも出来なかったんだろう」

なんでいきなりそんな話に……と思いながらもふつと考える。

これがもしも、フェジーから前回の天子の話を聞いていないとき

に聞いた話だったら、もしくはレヴォラから天子の人柄を聞く前だったら……わたしあこの話を信じ込んでいたのだろうか？

「しかし今回のさわぎでお前は衛兵と国民を助けてくれた。そのことにはとても感謝している。皆もお前が本物の天子であることを認めた。これからはあのような酷い扱いをすることもないだろうな」

王子はその綺麗な顔に美しい笑みを浮かべてそういった。

でもそれは、作り笑いに他ならない……あくまで事務的に必要だからいったようものだ。

口調も王の間で会った時よりも何倍も丁寧なものになっているがその真理はどうであるか……

「……そう」

何と言っているのか分からない。

わたしが天子と分かっただけでこの扱いの変わりよう。馬鹿らしいと思う気持ちが心を掠める。

わたしは天子なんかじゃないのに……

「さて……」

そこでフツと王子の口調が変わった。あの王の間で会ったときの口調に戻ったようだ。これで王子としてのなしは終わりと言うことかもしれない。

「今すぐにもこれからのお前の身のおき方について説明したいが……さすがに帰還したばかりのお前を長い時間引き止めていると周りがうるさいからな。詳しいことは明日だ。俺にも仕事がある。」

新しい部屋は王宮内に用意した。コイツが案内するからついて行け」

そう言って王子は後ろに控えている近衛の一人をあごでさした。その人物に視線を向けると軽く一礼してくる。

「まさか本物だとは思ってなかったが……せいぜい頑張ってくれよ、天子様」

部屋を出ようとした瞬間。そう言われてイラっときたが一瞬睨みつけるだけで無視してやった。

やはりあの王子とは気があいそうにない。

新しい部屋は本当に綺麗だった。

あのボロ部屋なんかとは比べられない。けどどうしてだろうか？あのボロ部屋のほうがマシだったと思うってしまう。

わたしはソファに寄りかかりながら小さなため息をついた。

レヴォラもいろいろと報告などがあるらしくそこかへ行ってしまったし、フェジーはせっかく会えたのに一言もしゃべれぬまま、仕事があるからと行ってしまった。

本物の天子が現れて王宮も忙しそうだ。

「喉……渴いたな……」

そういえばこちらに帰ってきてからまだ何も口に出来てない。

王子と会うことになったかんだで緊張していたのか喉はカラカラだった。

部屋の中に視線を彷徨わせて見ると水差しのようなものがあるが、それを口にするのはどうも気が引けた。何か入っていたら？とおもってしまふ心がある。

ここは敵の巢のような場所なのだから……

わたしはソファから立ち上がるとそつとドアを開けてみた。
外には誰もいないようだ。

わたしは廊下にでて、水がもらえそうな場所を探すため歩き出した。

前にもこんなことがあったなと思い出してながら小さく笑みをこぼす。廊下を一人でうろついていたときにレヴォラにあつて剣を突きつけられたのだ。懐かしい……。

今は本物の天子としてこの王宮には顔が知れ渡っているだろうかそんなことはないだろう。

しばらく歩くが水が飲めそうな場所はない。というかだいぶ迷子になってしまったような気もする。仕方がないと思い、誰かに道を聞こうかなと考え始めたとき……

「王子も随分と悪いお方だ……」

そういう声が聞こえた。

視線の先にはきらびやかな服を着た貴族が二人……

何の話……？

わたしは思わず身を隠すと、その会話に耳を傾けた。

真相、そして

貴族たちはコソコソと小さく話している気なのだろうが、その声はばつちりと物影に隠れるわたしにも聞こえてきた。

「あの町への訪問……本当の目的をご存知かね？」

そう言ったのは腹のでた貴族。

本当の……目的？

そんなものがあつたと知らなかった。わたしは自然と眉を寄せる。

もう片方の無駄に宝石をつけた貴族はその言葉にいいや知らないと答えた。その様子を太った貴族は満足そうに見ると、さも自慢げに話し出す。

「あの闇との対面……実は天子を殺すことが目的だったらしい」

ニタニタとした気品のない笑みを浮かべてそう言う様子を眺めながらわたしは時間が止まったような感覚に陥った。

天子……というのはもちろんわたしのことで……それを殺すためってことは……

あの王子はわたしを殺そうとしていた？

頭をよぎるあの美しい顔を思い切り踏み潰したくなった。

泣きたくななんてないのに目頭が熱くなって、どうしていいのか分からなくなる。

「殺すって……そんな面倒なことをしなくても元の世界に返せばいいのじゃ……」

「全く……貴殿は何もお知りでないようだ。召還の魔術でこちらに異世界の人間を呼ぶことは出来ても返す方法はまだ見つからないのだよ」

返す方法がない？

そんなこと知らない。聞いてもない。だって一言も言っていなかった。

わたしは目の前が真っ暗になった。

悪いことというのはどうしてこうも立て続けに続くのだろう。

「前回と同じく力のない天子と分かり必要ないと分かったが元の世界に返すことも出来ない。だからといってココにいつまでも置いておくわけにもいかないだろうに。とっすれば殺してしまうのが一番手っ取り早い方法だと王子は考えたそうだ」

「なるほどのお」

そういうことか……

全部と言うわけではないが多少の疑問は解決した。力がないとあれほど言ったのに元の世界に帰してくれなかった理由。

帰えしてくれなかったのではなくて、帰せなかったということだ。

「なんでも闇が出てきたどさくさにまぎれて魔術で殺してしまう予定だったそうだ。あの町にでる闇はかなりの力をもっている和有名だったからな。初めての闇との対面で命を落としても可笑しくは

ないだろう？確か前回の天子も殺されかけた」

「そういえばそんな記憶もあるの」

「まあ、しかし計画は特例で彼女の護衛についていた人間が阻止
したため失敗に終わったがな……まあそれが吉とでてあの娘が本物の
天子であることが判明したのだ」

レヴオラが……助けてくれた？

あのとき……魔術の光のようなものが見えたときレヴオラが逃げ
ると言ったのは闇から守るためではなくて、王の衛兵がわたしを殺
そうとしていたから？

その事実冷め切っていた心が少しだけ温まった。

だがそれも一瞬のこと。

すぐにそれまでの事実がわたしの心を凍らせていく。

あの王子、町にでる闇は弱いと言っていたのにそれも嘘だったと
言うことが……

「何はともあれ、殺してしまわなくて良かった。これで世界は救
われるのだ！」

「ちゃんと天子と取り入っておかなくてはの」

「そうだなそうだな。とりあえず送り物でも用意するかっ」

そこまで聞いてわたしは物陰からこっそり抜け出すとその場を去
った。

これ以上は聞いている必要ないと思ったからだ。

この国の考え……王子の考えはよく分かった。

フツと窓に映った自分の顔を見て笑いそうになる。

何て顔をしているのだろうか？

「なさけないなあ……」

なんだか自分が馬鹿らしい。

この国のことも王子のことも元から大嫌いであつたけど、それでも心のどこかではいつか元の世界へ帰してくれると思っていた。

自分が天子でないと分かればきつと帰してくれると……

だけど……

その時、窓の映った自分の顔がグニヤリと歪み黒髪に黒い瞳を持った女性の顔が現れる。

「人魚……」

つぶやくように言えば人魚はクスクスと笑みをこぼした。

『いい顔してるわぁ……まさに天子にふさわしい』

うつとりとした表情をわたしに向ける人魚をみて何故か心が落ちて着いた。

『ふふふ……もう答えは出たのでしょうか？』

ふわりと人魚の手が伸びてきて、わたしの頬に触れた。

と思ったがその感触はない。ふわりとその幻のような手がわたしの頬をすり抜けていく。

「そうね……」

わたしはすり抜けた手を視線で追いながらそういった。

良かったのかもしれない。

真実を知ったことでわたしの心の中にあつた最後の壁は壊された。

わたしはこの世界にいい様に利用されていて……もう元の世界に帰ることはできない。

『さあ、カノン……』

目の前で妖美にどこまで美しく微笑む彼女を見てわたしは一度だけ目をとじた。

浮かんでくるのは大好きな家族の顔……

よくないことだということは分かっている
だけど……ごめんね

家族の残像を追い払うとわたしは目を開き人魚に視線を合わせた。

そしてゆっくりと口を開く……

その日の深夜のこと。

「闇だ！！！！王宮に闇がでたっ」

走り回る衛兵たちと飛び交う声。侍女の叫びに、魔術の光。
逃げ惑う者。立ち向かう者。食いちぎられる者。

「おいっあつちは！！誰かその闇を止めろ！！その方向は……殿下の寝室だ！！！！！」

夜に溶け込むようにして存在する闇が、尋常ではない速度で王子様の寝室に向かっていく。

誰もが混乱し、絶望と、痛みと、嘆きを感じる中……

わたしはふんわりと微笑んだ。

偽りの天子

「何をしてるのだっ！」

ふわふわとした妙に心地よい足取りで王宮の庭を歩いていると聞き覚えのある声に呼び止められた。

振り返ればその青い瞳がわたしを見つめている。

でもその瞳に恐怖を感じる事はない。

「フェジーさん」

わたしはクルリと振り返ると、フェジーに視線を合わせて立ち止まった。

フェジーはずいぶんと焦ったような顔をしている。

まあ今ここで起きている出来事を考えれば当たり前なのだろうけど。

「どうかされましたか？」

ちよこんと首をかしげて聞けば、フェジーは少し苛立った様子で早口でまくし立てた。

「ここで何が起きているか知っているだろう！そなたがここには危険だ今すぐにどこか安全な場所へっ」

「なぜです？」

わたしの身を案じてくれているフェジーの言葉は素直に嬉しいと

思った。それがたとえ立場上でできた言葉だとしても嬉しい。

やはりわたしはフェジーが嫌いになれそうにない。
たとえどんなにこの国を憎んでいたとしても……

「なぜって、天子であるそなたが闇に食われでもしたら大変であるうつ！」

「……それ、可笑しいですよ」

フェジーの言葉を耳にしながらかわたしは微笑んだ。

「フェジーさん、ここは普通、一刻も早くこの闇をどうにかしてくれと頼むところですよ？だってわたしは天子なんですから」

そういえば、フェジーは今その事を思い出したような顔をする。どうやらフェジーの中でのわたしはまだ力のない偽者の天子のようだ。

実際にわたしが闇をどうにかする場面を見ていないのだから当然と言えば当然だが。

「さつき衛兵の人が闇が王子様の寝室に向かったと叫んでました。急がなくてはいけないのでは？大切な殿下の命……食われてしまうかもしれないですよ」

全て言い切らないうちにフェジーは王子の寝室がある部屋に走り出していた。やはりフェジーは王子に忠誠を誓ったいるのだと思う。

あんな王子に忠誠を誓う意味がわたしには分からないが……

「……………殺してない？」

フェジの姿が見えなくなると同時にわたしは小さく呟いた。すると黒い霧のようなものがわたしの体にまとわりつき、ソレは少しずつ人の形を取っていく。

しばらくすると、黒い人魚がわたしの首にその白い腕をまわすように格好で現れた。

『もちろんよ……ふふふでも早く行ってあげてね。あの子達が力ツとなつてついつい殺してしまう前に……』

「分かつてるわ」

わたしはそれだけ言うと、その人魚を振り払って歩き出した。行き先はもちろん王子様の寝室……

王子の寝室がある塔はあまりにも無残な光景となっていた。

腕や足をを噛みちぎられたような惨い光景が嫌でも目に入る。だがみんな生きてはいた。

人を食らう闇がどうして息の根をとめずにこんな中途半端な状態のままで置き去りにしているのかと言えば、もちろんわたしが“誰も殺してはいけない”と言ったからであるが……

こんな死ぬ直前のような状態で生かされていても逆に辛いだろうに。いまいちわたしの言葉を理解してくれていなかったようだ。

わたしは苦しむ人々を尻目に足を進めた。

手当てしてあげる能力なんてわたしにはないのだから仕方がない。

ゆっくりとした足取りで階段を登っていく。王子の寝室はこの塔の最上階の一つ下であると人魚が言っていた。

上に行くにつれて騒がしくなる、誰かが叫ぶ声と……唸る声。

見なくてもその状況が手にとるように分かった。

ここまで上手くいくとは……

思わず笑みが零れ落ちる。

「危ない避けろっ」

あともう少しというところでそんな声が上から聞こえた。

どうやらかなり緊迫した雰囲気になっているようだ。

“でも早く行ってあげてね。あの子達がカツとなってついつい殺してしまう前に……”

そう言った人魚の声を思い出して、わたしはそろそろ危ないかなと足を速めた。

最後の階段を登りきり王の寝室がある階にたどり着くと、そこにはなかなか悲惨な状況であった。

傷を負い座り込んでいる者もいれば、それでもなお戦い続けようとしている者もいる。そしてそんな衛兵の視線の先には真っ黒な毛を纏った、犬によく似た獣たちがいる。

彼らは鋭い牙を見せ付けるように大きく口を開き、容赦なく衛兵たちへ攻撃していた。

「殿下っ！……！」

フツと奥のほうに目を向ければ、フェジীর姿が見れる。右腕と右足を闇にかまれていて動けないようだ。わたしはその光景に思わず我を忘れてしまいそうになったが、ソレを止めるほどの光景が目に入ってきた。

闇たちの中でもひととき大きいその闇は、大きく口を開いていて……その目はただ一点を向いている。

「殿下！！お逃げくださいっ」

フェジীর声が大きく響いたと同時にその闇は高く飛び掛り、その他数匹の闇に取り囲まれ逃げることも剣を振るうことも出来ない無力な王子にその牙を立てようとしてた。

わたしはその光景を見てふわりと微笑む。
そして小さく息を吸うと、“魔法の呪文”を呟いた。

「やめてっ！！！！」

叫んだわたしの声はフェジীর声以上にこの場によく響き渡った。

その瞬間闇たちの動きはピタリと止まる。

呆然とその光景をみた衛兵たちは何故？という顔をしてキョロキョロとあたりを見わたした。そこで初めてわたしと言う存在に気がついたようだ。

皆、目の前の敵に氣をとられて気がつけなかったようである。

「天子……様」

呆然と呟かれる自分の名を聞きながらわたしはゆったりとした足取りで歩みを進めた。

それと同時に闇たちがうたと夜に溶けるように消えていく……

わたしは誰よりも呆然としている王子の前に立つとにこりと微笑んだ。

「お怪我はありませんか？王子様」

わたしは今、偽りの天子となる。

偽りの天子（後書き）

見直ししてません。

天子カノン

赤と青の三日月が交差するこの空にもだいぶなれた。
今は青の月が前に出ているから夜。

最近知ったのだがこの世界には一年に一度明るいままの夜があるらしい。いわゆる地球でいう白夜のような光景に似ている。
わたしが召還されたあの日はちょうど白夜。なんでもその日は魔力が高まるとかでわざとその日に召還したらしい。

夜風にあたりながらぼんやりとその月を眺めていると、フッと自分の後ろに気配を感じた。

振り返ればそこにはわたしが待っていた者たち……

わたしはその者たちを見るとニコリと微笑んだ。

「昨日はどうもありがとう」

そういえば、低く唸るような声が返ってくる。視線の先にいる者たちは、昨日王宮を暴れまわった闇たちだ。

真っ黒な体毛に覆われているその闇は犬よりも少し大きくて一見恐そうだが、近くで見れば目がクリクリとしていて案外可愛らしい顔をしている。

もちろん、その威容に長く鋭い牙を見なければの話だが……

（何も気にすることはございません。我らがカノン様に従うのは当然のこと）

そう答えてくれたのはこの闇たちのなかでもひととき大きな存在。

王子をかみ殺そうとした闇だ。この子がこの闇たちのリーダーらしい。

「そつか。……ねえ……どうして教えてくれないの？わたしと……闇の関係……」

ずっと疑問に思っていたことだ。

人魚にこの国に復讐する力をくれたと頼んだとき彼女はこの犬型の闇をわたしに託してくれた。

最初はその容姿の恐ろしさに自分が逆に食われるのでは？と思っただけ、闇たちは恐いくらいわたしに従順だったのだ。

わたしがポツリポツリとこの国に復讐してやりたいこと、そのためにこの国の人間にわたしが本当の天子であると思わせたいことを話すと彼らはだった。良い方法がありますと言い今回の王宮襲撃計画を立ててくれた。

この国全体にわたしが天子であることを知らしめるには王子が殺されそうになったところを助けてやるのが一番手っ取り早いということであの演出となったのだ。

闇とわたしの関係がバレるのでは？と心配になりながらもこの計画をやってみたら、それは大成功に終わった。

あの場にいた衛兵のほとんどがわたしを天子と信じ込みその話をたくさんの人間にしたため、わたしが本物の天子であるという話はほぼ確定事項となったようだ。

ただ一つ気になるのは王子がわたしを天子と信じたかがよく分からないと言ったこと。

王子は一番深手を負っていてわたしが助けた後すぐ意識を失った。なんでもあと数秒わたしが助けるのが遅かったら死んでいてもおかしくなかったらしい。意識を保って戦っていたことがおかしいくらいの怪我だったそうだ。

あのあとすぐに医務室に運ばれて、今も集中治療中とのことだ。

何もそこまでやらなくても……と後で闇たちに言ったところ、まだ足りないくらいですとの答えが返ってきてわたしは苦笑することしか出来なかった。

（……それは、ナナリ姫が自分で思い出さなくては意味がないことだとおっしゃっておりましたから）

わたしの質問に闇は少し言いにくそうに答えた。

ナナリ姫……いわゆるあの人魚が口止めしているということ……。だったら今度人魚に会った時にでも聞いてみるしかない。

「分かった」

（申し訳ない）

しゅんとする闇がやっぱり可愛いと思った。

（我らは一刻も早くその記憶がお戻りになることを願っております。そうすれば皆喜ぶ。きつとあの方も……）

「……………あの方？」

あの方って誰？と聞こうと思ったとき、闇たちが一斉に後ろを振

り替えり月を見上げた。

つられるようにしてわたしも月を見上げると青い月が後ろに下がり赤い月が前に出てこようとしている。

朝が来るのだ。

（カノン様……）

「うん。もう帰っていいよ」

微笑みながら言う。

この犬型をした闇は別に夜しか動けないと言うことではないが日の出ている時間はどうも魔力が弱まるらしい。そんなときに王宮の人間に会ってしまったら勝てるかどうか微妙なところなので日が出る時間はあまり外の出ないそうだ。

（我らの力が必要なときはいつでも及びください。すぐに駆けつけましょう）

最後にそう言い残すと闇たちは夜に溶けるように消えていった。

「……ありがとう」

わたしの小さな呟きは空に消えていく……。

しばらくその場にたたずんでいると、ぼんやりと夜が明けていくのが分かった。

「あつ」

そのときやつと早く自分の部屋に戻らなくてはいけないと言うことに気がつく。朝になれば誰かしら部屋に来てもおかしくない。

わたしは急いで自分にあてがわれた……いいや、世界を救う天子様にあてがわれた部屋へと向かった。

部屋についた後、数時間して通常の起床時間になると部屋をノックする音が聞こえて誰かが入ってくる。

それは王宮内で何度も見かけた侍女たちだ。彼女達はベットに腰掛けたままでいるわたしを見ると深々とお辞儀してニコリと微笑んだ。

「おはようございます天子様。良い朝でございますね」

わたしはそんな彼女達を見てふわりと作り笑いを浮かべる。

「おはようございます」

王宮襲撃から1週間後……

今までアデール国の王宮内および上級貴族にしか報告されていなかった天子の存在が、アデール国全域及び他国の王族たちに正式に報告された。

また偽者なのでは？と心配する声もあがったらしいが、その事を見越して、天子に魔術はなく代わりに闇を止めることが出来る不思議な言霊を操るということも一緒に報告されたと言う。

実際にその光景を見た衛兵があまりにも熱く説明するものだから民衆のほとんどが信じ込み、世界は天子の出現に安堵した。なかに

は涙するものもいたと言う。

かくして天子カノンの名は世界中に知れ渡った。

「……馬鹿みたい」

その報告を聞いてわたしは小さく呟く。

まだ誰も知らない

その天子がこの世界を壊そうとしているなんて……

天子カノン（後書き）

これで一区切りとなります。

読んでくださりありがとうございました。

【幕章】動き出す世界・上

ピチャリと水しぶきが舞い、黒い霧が辺りを浮遊する。

その霧は少しずつ人の形をとっていき……数秒すればそれは黒髪に黒い瞳をもった人魚の姿へと変わっていた。

「あら……おかえりなさい」

人魚ことナナリは自分の目の前にいる犬型をした闇をみるとクスクスと笑い声を上げながらそう言った。

「お勤めご苦労様。大成功だったそうじゃない……ふふふっカノンも喜んでいたでしょう？」

ナナリのその言葉を聞いて犬型をした闇のリーダーは少しだけ顔を歪ませる。

（ナナリ姫……お聞きしたいことがございます）

闇は少し言いくそうにそう言った。

するとナナリはちょこんと首をかしげてなあに？と問いかける。

（なぜ……カノン様に本当のことを教えなのでしょうか？）

「……その質問には前にも答えた気がするわ。自分で記憶を取り戻したほうがいいと思ったからよ。私がもしカノンに本当のことを言ったとして……カノンはソレを信じられるかしら？」

そう言われてしまえば答えは否としかいいようがない……。だか

らといつていつ思い出すかも分からないカノンの記憶を待っているのは何とも効率的ではない気がする。

それに……

（カノン様には一刻も早く記憶を取り戻してもらうべきであると……ナナリ姫も分かっているでしょう？我らとてカノン様が自力で思い出してくればそれが一番とは思いますが……だからといって自力で思い出すのを何年も待っているほど時間はないでしょうにっ）

その言葉を聞いて、ナナリは不適に微笑んだ。

「ねえ……それはあの方のことを思っているのかしら？」

いつの間に移動したのか、ナナリは闇の目の前まで来ていてその首すじをそつと撫でながら聞いてきた。なぜか悪寒を感じ闇はブルリと震える。

（そうです）

そういつた瞬間、首筋にナナリの爪がグイッと食い込む。その可憐な容姿からは想像できないほどの力が込められる。それは彼女が闇であり……また上級の位を持っていることを示していた。

闇は声になら声をあげて、グルグルと呻くがナナリは手の力を緩めようとはしない。それどころかその力はどんどん強まっていく。

「ふふふっ」

ナナリの笑い声が響きわたり、闇の意識が途切れそうになったとき……フツとその力が緩まった。

奇妙な声を上げ、息を整えながら闇は一体何が起こったのかと辺りを見わたす。そしてナナリの顔をみて驚愕した。

その真っ白な肌に一筋の血が滲んでいる。

ナナリはその傷を指先でそつと触ると不快そうに眉間にしわを寄せてその視線を後方にやった。

その視線の先にいるのは……犬型をした闇……首を締め付けられていた彼の仲間だった。ほとんどの仲間はナナリに恐怖して動けなかったが、その闇だけは彼を救うために動いたのだ。

しかし、ナナリに傷をつけるのは自殺行為と言ってもおかしくない。

ナナリに傷をつけた闇は来るであろう死への衝撃に目を閉じた……

しかしその衝撃はいつまでたつても来ない。恐る恐る目を開けてみればナナリはクスクスと笑みをこぼしながらこちらを見ていた。

「本当だつたら殺してあげたいところだけど……今回は私も悪ふざけが過ぎたし……ふふふつそれに貴方は今回カノンのためによく働いてくれたから、それに免じて許してあげるわ。ちょっとイライラしてたのよ、ごめんなさいね」

言いながらナナリは自分の顔に出来た傷をソロリと上で上げる。すると水の膜がその傷を包み込み次の瞬間にはその傷は消えうせていた。

「それから……カノンの記憶のことだけれど……」

ナナリは自分の髪をいじりながら少しだけ困惑気味の表情を浮かべる。

「これはあくまで私の憶測……だけど確証がないわけではない。というよりもそのほうがしっくりくると言っべきからしら？」

闇たちはそっと聞き入るように耳を傾けていた。

「カノンの記憶を消したのは……あの愚王たちではなくて、もしかしたらあの方かもしれないわ」

ピチャリと水しぶきが舞う。

同時刻、王宮

「レヴォラ・シールド、そなたを天子カノン殿の正式な護衛として任命する」

「はっ」

いつもの軽装とは違う、重そうな正装を身にまといながらレヴォラは深々と頭を下げた。

カノンが天子であると判明し、正式な護衛が必要となった時一番最初に候補にあがったのはやはりレヴォラだった。

あの時……王子が計画した偽天子暗殺計画をレヴォラが止めていなければ世界は救世主を殺してしまったことになっていたのだ。

天子を救ったレヴォラにこそ護衛はふさわしいと誰もが口々に言い、レヴォラ自身彼女の護衛になろうと心に決めていたため、レヴォラが護衛となることはすんなりと決定した。

「レヴォラよ」

簡単な儀式を終えたあと、レヴォラの元にはフェジーが訪れた。フェジーの姿を見たレヴォラは深々と礼をとる。

「今回はあの娘の護衛を引き受けてくれたこと感謝する。そなたならきつと上手くやっていけるだろう」

「恐縮でございます」

頭を下げたままそういうレヴォラにフェジーは苦い笑みをこぼすだけだ。

「ところで……一つお聞きしたいことがあるのですが」

顔を上げたレヴォラはフツと思い出したかのようにフェジーにそう問うた。

「なんだ？」

「はい。私以外にももう一人花音殿……天子の第一護衛として魔術師がつくと聞きました。一体誰がつくかフェジー様はお知りでしょうか？」

前回の天子のときは武術を担当する一人だけが専属の第一護衛としてついていたが、今回は本物ということもあり人の攻撃から守るために騎士のレヴォラを、闇の攻撃から守るために魔術師を一人専属でつけるという話だった。

しかしこの場にはその魔術師らしき人物はいない。

「ああ……その魔術師は」

「っ失礼致しますっ！！！！」

フェジーが答えようとしたとき、部屋の扉が大きな音をたてて開いた。中に入ってきたのはどうやら王子付きの衛兵のようだ。息を切らしているところを見ると走ってきたのだろう。

「なんだ？」

フェジーが冷静に対処すると、衛兵は少し息を整えてから姿勢を正した。

「お伝えします。先ほど、意識を失っていた殿下が目をお覚ましになりましたっ」

【幕章】動き出す世界・下

アデウール国第一王子であるアゼリ・ディア・アデウールは目を覚ました瞬間あまりの騒がしさを不思議に思い、近くににいる近衛に聞こうと身体を起こそうとした。

しかし、すぐに体中に走る激痛に眉をしかめて、ベットに逆戻りする。

「殿下!!」

「無理をなさらないでください殿下」

「医者つ、早く殿下を」

周りの声を聞き流しながら、自分の状況を思い出そうと頭をひねる。

するとそんなアゼリの状況を察したかのように一人の近衛が彼の近くに膝をついた。

「先日闇が王宮を襲い、殿下はその闇たちのせいで大怪我を負ったのです。どうか今は安静にお過ごしください。傷は深く、魔術の治療も終わっておりません」

その言葉を聞いて、少しずつ記憶が戻り始めてきた。

自分の腕をチラリと見ると、巻かれた包帯からは血が滲んでいる。闇にアレだけの襲撃を受けて生きていられたことは奇跡に近いだろう。

それなのに自分が生きていられる理由……

蘇っていく記憶の最後。

あの血に塗れた場所で、誰もが苦しみもがくあの状況で……ただ一人ふわりと微笑を浮かべていたあの女……

“お怪我はありませんか？王子様”

彼女のその声を聞きながら自分は意識を失ったのだ。

「あの娘は……」

「天子様のことでございますか？」

「ああ……」

「天子様のご召還はいまや世界中に報告されました。各国から祝いの言葉やお披露目のパーティーを開けとの手紙がたくさん届いております。これからまた忙しくなるでしょう。殿下には早く元気になってもらわなくては困ります」

冗談まじりにそう言う近衛に微かな笑みを返す。

「そうだな……」

言いながら考える……

アゼリは天子など存在しないと思っていた。

闇を倒し世界を救う存在なんて都合が良すぎる……そう思っていたのだ。

案の定、召還された天子は魔術を使えなかった。だから消した。

これで天子など存在しないと分かっただろう？と言ったが周りには認めず2度目の召還を行うようにいったのだ。そして今回も偽者だと、これで皆天子が存在しないと信じると……そう思っていたのに……

あの時……自分が見たのは天子以外の何者でもない……

「まさかこの俺が……」

アゼリは呟きながら苦い笑みを浮かべた。

自分も民も自身で守り続けてきたはずの自分が、まさか誰かに守られる日がくるなんて思ってもみなかった……

一度目を閉じて、天子の姿を思い浮かべる。

「状況を報告しろ」

そして王子は、目を開いた。

数時間後……

「セハン殿」

名を呼ばれて振り返れば見知った顔がこちらを見ている。彼はセハンと同じ宮廷医師だ。セハンよりも数倍下っ端だが……

「なんでしょうか？」

ニコリと微笑みながら言えば、相手は一瞬頬を染めたがすぐに凛々しい顔をする。

「実は殿下の治療にあたる医師が不足していて……セハン殿にも協力していただきたいと思ひまして参りました」

その言葉にセハンを少し大げさに肩をすくめてみせた。

「ただでさえ怪我をした衛兵の治療で魔力をこっそり使ったというのに、まだ使わせるつもりですか？こっちの体力も考えてくださいよ」

「あつ……いや……分かってるのですが、こちらこそ……その」

困ってしまった相手を見てセハンはため息をついた。

「分かりました。でも少し休憩をください。魔力が安定したらすぐにそちらに向かいます」

そういえば、相手は安心したように笑顔を見せてくる。なんとも分かりやすい反応だ。

「ありがとうございます。セハン殿」

軽やかな足取りで帰っていく同僚をみながらセハンはため息をついた。

あの娘が天子とわかって状況が随分と変わった。尋常ではないくらいに急がしさに休まる暇もない。

彼女を思い出してみても、自分に言わせればただの娘だった。特別な力があるようにも思えなかったが……

「お嬢さんもこれから大変だろうに……」

セハンの呟きは誰に聞かれることもなく消えていった……

「何をしている？」

しわがれた老人の声が響いた。

その言葉に窓の外に視線を向けていた少年は振り返る。

「別に？」

ニコニコと笑みを浮かべながら窓際から離れると、置かれているソファに勢いよく座った。

「お前：わたしの話は聞いていたのか？」

「大丈夫。ちゃんと聞いてたって、心配性だなあもつ」

いまいちしくりこない返事をする少年に老人は眉間にしわを寄せた。

「わたしはお前を信じているのだ。それを裏切るような行いは」

「しないってば」

「だがっ、っ……ぐあっ」

まだなお少年に何かを言おうとした老人の首が急に絞まった。老人の首に何があるわけでもないのに老人の首はギリギリと締め付けられていく。

その様子を少年はニコニコとしながら眺めただけだ。

「同じこと何回も言うのって嫌いなんだよね」

そう言って少年がスツと手を振ると老人の首の締め付けはなくなった。老人はその場に膝をつき、ゴホゴホと咳き込み、不足していた酸素をとりこむ。

「だいじょーぶだよ。僕はそこまで馬鹿じゃない」

少年はそい言っってもう一度月に目を向けた。

「世界を救う、天子様ねえ……」

想像する未来

（知ってる？知ってる？）

そこには真つ黒な毛をもったウサギによく似る獣たちが集まっていた。そのうちの1匹がぴょんと前に出て面白可笑しそうに周りの仲間に問う。

（何が？何を？）

わけのわからない仲間はそう言って小さく首をかしげた。するとその獣は悪戯な笑みを浮かべる。言いたくて仕方がないという感じだ。

（なんとねっ！天子が現れたんだって）

声高々にそう言った獣に、周りの獣は微妙な視線を送った。何かに戸惑うかのように……

（天子……天子って僕たちを殺すっていうあの天子？）

（そうそうその天子だよ）

一匹がそう問えば、獣は肯定するためにひとつ頷く。
するとそれと同時に、周りで聞いていた獣たちの空気がフツと変わった。

（天子？天子だって？）

（じゃあ殺さなくちゃ、あの方に危害を加える前にその天子を殺

さなきや)

(殺さなくては殺されてしまう)

(人間の天子。殺せ殺せ)

(殺せ殺せ殺せ殺せ殺せっ！)

ウサギによく似たその可愛らしい風貌から予想できない鋭い牙をむき出しにして、毛に隠れていたのであるう長く切れ味のよさそうな爪をとき始める。

木々がサワサワとゆれ、どこからともなく彼らとは違う黒い獣たちとその場に集まってきた。

(あの方を殺そうとする天子だって?)

(なら人間の愚王共々殺してやろう)

(さあ牙を向ける)

(すべては我らがあの方のために……)

(ああ！ちよちよ、待って待って！)

すっかりその気になっている周りの獣たちをみて、原因となる話をした獣は焦ってそれをとめた。そうしてなんとか静かになった獣たちをみて安堵する。

(あのね、殺さなくたって大丈夫だよ)

(どうして? どうして?)

(殺さなければあの方が……我らが……)

(落ち着いてよ。ここからが重要なんだ)

それを聞いて獣たちはまた騒ぎだした。そして先を促すように獣をみる。

(実はねこれはナナリ姫からの伝言なんだ。すべての僕ら闇に伝

えるようにってね)

獣はニイと口をあげた。笑うウサギとはなんとも奇妙である。

(その天子っていうのはね……)

どこかどこか遠い森。

世界の誰もが気付かないうちに崩壊への下準備がはじまりつつある……

——アデール国——

「王子様が？」

わたしは部屋にやってきたレヴォラの話を聞いてっ少しだけ目を見開いた。

あの王宮襲撃事件から10日がたとうとしている。
わたしという存在……天子の存在が明かされたのがほんの3日前のこと。

そして今さっきあの王子が目覚めたという報告を聞かされた。

何度か数秒ほど目を覚ますことはあったが、今回はまともに会話が出来るほどだという。

王子の目覚めに城はかなり騒いでいる様子だ。

しかしながら闇に怪我を負わされて10日も起きないなんて、闇

がどれだけ恐ろしい存在かということを変更して思い知らされた。

そしてソレを操ったのが自分だと思つと……いまいち実感がわかない。

「と言う訳だ、王子の容態が落ち着いたら……」

「はい、分かりました」

レヴオラの報告を聞く限りでは王子はわたしに会いたいと言っているそうだ。

また嫌味を言われるか……もしくは計画が上手くいき……王子がわたしを天子だと信じ込んだか。

会いたくはないという気持ちはあるが会わないわけにいかない。

王子の信頼を勝ち取ることは重要だろうから……

「それから……」

少し言いずらそうな声をするレヴオラを見てわたしは首を傾げた。こんなレヴオラの顔を見たのは初めてだ。

「俺が……お前の専属の護衛になることが正式に決まった」

「……え」

レヴオラが？

それはそれは……

「嬉しいです」

思わず笑みがこぼれてしまう。

レヴォラはそんなわたしを見て少し目を見開いた。
そういえばこっちに来てからこんなに自然に笑みがこぼれたのは初めてかもしれない。

だがしかし嬉ことには変わらない。

「もし全く知らない人が護衛とかになったらどうしようかと思いました。レヴォラさんなら信頼できますし……本当に良かったです」
「……そういうことか」

ぼそりと呟かれた言葉をわたしは聞き取ることが出来ず首をかしげた。

「ああ……だが……専属の護衛は俺だけではないようだ」

わたしはその言葉にもう一度首をかしげる。

「護衛には2種類いる。交代制でお前を護衛するただの護衛と、俺みたいにはぼ1日中護衛する専属の護衛だ。前回の天子の専属は一人だったが……今回は2人になった。武術を専門とする俺ともう一人……魔術を専門とする魔術師がお前の専属護衛となる」

「魔術師？」

魔術師と言われて思い出すのはわたしを殺そうとした……あの光。それからわたしを召還したのも魔術師と言う存在だ。

わたしの中で魔術師というものはあまり良い印象がない。

「その魔術師というのはどういう人なんですか？」

とは言っても全てが全て悪い人と決め付けるのはよくない。出来るのならば険悪な関係であるよりも友好的になるべきだ。たとえ全て壊してしまうことになるうとも……

「それが、俺も誰がよく分からないのだ」

分からない？わたしは首をかしげてレヴォラを見た。

「それで誰であるか聞こうとしてフェジー様に聞きかけたところで殿下の目覚めが報告されて、結局分からずじまいということだ」

なるほど……

「魔術師……ね」

わたしは空を見上げて、これから先の未来を想像した。果たしてそれは、美しいのか、汚いのか。

わたしにだって分かりはしない。

アリエナイ

専属護衛なる魔術師を気にしながらも、レヴォラと何気ない話をしているときだった。

コンコンと部屋をノックする音が聞こえてわたしは扉の方を振り返る。

「カノン殿はそのままで」

同じく扉のほうを振り返ったレヴォラはわたしに一言そういうと扉のほうへ向かった。

「どちら様でしょう?」

言葉は丁寧なのにどこかピリツとした空気が流れ込んだ気がする。

「そんなに警戒しなくてもいいじゃないかな? セハンだよ」

ちょっと呆れたようなその声色にわたしは安堵した。

わたしが天子であることが判明してからはこの部屋に見ず知らずの人間が尋ねてくることが多い。服装からしてどっかの貴族だろうが、はつきり言ってそういう人間とは話したくもない。

それなのに押しかけてくるから迷惑なものだ。

「通してあげてください」

レヴォラにそう言えば彼は無言で扉を開けてくれた。扉の向こうには女性みたいに綺麗な顔をしたセハンがいる。

会うのは随分と久しぶりだ。

「こんにちはお嬢さん。ご機嫌いかがかな？」

「こんにちはセハンさん。まあまあですね」

立ち上がって彼を迎えると、セハンはニコリと笑いながらわたしの前のソファに腰を下ろした。わたしも座っていたソファにもう一度腰を下ろす。

「それにしても随分と綺麗な部屋だね。前の部屋とは大違いだ」

部屋を一通り見回したセハンはそう言って感心したようにため息をついた。その様子にわたしは苦笑するしかない。

「まさかお嬢さんが本物の天子様とはね……いまだに実感がわかないよ」

「そうですか……わたしも同じです」

笑顔で嘘を付く。別に難しいことではない。

「まあ、まだ本格的な天子としての活動がないからね。当然と言えば当然か」

納得したように頷くセハンを見ながら、本格的な天子の活動がどんなものか考えた。といっても思いつくのは闇を退治するということだけ。

それ以外に天子の仕事なんてあるのだろうか？ 謎だ。

「ああそういえばレヴォラは専属護衛になったそうだね、おめでとう」

「……ありがとうございます」

セハンはフツと思い出したようにわたしの背後に立っているレヴォラに視線を向け笑顔でそう言った。お礼をいうレヴォラはどこか愛想がない。もうすこしセハンを見習ってにこやかにした方がいいとおもふのだが……

つとそのときあることをわたしは思い出した。

「ねえセハンさん」

「なに？」

「セハンさんはご存知ですか？わたしのもう一人の専属護衛になるっていう魔術師のこと」

「ああ……」

セハンの位というものがどれだけ高いかは知らないけど、この人ならいろいろ知ってそうだと思ったのだ。案の定セハンは知っているというような顔をして、ニヤリと妖美な笑みを浮かべる。

「知りたいの？」

その笑顔にゴクリと思わずつばを飲みこんでしまった。
わたしは知りたいと言うように一つ頷く。

「まあお嬢さんには知る権利があるよね。でもこれはまだ非公式なことであまり広めてはいけないということになってるんだよ」

非公式？

なんだか怪しさを感じるのはどうしてだろうか。

「レヴォラも……まあ相方になるんだし、いいかな。二人とも正

式発表があるまでちゃんと黙ってられる？」

「もちろんです」

「はい」

やけに焦らしてくるセハンをじっと見つめて話の先をうながした。きつとレヴォラも同じような感じだろう。

「実はねその魔術師ってのは、五大魔術師から選ばれたそうだよ」
「……………えっ」

声を潜めてそう言ったセハンを見ながらわたしは言葉を失った。

“五大魔術師”という言葉が頭を何度も回っていく。

五大魔術師というのはわたしをこんな世界に召還した張本人で……………
わたしが憎む人間で……………

そんな人がわたしの護衛？

ありえないありえないあえいえないアリエナイ……………

五大魔術師というのが個々にどんな人物かなんてわたしは知らないけど、五大魔術師ということだけで虫唾がはしる。

だって、そいつらが何もしなければわたしはこんな世界に来ることとはなかった。

わたしをこの世界に呼べと言った人々、それを認めた王子、そしてそれを実行した五大魔術師。

全部憎い……………

そんな人間に守られるくらいなら……

「カノン殿？」

その声にわたしはハツとして振り返った。視線の先には不思議そうな顔をしたレヴォラがいる。

「あつ、ごめんなさい……。五大魔術師がどんな人か考えていて……」

咄嗟にそう言った。あながち嘘ではないから大丈夫であろう。そんなわたしの言葉を聞いてレヴォラは何に納得したのかは知らないがああと頷く。

「五大魔術師がお前を召還した人たちであることは知っているだろう？とても優秀な術師たちだ。普段は誰かの護衛につくなんてことはしないが……天子は別格ということだろうな。闇からも確実に守ってくれる。お前は幸せだな」

……………“ 幸せ ” だって？

少しだけ笑みを浮かべながらそう言ったレヴォラにわたしは作り笑顔で答える。

五大魔術師に守られることが……………“ 幸せ ” ？

まあ、そうなのかもしれない……

何も知らないままだった状態なら、この国の最高魔術師に守って

もらえるほど大事にされているということなのだから確かに幸せなのかもしれない。

だけど……

「それでセハン殿、五大魔術師の中の誰が護衛につくのですか？」
「ああ、それはね」

セハンとレヴォラがまだそんな会話をしていたがわたしの耳には半分も入ってこなかった。

“ 幸せ ” ？

いいや

最高に最悪だ……

お披露目

「お嬢さん聞いてる？」

レヴォラと五大魔術師の話題で盛り上がっていたセハンが、フツと黙り込んでしまったわたしに気がついたように話しかけてきた。わたしは咄嗟の作り笑いをセハンに向ける。

「えと、ごめんなさい。ぼおつとしてました」

もう苦笑するしかない。

セハンはそんなわたしは一瞬無表情に見つめたがすぐにいつもの笑顔になった。

「そう……。ああそれからもう一つお嬢さんに言わなきゃいけないことがあったんだ」

「まだ何か？」

セハンの言葉にレヴォラは不思議そうな顔をする。

「こっちのほうが大切な話なんだよね」

そういえばセハンは悪戯っぽい顔をした。何？っと思いつながらセハンを見つめると彼は笑みを深くする。

「実はね、お嬢さんを……すなわち天子様を歓迎するパーティーが行われることが決定したんだよ」

「……………はっ？」

パーティーって……。

さすがは異世界。さすがは王子様とでも言っべきなのだろうか？
わたそは言葉を失ったまま固まる。

「天子の存在が各国に明かされてからお披露目しろっていう声が
国民や他国からもう大量に来ていてね。殿下も目を覚ましたことだ
し、そろそろ……ってことらしいよ」

なるほどね。

本物と分かったとたんコレか。

「そのような場合は苦手か？」

浮かない顔をするわたしを見てレヴオラがそう尋ねてきた。
嫌いなにもパーティーなんてもの行ったことすらない。そんな
の金持ちのすることだろう。

コレも世界の違いなのか、こちらではパーティーは行ったことがある
というのは当然なのかもしれない。

「いいえ……」

ただ珍獣扱いされながら見られるのが嫌なだけ……
というのは口が裂けても言えない。

だか珍獣扱いされるのは確かだろう。
出来ることなら行きたくなどない。

「まあ、各国の上級クラスの方が集まるし、国民の前にも姿を見

せることになってるから大変だろうけど……仕方がないね。何て言
ったって本物なんだから」

本物……ね。

ある意味本物と言えば本物だが、偽者と言えば偽者だ。

「開催日は今から1週間後。その頃には王子も回復されてと思
うからね。大丈夫かな？」

言葉ではわたしに確認をとるように言ってるが、その目はわたし
にいいえということ許していない。

わたしにパーティーに行かないという選択肢は最初から与えられ
ていないようだ。

それならそうとはつきり言えばいいものを……

「わかりました」

ふんわりと微笑みながらそういえば、セハンはありがとうと言っ
て微笑んだ。

「それじゃ、あまり無理はしないように。パーティー楽しみにし
てるよ」

「はい」

「それからレヴオラ。この後パーティーの護衛の打ち合わせがあ
るらしからそっちに向かってくれろ？」

「分かりました」

レヴォラの返事をきくとセハンはこちらをむき最後にニコリと微笑んだ。

「それじゃあ、次はパーティーのときに」

「楽しみにしてます」

「花音殿、俺もこれで」

「はい、レヴォラさんもお仕事がんばってください」

わたしは微笑みながら二人を見送った。

扉が閉まるとその笑みがフツと剥がれ落ちる。

楽しみにしてます？

自分が言った言葉に吐き気がしそうだ。

この国の貴族たちだけでもムカつくのにそれが他国まで加わり、さらには国民まで加わりしたらわたしはどうなってしまうか。

前回の天子の影響で、“天子”の印象は悪い。他国の人間にどのような扱われるか……。その状況を頭に思い浮かべて顔をゆがめたときだった。

「あらっ、逆にとればコレは良い機会じゃない」

不意に聞こえた声にわたしはビクリと肩を揺らす。

部屋を見わたせば黒い霧のようなものが宙を舞っていた。わたしはそれを見て目をスツと目を細める。

「人魚……」

呟けば、その霧はフワフワとしながらも人の形をとっていった。そしてものの数秒でそれは真っ黒な人魚に変わってしまう。

「ふふつ、こんばんはカノン。そろそろ人魚じゃなくてナナリって呼んでくれると嬉しいのだけど」

冗談交じりにそういう人魚、ナナリを見ながらわたしは窓の外に目を向けた。いつの間にか夜になっていたらしい。気がつかなかった。

「……ナナリ、良い機会ってどういうこと？」

「あらっ、嬉しいわね」

本当に嬉しそうに微笑むナナリを見ると何とも微妙な心境になる。

「ふふふつ。この国の人間が最初カノンを酷く扱ったでしょ？それが今はだいぶよくなったそれはどうして？」

「……わたしが天子であるという証拠を見せたからでしょ？王宮を闇に襲撃させて……まさかとは思っけど、またするつもり？」

パーティー中に闇を？確かに信じ込ませるためには有効だが、逆に疑うものが出てくるだろう。公の場に闇が都合よくでてくるなんて誰かが故意にしたとは思えないのだから。

「カノンが考えてること分かるわよ。もちろん私だって分かっている。そんなリスクが高いことするわけがないわ。でもねカノン、パーティーに来るのは貴方が偽者だと疑った人間ばかりなの。かなり悪口を言われると思うわよ？」

「そうね……」

そのくらい予想は出来てる。それに耐えきる自信はもちろんあるし、言いかえす自信もある。

だがそれに言い返すだけで、彼らはわたしを天子だと信じるだろうか？

天子だと認めさせなければ、復讐なんて始められない。
信じられてこそ価値がある。信頼されればされるほど都合がいい。

「大丈夫。どこにだってね、良からぬことを考える人間はたあーくさんいるものよ」

ナナリの不適な笑みにわたしはそつと微笑を返した。

襲撃

文化の違いってなんて恐ろしいのだろう……

わたしはぐったりと馬車の椅子に倒れこみながら遠く空を眺めた。

「おいつ、大丈夫か？」

「大丈夫ですけど……まだコレ続くんですか？」

隣には心配そうな顔をしたレヴォラ。

別に今の状況はレヴォラのせいではないのだが、ついつい彼を睨んでしまう。体力だって限界だ。もう帰りたい。

「ああ、いやっ今日はこれで終わりだが……明日は髪留めと靴、それからドレスの最終確認をすることになっている」

言いくそうにそう言うレヴォラを横目にわたしは聞こえない程度にため息をついた。

天子のお披露目パーティーは1週間後。案外時間が空いてるなと思っただけで大間違いであった。

ドレスやらアクセサリーやは全部オーダーメイドで作るらしく、セハンが尋ねてきた日の次の日からわたしは馬車であちこちに連れまわされている状況だ。

なんだかんだでパーティーまであと2日に迫ってきている。

何と言つか心休まる暇がない。

「それじゃあ今日は帰れるんですね」

とにかく一刻も早く帰りたかった。

これではパーティーまで身体が持ちそうにない。

「ああ、もう直ぐ着くから帰ったらゆっくり休んでくれ」

「ありがとうございます……」

言いながら力なく椅子に寄りかかる。

こんな面倒な目にあっってしまうのも、全部この世界に来てしまったせいだと思えばやはり憎むべき相手は決まってくる。

本当にいいことの一つもない。

窓の外に見える美しく豪華な城をわたしは睨むように見た。
あんなお姫様が住むようなお城。

わたしには似合わない……

そう思いすべての世界を遮断しようと目を閉じた瞬間

「つきやつー！」

耳に響く大きな爆発音。

窓の外には、馬車の近くに何か光を帯びた物体が激突したように見えた。

わたしはびっくりしてただ目を見開く。
一体何事？

「花音殿っ！！」

わたしを庇うようにレヴォラが前に立ち、馬車の周りをその他の衛兵が囲んだ。

「レ……レヴォラさん今の……っ」

「魔術だ。気をつける闇かもしれないっ！」

緊張した様子でそう言いながらレヴォラは腰から剣を抜く。
わたしは彼から視線を外してもう一度窓の外に目を向けた。馬車の近くにある木が魔術によって焦げ、煙を出していた。

それを見ながら考える。

攻撃してきたのは……闇？

その可能性はきつと少ないだろう。

ナナリの話からすれば、今現在闇はわたしに全面的に協力してくれている……らしい。

もしも本当に魔術を使ったのが闇だったとしたらわたしに闇の声が聞こえてくるはずだ。

だが闇の声は聞こえてこない。

だとすれば
今魔術を使ってきたのは闇ではなく……この国の魔術師である確
立が高い。

そこまで考えたとき、2度目の爆発音と共に馬車の近くが攻撃さ
れた。

「クソっ……いったいどこからっ！」

舌打ちをしながらレヴォオラはそう呟き、わたしの手を引っ張って
馬車の外に出る。

腕を引っ張られながらわたしは何か引っかかるものを感じた。

だってわたしを殺そうとしてるなら、馬車の中央に攻撃すれば一
発だ。

なのにわざと外して馬車の近くを攻撃してくる。

もしかしたら相手はわたしを殺すつもりなんてないのかもしれ
ない。

「レヴォオラさん、逃げる必要……ないかもです」

そう言ってわたしがレヴォオラの腕を掴んで歩みを止めた。

「何？」

レヴォラが怪訝そうな顔をしながら振り返った瞬間、今度はわたしたちの真横に魔術の光が激突した。

風が起こりわたしの髪をものすごい勢いで靡かせる。

あと少しずれてたら直撃だ……。

さすがのわたしも息を呑み、冷や汗が垂れる。

失敗した。あそこで止まったのはあまりよくなかったかもしれない……

「っ！怪我はっ？」

「ごめんなさい。わたしは大丈夫です……それよりも」

わたしはレヴォラを安心させるように微笑んだ後、辺りを見回した。わたしの行動につれらるるようにレヴォラも辺りを見回す。他の衛兵も同じようにしていた。

しばらくすると魔術で起こされた風は止み、煙もなくなった。辺りは最初と同じようにまるで何もなかったかのように静かな状態に戻っている。

唯一焦げた木と破損した馬車がさっきまでの状況を物語っていた。

レヴォラや衛兵が持つ剣がカチャリとなり、警戒した空気が漂うが攻撃してきた人間の姿は一向に見つからない。

もう逃げてしまったのだろうか？

そう思って、肩の力を抜こうとしたとき……

「天子様!!!!後ろですっ!!!!!!」

衛兵の叫ぶような声にいち早く反応したのはレヴオラ。

すばやくわたしの手を引くと、後ろに迫ってきていた攻撃を何とかかわす。

だが、相手側のほうが一枚上手であった。

レヴオラが攻撃をかわすことなど分かっていたかのような動きで次の攻撃を仕掛けてきたかと思うと、その拍子にわたしとレヴオラの手が離れてしまう。

「痛っ……」

「花音殿!」

「天子様っ」

そのままの勢いで地面に投げ出されたわたしは痛む身体を起こし、周りの人間に大丈夫だと言おうとして、息を呑んだ。

首筋にあたる冷たい何か……

ヒンヤリと硬い感触に体中に悪寒が走り、体中の細胞が凍りつくような感覚。

「天子様の命、もらった」

耳元でまだ声変わりもしていない少年のような声が響いた。

小さな魔術師

世界が凍りついたように見えた。

この世界に来て何度目かの死の恐怖を感じる中、わたしは一つ不自然なものを見つける。

視界に写るレヴオラの顔。

その顔はこの場に似つかわしくない、呆れたような……でもどこか安堵したような顔であった。

「テル」

レヴオラはその顔のままそう呟くと、ふうと大きくため息をつき、構えていた剣をおろす。

そんなレヴオラをみて周りの衛兵もこちらをマジマジと見たかと思うと、どこか拍子抜けしたような顔をしてダラリと腕を下げた。

「テルタツテ様……」

この場にいる中で今の状況を理解できていないのはどうやらわたしだけのようだ。

その時フツと、自分の首にあてられていた冷たい感触が離れていく。

つられるようにして振り返れば、そこにわたしよりも少しだけ小さい少年がニコニコと微笑みながら立っていた。

灰色のローブをすっぽりと被っていてその髪色は見えないが、こちらを興味深げに見つめる赤と紫のオッドアイが印象的だった。それに一瞬見ただけで分かるほどの美少年だ。

あまりに無邪気なその姿に、一瞬何かの間違いかと思ったがその手には先ほどまでわたしの首にあてられていたのであるうナイフがしっかりと握られている。

つと言つことは、さっきまでわたしたちを攻撃してきたのはこの少年ということでもまず間違いないだろう。

「花音殿……お怪我はありませんか？」

呆然としながら少年を見つめていたわたしにレヴオラが呆れた声が聞こえてきた。

「怪我はないですけど……えっと……この子は？」

先ほどの感じからするとこの少年とレヴオラは知り合いであるようだ。周りの衛兵もみな知っているようだし……

「ああ……この子は」

「はじめまして、天子様。僕はテルタツテ。よろしくね」

レヴオラは紹介するよりも先に少年がにこやかにそうやってきた。あまりに無邪気なその笑みを見ると頭が混乱してくる。
なんなんだこの子。

「お前天子を攻撃なんてしてどうなるか分かってるのかっ」

「別に当ててないから大丈夫でしょ？当てるつもりもなかったし」

「テルっ！」

少タイラついた様子のレヴォラにわたしはびっくりとするが、そんなレヴォラを軽くあしらう少年……テルタツテといっただろうか？彼にもびっくりする。

そんなことを思っていると、テルタツテの視線がこちらを向いた。びっくりしながらもその瞳を見返すと彼はニンマリと笑みを見せる。

「天子様って本当に魔術が使えないんだね。僕、てっきり天子様が嘘ついてるのかと思ったよ」

わたしが嘘を……？

だから、攻撃なんてしてきたのであろうか？
命の危険が迫ればわたしがボロをだして魔術を使うと思って？

「でも天子様から魔術の気配なんて全然しなかったし、異世界には魔術がないって本当なんだね」

「テルっ。お前失礼だろっ」

「ええー。僕は純粹に不思議だなあって思っただけなのに……。だってさ！魔術を使わずに闇を倒したり、従わせたり出来るんですよ？どういう原理なのかレヴォラだって気にならない？」

そう言うテルタツテの言葉にレヴォラは返す言葉もないように黙り込んでしまった。

わたしの力の原理……たしかに疑問に思っただけだろう。

真実なんて、あまりにも単純すぎて説明するのすら難しいけどね。

「とにかくお前、壊した馬車を何とかしろ。花音殿は疲れているんだ」

「ああ……そうだよな。ごめんね天子様。つい夢中になっちゃって」

悪気はないんだつと言うような顔でそういうテルタツテ。そしてそのままニコリと微笑むと、シュツと腕を軽く振った。

すると、地面に散らばっていた馬車の破片と思われるものがふわりと宙に浮き、カタカタと揺れ動く。その光景をテルタツテは無表情に見つめると、パチンツと指をならした。

瞬間、破片は光を纏いながら壊れた部分に集まっていく。その数秒後には馬車元通りになっていた。

「すごい……」

今まで爆発するような攻撃的な魔術しか見てこなかったの、こんな魔術もあるんだと思わず関心してしまった。

「はいっ元通り。これでいいでしょ？」

そんなすごい魔術を使った当の本人は何てことない顔をしている。

それにしても、こんなすごい魔術をこのくらいの年の少年が簡単に扱えるものなのだろうか？さっきの攻撃的な魔術も大人の魔術師

が使っている魔術の威力と大差ない……いやっそれ以上のものに見えた。

この少年は一体……

「花音殿、詳しい話は馬車の中で。屋敷に向かいながらにしよう」
そうやって気を使ってくれるのはさすがレヴォラという感じだ。

「それって僕もってこと？」

「当たり前だ」

そう言って、レヴォラはテルタツテを馬車に引き込んだ。

「さて、聞きたいことがあれば何でも聞いてくれて構わない」

馬車が動き始めるとレヴォラはそう言って、こちらに視線を向けた。

何でも……ね。

なら遠慮なく……。

「どうして、わたしを攻撃してきたの？」

「……えっ？」

テルタツテに視線を向けながら言えば、彼はわたしの質問に驚い

たように目を見開いた。

「さっき言っただでしょ？天子様が実は魔術使えるんじゃないかなあーっと思って、それを試しに……」

「それだけ？」

それだけだとはどうしても思えない。

問い詰めるように言えば、テルタツテはパチパチと瞬きを繰り返したかと思うと、次の瞬間可笑しそうに笑い出した。

「ハハハッ、噂は本当だね。クククッ……うん、天子様にだったら仕えてもいいかな」

「……仕える？」

何を言って……

わたしが首をかしげた瞬間、テルタツテの赤と紫の瞳がわたしと射抜くように見つめた。

思わずゴクリとつばを飲み込む。

「改めまして、天子花音様。僕はテルタツテ・ケサイム。今回天子様の護衛として任命されました。どうぞよろしくお願い致します」

“実はねその魔術師ってのは、五大魔術師から選ばれたそうだよ”

そんな言葉がわたしの頭を駆け巡る。

美しいオッドアイの瞳をわたしは呆然としながら見た。

じゃあこの子が……わたしをこの世界に連れてきた、五大魔術師の一人……？

憎しみの心

ああ、どうしよう……

わたしはいつからこんなことを考えるようになってしまったのだろうか？

目の前にいるのはまだ子供。
それなのに……、それ……なのに

コロシテシマイタイ

「天子様？」
「花音殿？」

だってそうでしょう？
この子さえいえなければわたしはこんな世界に来ることはなかった。
た。

わかってる、この子だけのせいではない。
王子だって他の五大魔術師だってそう、国民だって憎い。

だけど初めて出会った五大魔術師という存在に心の奥にしまっていたはずの憎しみが湧き上がってくる。

駄目だ、駄目だ、駄目……

落ちつかないや、こんなところで何ができる？

殺したいと思ったって実際に殺す手段なんて……

（殺したいの？）

「っ！」

どうしてこんなときに彼らの声がするのだろう？

そういえば、前にナナリが闇はいつでもどこにでもいると言っていた気がする……

見えなくなつて、気がなくなつたって、闇はいつも傍にいる

（ねえ殺したいんでしょう？）

——そうね

（ほら、殺しちゃいなよ！）

（首を切る？頭を潰す？それとも心臓を抉り出す？）

（ねえどれがいいの？どれがいいの？）

（ねえ憎いんでしょう？）

——憎いよ……でも

（大丈夫、今なら出来るよ）

（五大魔術師だからって子供だよ？僕たちが負けるはずがない）

（ほらっ、元凶の一人に復讐しよう！）

（力がほしいのならあげるわ。そのためのわたしたちでしょう？）

……

（どうしてためらうの？）

（だって貴方は……）

（ねえほら、言ってごらんよ）

（コロシテッテ……）

「黙れ」

小さく呟いた言葉は、きっとレヴォラやテルタツテには聞こえなかったと思う。

だけど、その声はちゃんと闇たちには届いていたらしく、ピタリと頭に響いていた言葉が止まった。

顔を上げれば、先ほどからしゃべらないわたしを二人が不思議そうに見ている。

わたしはそんな二人に視線を合わせるとニコリと微笑んだ。

「ごめんなさい、考え事してて……はじめまして、わたしの名前は長沢花音。これからよろしくねテルタツテくん」

そういえば、二人はさして気にしていないと言うような顔をして

くれた。

「ん〜テルタツテくんなんてかたぐるしいのいいよ。テルタツテでもテルでも好きなほうで呼んで」

「じゃあ、テルタツテで。わたしも天子様じゃなくて花音でいいよ?」

「本当?、じゃあ僕も花音って呼ぶね」

そついうとテルタツテは嬉しそうに瞳を細める。

「テルっ。天子様を呼び捨てにするのは」

「いいんですよレヴォラさん。わたしもその方が嬉しいですし」
「ほらっ、花音もこう言ってるからいいじゃん」

レヴォラは少し不服そうな顔をしていたが、仕方がないと言うように花音殿がそれでいいならつと言った。

「僕が花音の専属護衛に正式になるのはパーティーの日からなんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「そう、だからその日からよろしくね。それまでは僕も今までの仕事の後片付けで忙しいんだあ」

今までの仕事とは、五大魔術師としての仕事なのだろう。
その中にわたしと……天子と関連した仕事はどのくらいあるのだろうか?

「花音殿、もう着きますよ」
「ええ」

屋敷について、レヴォラの手を借りながら降りると外はすっかり暗くなっていた。

もう闇の時間だな……と無意識のうちに考える。

「それじゃあ、僕はそろそろ王宮に戻るね。まだ話してないことたくさんあるけど……またすぐに会ったからいいよね」

一番最後に馬車を降りたテルタツテはそういつと、ニコリと笑った。

「それじゃあね花音」

そんな声が聞こえるのと同時にテルタツテの姿はフツと消えてしまっ

「……あれも魔術ですか？」
「ああ、移動の魔術だ」

本当に、便利そうだな魔術って。
憎たらしいくらい……

「疲れたので部屋にもどりますね」

「分かった。明日も早いゆつくり休め」

レヴォラは別に気にした様子もなくわたしを部屋まで送ってくれた。

部屋の扉を閉めた瞬間わたしは小さくため息をついたあと、窓際に向かう。

窓を明ければ夜の少し冷たい風が頬にあたって気持ちよかった……

「そういえば……テルタツテに聞きそびれちゃったな」

わたしを攻撃した理由。

他のことに気をとられて聞きそびれてしまった。

まあ別に聞く機会はこれからいくらでもあるだろう。あの子はわたしの専属護衛になるのだから……

その時シュルリと黒い霧がわたしの首元にまとわりつく。
もうこの感覚にも慣れてしまった。

「ナナリ……」

霧は一瞬で人の形を形成していく。
そしてそこには見慣れた黒き人魚。

「ふふふっ……ねえカノン、教えて頂戴」
「……何を？」

彼女の髪から落ちる水滴が冷たいと思った。

「どうして感情にまかせてあの場であの子を殺してしまはなかったの？」

ナナリは不思議そうな顔をして聞いてくる。
本当に分からないといった顔だ。

どうして……ね
ずいぶんと面白いことを聞く。

答えは簡単だ。

「まだはやいでしょ？」
「はやい……？」

わたしは自分と同じ、その黒い瞳を見つめて微笑んだ。

「わたしの復讐はまだ始まったばかり……」

そう……まだ始まったばかりなのだ。

「終わらせるその瞬間。その瞬間にたっぷりと後悔して、苦しん

でもらわなきゃ意味がないじゃない」

そのためには……

「ほらっ、まだはやいでしょっ？」

憎しみの心（後書き）

【世界を壊す救世主 番外編】の方にクリスマス特別編をUPします。

本編無視のなんでもありなグダグダ小説ですが、それでもよければどうぞ

お披露目パーティー

時間というものはすぐ過ぎる。

「天子様、大変打美しいです」

「白い衣装が本当に良くお似合いで」

周りにいる侍女たちは口々にわたしを褒め称える。

そんなこと本当に思っているのだから……

言っておくが、わたしの容姿は決して美しいと言われるものではない。醜くはないと思うが、10人に1人はいるような大変平凡な容姿である。

見る人によっては愛らしく、見る人によっては言葉を濁す、そんな容姿だ。

「ありがとうございます」

褒め称える人に口先だけの礼を述べるとわたしは立ち上がった。

本日は、天子様のお披露目パーティー当日だ。

「花音殿、本日の衣装大変良くお似合いでございます」

わたしの前に膝をついたレヴォラはそう言ってわたしの手に口付けた。その行動にもびっくりだがいつもと違って敬語なことにも驚く。

ついでに言えば、わたしの衣装に合わせたのか元からそういう衣装なのかは知らないが今日は白の軍服を着ていて、いつもと違う雰囲気、レヴォラにもびっくりする。

いつものレヴォラと言えば身分は高くせに着ているのは下級の軍人と同じボロいマントと軍服だ。

「天子花音様」

すると続いてやってきたのこれまた白の衣装を身にまとったテルタツテ。

テルタツテはわたしの前まで来ると膝をつき、レヴォラと同じくわたしの手に口付けた。

「本日より花音様の専属護衛となりました、五大魔術師2階級のテルタツテ・ケサイムと申します。花音様付きとなれて大変光栄に思います」

そこまで聞いて、わたしはやつと昨日聞いたパーティーの決まりやら作法やらを思い出した。

こちらでは正式な場で上の立場の人間にこのような振る舞いは欠かせないらしい。

「顔を上げてください」

わたしは今だに自分の前に膝をつく二人に声をかけた。顔を上げた二人と視線があいにつこりと微笑む。

「本日はよろしくお願いいたします」

今日は、それなりに大事な日になるだろう。

アデウール国の人間だけではない、この世界の国々にいるたくさんのお偉いさんが来ている。

そしてその人たちも決してわたしがこの世界に来てしまった原因と無関係ではないのだ。

昨日さりげなくレヴォラに聞いてみたが天子の存在を求めているのは何もこのアデウール国だけではない。闇の被害にあっているのはこの世界すべてだ。

そしてこの世界でも一の大国となるアデウール国が天子召還に抜擢されたというだけであって、天子を召還しろと言ったのはこの世界すべてであるといっても過言ではない。

中でも貴族や王族は天子召還に惜しみなく力を貸し、それを催促したとか……

このパーティーにはわたしが憎むべきすべての対象が集まってい

る。

そう思っただけで、どす黒い感情がわたしの中をつこめいた。

「天子様、それではお時間になりましたら殿下がこちらにお見えになります。それまでおくつろぎくださいませ」

「ええ、着替えを手伝ってくださいあってありがとうございます」

侍女たちは深々と頭を下げて部屋を出て行った。

残ったのはわたしと護衛のレヴォラ、テルタツテだけである。

「あの……二人とも楽しんできて構いませんよ。それに敬語も……」

「そういうわけにはいきません。花音殿が正式に天子としてお披露目されたら俺のような存在がタメ口というわけにはいきませんか」

「ふうーん。まあ僕は花音がいいって言うならいつも通りにするけど。敬語面倒だし」

ここで二人の性格の違いが分かるというものだ。

「別に気にしないんですけどね」

「俺が気にします」

レヴォラがこれからずっと敬語だと思つと少し寂しかったが、これも仕方がないこと……と思っしかないのだろう。

「花音、今日は気をつけてね。他国の人間の中にはまだ花音が偽者だっと思ってている奴が五万といるからね。もちろん僕たちが守るけど……無茶な行動はしないように」

「分かってるよ。テルタツテは心配性だね」

わたしはまるでわたしを年下のように扱うテルタツテに笑みをこぼした。

「それから花音殿。本日国王陛下のご欠席が先ほどきまりました」
「国王……陛下？」

そんな存在がいたのか……というのが素直な感想である。
だってほとんどのことはあの王子がやっていたのだから当たり前であろう。

「国王陛下は引きこもり気味だからね。アゼリ王子が変わりに政務をやってるんだよ」

「テルっ」

「本当のことでしょう？」

引きこもり気味の国王陛下とは……なんとも情けない。

「陛下は長年の闇の問題に深く傷ついてしまったのです。しかし今回花音殿が召還されたと聞き大変喜んでおりました」

「そうですか……」

なるほどね……国王陛下も天子信者というわけか。

自分で解決出来ないからって引ッ込んで、助かる手立てが出来た瞬間それにすぎる。なんとも醜い大人だ。

ある意味あの王子以上に身勝手に傲慢。自分が一番可愛いタイプだろう。

まあわたしも自分のことが何だかんだで一番可愛いから、何ともいえないが……

「でも今日は欠席なんでしょう？」

「陛下にも心の準備というものが必要なのです」

何とも情けない。

そう思った時、部屋をノックする音が聞こえた。

「はい……」

「王子殿下がお見えになりました」

返事をするに扉の向こうから侍女の声が聞こえてくる。
来たか……

「分かりました。すぐに参ります」

わたしは小さく笑みを浮かべたあと、後ろに控えている二人を振り返った。

「行きましょうか」

青い月が世界を照らす。
闇の時間の始まりだ……

天子らしく

「案外普通だな」

そう言われてわたしは自分の隣に立つ憎たらしい男に視線を向けた。

銀色の髪が少し薄暗いこの部屋で微かに光沢を放っている。目を見張るほどに美しく整ったその顔はいつ見ても見惚れそうになる。

もちろん、何も知らなければの話だが……

王子は金の刺繍が施された黒の衣装を身にまとっていた。

わたしの衣装と対になっているのだろうか？わたしの白の衣装に施された金の刺繍とよく似ている。

「普通……とは？」

「態度の話だ。もつと慌てふためくと思っていたが……こういう場には慣れているのか？」

「いいえ、初めてですよ」

面白そうに口元に笑みを浮かべて聞いてくる王子にわたしは小さく笑みを浮かべて答えた。

「ならよほど度胸があると見える」

「……それは、褒め言葉として受け取っても？」

そういえば王子はクツクツと喉で笑った。

その様子にわたしは顔をしかめる。

「もちろん。お前がそうであつたほうがこちらも助かる」

「……………助かる？」

「ああ、こんなことでオドオドされて泣き喚かれても困る……………と
いうことだ。天子らしくないし、宥めるのにもこちらが力を浪費す
る。そう考えれば、お前は本当に天子らしい天子だな」

天子らしい天子……………ね

そう言われることは良いことだ。

だつてわたしは天子になりきる必要があるのだから……………

これは喜ぶべき状況のはず。わたしの天子のふりは上手くいって
いると

それなのに

天子らしいと言われても苛立ちすら感じる。

わたしに天子という言葉はやはり似合わない……………

でも、それでも……………

「殿下、そろそろご入場でございます」

後ろに使えていた王子の近衛が膝をついてそういった。

「分かった」

王子は答えると、こちらに視線を向ける。

「それでは参ろうか天子」

そう言つて差し出された手。

本当なら思い切りつき返してやりたいが……

「ええ、ありがとうございます」

わたしはふんわりと自分なりに精一杯の可愛らしい笑みを浮かべてその手をとった。

眩しすぎる……

会場に一步足を踏み入れて思ったのはソレだった。

さっきまでいた部屋が薄暗かったのも理由の一つだろうが……それでもわたしのこの部屋の煌びやかさは不快だった。

眩しさのあまりに少々目を細める。

握り締めた手には汗をかいていた。

どんなに強がっても、緊張はするし、怖い。

会場中の視線がわたしに……天子に降り注ぐ。

視線が痛い、怖い。

チラリと目を向けた王子は、その場になれているのだろう。堂々とした態度で優雅な笑みを浮かべていた。やはり、こういうところは敵わない。

わたしの視線に気がついたのか、王子の視線が会場からわたしに向けられた。わたしの様子を見るとニヤリと口元を歪める。

「なんだ？緊張しているのか？」

そっぴいわれた瞬間、カチリとわたしの中で何かが変わるのを感じた。

緊張？しているわけがない……というかしている暇なんてわたしにはない。

そうでしょう？

だって……ここにいるのは敵だらけ
気を抜けば、どうなるか分からない……

わたしはグッともう一度強く手を握り締めた。

「いいえ……会場の眩しさに少しびっくりしただけです」

そう言うと視線を会場に戻した。

ここにいるのはわたしが憎むべき人たち。
わたしはこの人たちに復讐してやるんだ

わたしはふんわりと、自分に視線を向けてくる人たちに笑みを浮かべた。

「それでこそ」

隣で王子が面白そうに呟く。

そして王子も会場に視線をもどした。彼がスッと手を上げるとざ

わめいていた会場に静けさが訪れる。

ゴクリとつばを飲む音が妙に大きく聞こえた。

「紹介しよう……こちらにいるが我らが世界の救世主」

王子の瞳がスツと細くなる。

「天子花音だ」

王子の言葉と同時にわたしは昨日習ったばかりのお辞儀をした。
深々と、優雅に……天子らしく。

顔を上げたわたしはもう一度微笑みを浮かべる。

「皆様、お初にお目にかかります。花音と申します」

そう、わたしは天子。

どんなに虫唾がはしろうが天子を演じなくてはならない。

それがこの世界への一番の復讐となるのだから……

ならば、

精一杯天子になりきってやろうではないか

会場中にひととき大きなざわめきが訪れる。

誰もが天子の顔をよく見ようと必死になっていた。

ある者は思案する

ある者は嫉妬する

ある者は懸念する

天子という存在にそれぞれがいろいろなことを考えている。
その様子がこの場所からはよく分かる。

わたしも深く深く、もう一度微笑んだ。

贈り物

「お初にお目にかかる私は隣国シエルリアのシルク・アゼンドと申します」

同じような言葉を一体何度聞いたことだろう。

顔に笑みを貼り付けながらもかなりの疲労がわたしを襲ってきていた。

パーティーが始まってからというもの、国のお偉いさんが次から次へと挨拶してくる。

「はじめまして、お会いできて光栄ですアゼンド様。花音と申します」

その言葉にいちいち同じような言葉を返すのにも飽きてきた。

なんとか全員分覚えようと必死にはなるが、これだけの人数。わたしにだって無理というものはある。

豪華な食事も、飲み物も一つだって手を付けられない。

「花音殿、お休みされなくて大丈夫ですか？」

さすがのレヴォオラもわたしの体調を心配して何度か声をかけてきたがわたしはそれをすべて断っていた。

敵を知るに一番大切なこと……

それは情報収集だろう

天子のお披露目会というだけあって、普段はあまり公の場に出てこないような人も出てきている聞いている。この機会を逃すのはあまりにも惜しい。

少々疲れはするが、このくらいまだ大丈夫だ。

「ええ、平気です」

わたしはレヴォオラにそう告げると次の方を笑顔で迎えた。

「はじめまして、私コバル・サリユールと申します」

この会場に来ている人間のほとんどがわたしが天子であるということに半信半疑である。

だいたいのは目見れば分かる。

しかしこの男は……

「はじめまして。お会いできて光栄ですサリユール様。花音と申します」

言いながらもわたしはどこか緊張していた。

この人は、わたしのことを信じてなんていない。
ニヤリと浮かべている笑みが妙に露骨で、嫌だ。

「失礼ですがサリユール様」

そんな時後ろから声がした。

振り返ればレヴォオラが少し険しい目つきで目の前のサリユールを見ている。

「護衛が何の用だ？わたしは天子殿とお話しているのだ。貴重な時間を」

「ではそちらの大きな荷物の正体を言ってくださいと嬉しいのですが」

そう言ってレヴォオラは視線を彼の後ろに移した。つられるようにわたしも視線をそちらに移す。

彼の後ろには従者であろう人物が5人ほどいて、何か大きなものを守るように囲っていた。

わたしもそれを見て眉をひそめる。

「ああ、コレか？これは天子殿へのプレゼントだ」

「……天子様への贈り物はすべて受付にて回収したはずですが？」

話を聞きながらそんなことがあったのかとわたしはびっくりする。だから、この場でわたしに何かを渡してくる人がいなかったと言うことが……

「そんなこと言つて、天子殿には渡さぬつもりであろう？そなたら国の考えは分かっている」

「そんなことはありません。こちらで回収いたしますのでソレを

……」

レヴォラはそういうと、控えていた何人かの衛兵にそれを持ってこさせようとしたが

「触るでない！！！！」

サリユールのあまりにも大きな叫びに会場が静まり返った。視線がすべてこちらに集まる。

衛兵もびっくりして動きを止めてしまった。

「何事だ」

あまり良からぬ状況を判断してか王子もマントを翻してこちらに向かつてきた。

遠目からでよく分からないがフェジーやセハンの姿もつかがえる。

「ククッ丁度いい……」

そんな周りをみて、サリユールはニヤリと嫌な笑みを浮かべた。
悪寒が走り、嫌な予感がわたしの中を埋め尽くしている。

「あちらの方が天子へのプレゼントとしてあちらのを……。渡せといっても渡してくださいださらぬのです」

「そうか」

レヴォラの報告を受けた王子はクルリとこちらを向くと、サリユールに視線を向けた。

「サリユール殿。そちらは天子へのプレゼントなんだろう？」

「そうですか？」

「ならせめてその中身だけでも教えてもらおう。こちらとて大切

な天子に何かあつては困るから贈り物は回収し、点検をしてあと渡そうと考えていたのだ」

「ほお、そうでしたか」

「……ああ本来なら今すぐにも渡していただけるとありがたいのだが」

そついうと王子は目を細めた。

「いいえ、このプレゼントは回収されては困るのです」

「なぜだ？」

「それは……このプレゼントはここで渡すからこそ意味があるからですよ……」

嫌な笑みを浮かべるサリユールに周りの衛兵がその剣に手をかけた。

会場中がヒンヤリとした空気に見舞われる。

「それは一体何のだ？」

王子が言つとサリユールはそのプレゼントと呼ばれるものに近づき、周りの従者を下がらせた。

それはそれは楽しそうな笑みを浮かべると、彼はわたしに視線を向ける。

「これはですね……」

サリユールの手がプレゼントにかかる。

「お前が天子ではないと証明するためのものだよっ！花音殿！！
！……」

あらわになった、プレゼントにわたしは見開いた。

「きゃっ、きゃあああああああああああ」

「闇だっ！」

「なぜこんあところに闇がっ」

異常ないほどのざわめきに包まれた会場。

わたしはただただそれを見つめていた……

黒い毛を身にまとった獣。

それは間違いなく闇……

でも何かがおかしい。

だって……わたしはこんなところに闇がいるなんて話は聞いていない。

ナナリは今回何も仕掛けないと言っていた。

だとすればこの闇は……

“どこにだってね、良からぬことを考える人間はたあーくさんいるものよ”

ナナリ言った言葉が頭を掠めた。

贈り物（後書き）

あけましておめでとつございます。

本年もどうぞ結木とその小説たちをよろしく願います。

抗う

闇の登場に会場が震える中、それをつれてきた当の本人は涼しい顔をしていた。

「皆さんご安心ください。この闇はみなさんを襲いはしません」

気味の悪い笑みを浮かべたサリユールに寒気がする。

王子は怪訝そうな顔をしたまま口を開いた。

「どういうことだサリユール」

「この闇は私に忠誠を誓っております。私の命をちゃんと聞くのでご安心を」

忠誠を誓っている闇。

そんなのがあるなんて聞いてことはないが……実際にそうだとしたら……

この男は一体何をするつもりでいるのだろうか？

「それで、お前はこのパーティーに闇などを持ち込み、何をするつもりだ」

王子も同じことを思ったのかわたしの疑問をサリユールにぶつけた。

こんなときばかり気があっても……

「ツクク、簡単なことですよ。アゼリ王子」

サリユールはそう言つと会場を見渡した。

「ここにいる花音殿が本当に天子であるのか？この会場にいる皆様は同じことを思っているはずだ」

演説でもするような口ぶりでサリユールは言う。

チラリと闇の方に視線を向けるが、闇の声は聞こえない。

もしかしたら、この闇があの人に忠誠を誓っているのは本当かもしれない。

グツとした唇をかみ締める。

よくない予感ばかりがわたしの中に増えていった。

「だがその不安を私が解消しましょう！」

両手を広げながら、そう言った彼はわたしに視線を戻した。無意識に体中に力が入る。

「花音殿、貴方が本当に天子だというのなら……その力を今ここで見せていただきたい」

会場がざわつく。

どういう……こと。

「花音殿は闇を操る言霊をお持ちだとか……。その力でこの闇を消し去って下さい」

ニヤリと笑みを浮かべるサリユールをばれない様に睨みつけた。

闇を消す……

それはわたしが今までやってきたことだ。

でもそれは……闇がわたしの共犯者であり、言うことを聞いてくれていたから出来たこと。

ここにいる闇は……あの男の支配下にある。

だとすれば……わたしの嘘っぱちの力は使えない……

「今までの事件でも、暴れる闇をたった一言で消し去ったとか……その力をぜひこの場で……」

わたしには、この闇を消し去ることなど出来ない……
チラリと王子に視線を向ければ、険しい顔を返された。

「天子」

「……………はい」

「お前だって、自分が天子と信じられてないことぐらい知っているだろう？」

「……………ええ」

知っている。

確かにこの状況で闇を消し去ることが出来れば、良い機会だろう

……

「見せてやればいいだろう。天子の力とやらを……………」

やはり王子は気にわない……

あの目はわたしを試している。王子だってまだわたしを本当に信じてはいないようだ。

「……………」

何も言えない……。

出来ることならやっている。

こんなところで……こんないあっさりとしたしの復讐は終わってしまうのだろうか？

「なんだ？出来ないのか！やはりっ」

動かないわたしをみてサリユールは高々しく笑い声を上げた。

「やはり今までの力は嘘だったのだな！闇を操って天子のフリをしていたのだろっ！……」

会場に響き渡る声……

嘘がばれてしまう。

わたしはギュッと目を瞑り、降参しようかと思った……

だが人間と言うのは追い詰められたときほど頭が働くものだ。

今、この男が言った言葉……

闇を操ると……そうだった。

そんなこと出来るのか？

そんなこと簡単出来るならとくに戦争は解決しているはずだろ
う。

でもこの男は今それが出来ると言っように言った。

もう一度闇に視線を向ける。この男はこの闇が自分に忠誠を誓っ
ていると言っていたが……どうやったら闇が人間に自ら忠誠を誓う
だろうか？

だとすれば……この闇は操られている……？

コレは賭けだ……

わたしはギュッと手を握り締める。

このまま黙っていてもわたしの嘘はバレてしまう。

だとしたら……

「失礼な方ですね……」

わたしはニコリと笑みを浮かべながら、可笑しそうに口元に手を
あてた。

「何が可笑的い……？」

男は怪訝そうな顔をする。

わたしはその男をみて一層笑みを深めた。

「余り馬鹿なこととはしない方が身のためだと思いますよ?」

「悪あがきをつ。そんなこと言って本当は出来ないのだろうっ」

「わたしは貴方様のことを思っているというのに……」

大げさに方をすくめた後、わたしはソツと優しくサリユール微笑みかけた。

「もちろんその闇を消し去ることなど、わたしの力を使えば造作もないことです」

ぐるりと会場を見渡せばその視線の全てがわたしに向かっていた。だがしかし、それを怖いとはもう思わない。

「だけど、そんなことをすれば……」

どうせバレてしまうのであるのなら、最後まで抗ってやろうではないか。

「困るのは貴方ではないのですか？サリユール様」

余裕の表情を崩したサリユールを見て、やはりまだ諦めるのは早すぎるとわたしは確信した。

簡単な

わたしの言葉にサリユールの顔色が少しだけ変わる。

「なっ何を言っているのだ。あまり悪あがきをすると後が辛いぞっ」

先ほどよりも高くなった声。
わたしの口元が微かに歪む。

「悪あがきなんて……わたしはただ事実を言っているだけですよ」

わたしはニコリと微笑むと、一歩足を動かした。
あくまで自然に、闇へと一歩一歩近づいていく。

闇が本当に操られているとするのなら、仕掛けはあの檻かそれとも闇そのものか。

とにかく近づいて見なければ何も分からない。

強張りそうになる顔に何とか笑みを貼り付け続けてわたしは不自然意ならないように細心の注意を払った。

「事実などっ」

「いいえ、貴方様はわたしたちに隠していることがある。そうで

しょう?。」

そうい言つと同時に闇の入る檻に触れる。

瞬間、バチツという音とともにわたしの手が弾かれた。

「花音殿っ!」

「天子!」

「天子様っ」

びつくりして自分の手を見つめてみるが怪我はないようだ。

檻に触れたのは何か仕掛けがあるのではと思つてのことだったが

……なるほど、わたしの予想はみごとに当たったわけだ。

「花音殿!怪我は?」

「平気です。……それよりも」

焦つて近寄つてきたレヴオラを軽くあしらうとわたしはサリユールを見る。

何やら檻を凝視して固まっているが、気にしてことではない。

「サリユール様?この檻には何か仕掛けでもあるのですか?」

「えっ…… なっない!そんなものはっ」

「そつでしようね。だつてこの闇はサリユール様に自ら忠誠を誓つた者。細工などしなくても暴れる心配はないでしょうし」

「そつそつだ」

サリユールに目には焦りが浮かんでいる。

あまりに事が上手に進んでいるので少々疑問に思ったものの、自分の身を守るためには今ここでこの闇のトリックを明かして天子である証明をするしかない。

小さいことを気にしてたら逆に突き落とされてしまう。

わたしが自分の手をギュツと握りしめた。

「では今のは一体何だったのでしょうか？ 檻に触れた瞬間……ね」
「そっそれは……」

言葉をなくして下を向くサリユールにそろそろ次の手を考えなければと心が焦る。

何か隠していることはわかってても何を隠しているかは分からない。
この闇が操られているとして、どうやって操っているのかもわからない。

せめて闇の声が聞こえればいいがそれも難しい。

だとすれば、どうやってこの状況から真実を見つけ出すか。

答えがでず、何かヒントはと会場を見回して、フツとあることに気がついた。

この闇が操られているとしたらそれは魔術を使つてのもの。

ということはこのサリユールは魔術師であることが予想できる。

目には目を、歯には歯を。

魔術師には魔術師を………

「テルタツテ」

「なーに？」

名を呼べば、スツと音もなくテルタツテが隣に現れる。
多少驚いたがそれを顔に出してなどいられない。

「サリユール様をお調べしてあげて？」

「りょーうかい」

「なっ何を言っているのだ！」

「サリユール様。先ほどの電撃のようなものの正体が分からぬ以上わたしは貴方様をお疑いしてしまう。それはこの会場にいる方々も同じでは？」

それらしくぐると会場を見回す。

まあ本当のことを言ってしまうえばそんなこと気にしている人間は少ないだろう。

この会場にいる人間が気にするのはわたしの正体なのだから。

「ぜひ貴方様の疑いを晴らすために。何の細工もないと分かればその闇が真に忠誠を誓っていることが分かります。その上でわたしの力をお見せすれば信憑性も高まると言うもの……」

「しかしっ」

「それじゃあ遠慮なく」

テルタツテは遠慮なしに檻に近づくと躊躇なしにその檻に触れる。バチツと音がしたがお構いなしだ。

しばらくテルタツテは檻に触れていたが、まるで何か分かったのかのようにニヤリと笑う。

「この檻……魔混石で出来てるね」

「魔混石っ！」

「なんだってそんなものに！」

テルタツテの言葉に会場が大きくざわつく。
マコンセキ……と聞こえたが。

「それは本当か？」

「本当。まあ、それを隠すためにかなりの魔力を使ってるみたいだけど……こんなの僕には無意味だね」

まあ、分からないことは多いがサリユールの闇操りには裏があることが証明されたと思っていいのだろうか？

だとすれば……

「テルタツテ！その檻壊せる？」

「んー、檻を壊すっていうか魔混石の力を取り除くことならね」

「それやって」

「いいけど、そしたらこの闇暴れちゃうと思うよ？」

わたしはその言葉にニヤリと笑った。

「わたしを誰だと思っているのテルタツテ」

闇にかかっている魔術だかなんだか知らないけど、それさえ解ければわたしが負けることなんてない。

「わたしは天子よ？」

わたしの言葉にテルタツテもニヤリと微笑むと、檻に向かって何をを呟く。

「それじゃあ後は頼んだよ。天子様」

その言葉と共に会場の空気が一変した。

一瞬恐ろしいほどに静まり返り、次の瞬間檻の中の闇はものすごい音を立ててその檻を破壊する。

「！天子避けろっ」

「花音殿っ！！」

闇は迷うことなくわたしに向かってくる。

まるでわたしのことを生涯の敵のような目で見ながら……

「思いっきり暴れて」

向かってきた闇をスレスレで交わしながらわたしは闇の耳元で小さく呟いた。

もつと、もつと

聞こえる……

人々の悲鳴、嘆き、恐怖、苦しみ、偽善。
今この場所はそれらに満ちている。

もつと、もつともつと苦しめばいいのに。

喉が枯れるほどに悲鳴をあげて、闇への恐怖に支配され、無力な
自分に嘆き、偽善者である自分を捨てて醜くなればいい。

そうでなくちゃわたしの心は癒されない。

この世界に来てわたしが感じてきた思いが、お前たちに分かって
言うの？

苦しめ。

そして後悔すれば良い。

偽者の天子を召還したこの国を。

偽者の天子を召還させるきっかけとなった自分を。

悪いのは、すべてお前たち自身なのだから……

「天子つ闇を止めてくれ!!」

その言葉にハッとした。

辺りを見渡せば闇が随分と暴れたのか会場がぐちゃぐちゃになっ

ている。

耳障りな甲高い叫び声や物が壊れる音。

そしてその原因は……黒い大きな獣……

「つ止めなさい！！」

咄嗟に叫んだ言葉に暴れ回っていた闇がピタリと動きを止めた。
それと同時に、耳障りな悲鳴や破壊音も止む。

わたしとしたことが自分の思考に囚われてしまったようだ。
なんとも情けない。

この世界を壊すにはまだ早い。
こんなところで復讐を終わらせてしまうわけにはいかない。

誰だか知らないが叫んでくれた人に感謝しよう。

軽く会場を見回したが、死人はいないようである。多少怪我人が
いるものの……そのくらいですんでよかったと思ってほしい。

さて、ここからどうするべきか……

わたしはグチャグチャになった会場で恐怖に怯え、助けを懇願す
るような瞳でわたしを見る人々になるべく優しい瞳を向けた。

「ご安心を。これ以上この闇は危害を加えたりしません」

そう言った後、わたしは闇の方に足を動かした。

闇から3mほどはなれて地点でわたしは足を止めるともう一度会場を見回してみる。

何人かは逃げ出していないようだが、これだけの人数がいれば十分であろう。

「よくご覧になってください」

そう言った後、わたしは闇の瞳を見つめた。
見つめ返してくる闇の瞳はどこか優しく、落ち着く。

どうしてこの世界の人々は闇を恐れるのだろうか？
わたしに言わせれば、この世界にいる人間なんかよりも闇のほう
がずっと優しく、温かい。

「ここは貴方のいるべき場所ではないわ」

闇を見つめたままわたしスツと瞳を細めた。
天子らしくと心がけながら……

「消えなさい」

その言葉とともに闇は空気中に溶けるようにして消えていく。

その光景はどこか幻想的で……

（花音様）

闇の声が頭の中に響くと同時に、その姿は会場から消えてなくな
った。

その事を見届けるとわたしは会場に視線を戻す。

「わたしが偽者だと思いいになっている皆様」

そう言葉を発すると数人がビクリと肩を震わした。

「わたしを疑いたくなる気持ちも分かります。前回の天子様のこ
とは王子様より聞きました。けれど……」

わたしはふんわりと微笑んだ。

「この力を見てもまだ信じてはくださいますか？」

ちよこんと首を傾げながら発した言葉に、答える人間はいなかつ
た。

無言は肯定と受け取れと言うものだ。
これでわたしの嘘はまた一つ、成長した。

「王子様」

わたしは会場から視線を外すと、闇の消えた場所をただ見つめて
いる王子に声をかけた。

王子は驚いたそぶりもせず、わたしに視線をよこす。
なんだ？とでも言いたげだ。

「会場をこんなにしてしまって申し訳ありませんでした。わたし
の力不足です」

「……構わない。闇が現れたのに軽い怪我人のみですんだという
だけで十分だ」

そう言った王子の顔は少しだけ悔しそうだ。

そのことに暗い喜びがわたしの心を支配する。王子だってわたしの
ことを偽者だと思っていた。しかし1度ならず2度も目の前で闇
を消せば……王子はわたしを天子であると認めないわけにはいかな
い。

その傲慢さ、身勝手さ、プライド。
わたしはどれだけ崩せただろうか？

めちゃくちゃになった会場。

それはこの世界の未来を見ているようで心地よかった。

わたしを信じて。

そうすれば救ってあげる。助けてあげる。

だってわたしは天子だもの。

そして最後の最後に裏切ってあげる。

もっともつと苦しんで。

足りないの。全然足りない。

これ以上ないほどの絶望を、この世界に味わってもらいたい。
わたしが元の世界には帰れないと……そう知ったときの絶望より
も深く深い絶望を。

もつと、もつともつともつと……

小細工

あれだけ会場が滅茶苦茶になれば当たり前と言えはそうだが、天子のお披露目パーティーはあの後中止となり、会場に招待されていた客たちは急遽王宮の客室へと移された。

天子たるわたしも疲れがたまっているだろうということで話は明日となり、今は部屋に戻されている。

それが今から数時間ほど前の話。

「貴族や王族ってのはよほど暇人なのね」

わたしは目の前にあるソレを見て小さく呟いた。

なんでも闇から助けてくれたお礼らしいが、たかだか数時間でコレだけの量。

先ほどまで疑っていた人間が、本物だと分かれば我先にと天子へコンタクトをとろうとするその身勝手さは全国共通とも言つべきか……

その行動の早さにわたしはある意味感心してしまった。

それにしても……

「本当に……あんまりにもうまく行き過ぎて逆に怖かったわ……
ナナリ」

その名を呼べば黒い霧が辺り充満し、しばらくすると人の形を形成する。

真っ黒な髪と瞳をもった人魚……ナナリはフワリと宙に浮かびながらいつものように妖美な笑みを浮かべてわたしを見た。

「ふふふつ、何のことかしら？」

「惚けないで」

睨むように言えば、ナナリは大袈裟に肩を竦めて見せる。

「カノンったら、少し怒りっぽくなんたんじゃない？」

「……そうかもね」

すぐにイライラするようになったのは事実だ。

それもこれも全部この世界のせい……

本当に気に食わない。

「私は今回あの会場にいなかった。それはカノンも知っているでしょ？」

確かにあの会場にナナリはいなかったし、あのサリユールがつれてきた闇以外の闇もいなかった。
だけど……

「何か細工したでしょう？あの檻に」
「……………ふふふっ」

悪戯っ子のような目をするナナリにわたしは確信する。
あの危機的状況でよくまああそこまで上手く事が運んだものだ
と思っていたが……………やはり何か仕掛けがあったようだ。

「我らが同士……………あの闇がどうしてたかだか人間ごときに自由を奪われ、言いなりにされていたか分かるかしら？」
「……………魔混石、とかいうもので出来たあの檻のせいでしょう？」

テルタツテがその魔力を抜いたことで闇が開放されたのだ。

「そう、魔混石には私たち闇の自由を奪うことが出来る力がある。
それは何故か……………分かるかしら？」
「……………分からないわ」

そもそも魔混石の存在を知ったのが先ほどのことだ。
知るはずがないであろう。

「……ねえカノン。私たち闇はね、死ぬとどうなると思う？」
「知らないわ」

先ほどから質問ばかりでイライラする。
やっぱりかなり短気になったのかもしれない。

「私たち闇はね……死ぬと石になるのよ」

「……………えっ？」

「ふふっ、でも石になるだけでは死なない。その石を砕かれて、初めて私たちに死が訪れる。私たちを石にするのも大変だけどその石を砕くのは並大抵の魔力じゃ無理よ」

死んだら石になる…………。

そんなの初めて知った。

なんだか今日は初めて知ることが多い。

「そしてその砕かれた石こそが、わたしたちの自由を奪う魔混石…………」

「…………じゃあ、魔混石って闇自身ってこと？」

「そうよ、だからこそ闇を封じることができるの」

「じゃあソレを使えば闇はすぐに負けてしまうんじゃない？」

「さつきも言ったけど、石となった闇を砕くには相当の魔力がいるわ。だから魔混石は貴重なのよ」

なるほど、だったらサリユールが使ったような檻を大量に作って闇を従わせるのは難しい。

この世界に闇がどれほどいるか知らないが、人と同じほどいると前に聞いた気がする。

「それで、核心をまだ話してないでしょう？わたしが聞きたいのはあの檻にどんな仕掛けをしたか……ということよ」

「ねえカノン、どうしてあの檻に細工があったなんて思うのかしら？」

そんなの簡単だ。

「事が上手く進みすぎてた。それから、わたしが手に電撃？みたいのを感じた後サリユールが困惑気味にあの檻を見ていたわ。そんなことがあるはずない……とでも言いたげな顔でね」

あの時は自分の身を守るためそんなこと気にはせず、そのまま話を進めたが今思えば気になるところだ。

わたしがじいっとナナリを見つめて真実を促すとナナリはやっぱりいつものように微笑んだ。

「ふふっ、ご名答。さすがはカノンつとでも言いましょうか？たったそれだけのことで気がつくなんてね」

「……じゃあやっぱりあの電撃はナナリがやったの？」

「ええ、魔混石は触っても電撃が流れたりはいしないわ。アレはわたしが細工したの。魔混石は元は闇。すなわち仲間よ。人間ごとき

にばれないように細工をすることなんて簡単」

面白可笑しく笑うナナリを見ていると何とも言えない気持ちになる。

まあでも……

「ありがとうナナリ、助かった。もしあの電撃がなかったら……きっとサリユールを追い詰められなかったわ」

あの電撃のおかげで檻に仕掛けがあるのでは？という核心ができたからこそあそこまで強く振舞えたのだ。

やはりわたしはナナリや闇の手を借りなければ“天子”を演じきることはできない。

「大したことではないわ。カノンの正体がバレて困るのは私たちと同じ。わたしが好きでやったことなんだから気にしないでいいのよ」

「……でも、ありがとう」

あの時は必死だったから気がつかなかったが、バレていたら大変なことになっていただろう。良くも悪くもあの場には貴族王族と重要な人間ばかりがいたのだから……

「まあでも。これで天子への信頼度はまた上がった。その証拠がコレ……ふふふっ」

ナナリは積み上げるように置かれたお礼の品々に触れると妖美に笑った。

「すべては思うままに……そして次にするべきは……」

王宮襲撃によりこの国の王族や貴族、衛兵にわたしが天子だということを信じさせ、今回のパーティーで他国の人間にもわたしが天子であることを信じ込ませた。

まだ疑問に思っている人間も腐るほどにいるだろうが、それは追々と信じさせればいい話。

なら次にするべきは……

「国民の信頼……ね」

パーティーが終わったからといって落ち着くことなど出来はしない。

まだするべきことは山のようにあるのだから。

小細工（後書き）

少し説明的なものが多くなってしまいましたね

事情聴取と

「それで、そなたはどうしてあの男が魔混石を使って闇を操っていると分かったんだ？」

あの男……というのはもちろんサリユールのことだ。

パーティーの次の日。わたしはフェジールの部屋で事情聴取のようなことをされている。

「どうして……と言われましても、感としか言いようがありません」

自分の身を守るためのハツタリに理由も何も無いに決まっている。わたしの言葉にフェジールは微かに眉を寄せたが、すぐに無表情に戻った。

そして持っていた紙に何事か書く後ろに控えていた衛兵に渡し、衛兵はそれを手に部屋を出て行った。

「今回のそなたの行動は天子ゆえの感の鋭さ。すなわち天子としての力の一部……ということまでまとめておいた」

「……はあ」

そんな適当でいいのか？

そうついつい思ってしまう。わたしにとってはそれは好都合。詳しく調べられでもしたら嘘がバレる可能性が高くなる。

「そなた自身が分からないことを私たちが分かるはずがないだろう。それに、天子の力が具体的にどんなものかということはまだ解明されていない。直感も力の一つ、といったところで問題はないであらう」

「……そうですか」

まあ、詳しく聞かれて困るのはわたし。
あまり突っ込まないほうが良いだろう。

「それから、サリユールについてだが……」

「はい」

「魔混石の不正使用、および闇を使つての脅しなどで金や領地を手に入れていたという不正な行いが分かった。今ごろ牢獄にいますらう」

「……やっぱり闇を使つて……」

「ああ、もともとサリユールは力の弱い家系だったのだが、ここ最近妙に力をつけてきたから不思議に思つてはいた。だが闇を使つて脅していたとは……さすがの私も考えつかなかったがな」

ということとはわたしが、サリユールに「闇を消して困るのは貴方」と言つたのはあながち間違いではなかったようだ。闇を使つて力をつけていたサリユールから闇を取つてしまえば、ただのおちこぼれなのだから。

「それから……パーティーのお礼にと言つて各国からそなたへ招待状が届いている。受けるかどうかは殿下と相談しておくといひ」
「はい」

わたしがにっこりと微笑むと、フェジーはいくつかの資料を取り出した。

「これは……？」

「闇のリストだ」

その紙には、コレでもかというほど文字が書かれている。時折写真も載っていて、それは見るからに闇と分かるものだ。

「……これを、わたしにどうにかしろと？」

「ああ、これは殿下から預かってきたもののホンの一部。闇の被害は多い。その中から特に深刻なものを持ってきたつもりだ」

王子……ね。

わたしはその資料を手にとると軽く目を通すふりをする。

わたしはこの国の言葉はしゃべても読むことは出来ない。そのことをこの国の人間はまだ知らないであろう。

わたしがこの国の言葉をしゃべることが出来るという理由も“天子だから”という理由で片付けられた。

何故この国の言葉をわたしが無意識にしゃべれて、文字は読めないのか。その事実わたしにだって分からない。でもそこに大きな意味があるとしたら……

そのことを敵である人間にそう簡単教えることは出来ないであろう。

フェジーやレヴォラには言っても大丈夫なのでは？と思ったこともある。

だけど、二人は所詮この国に忠誠を誓った人間だ。わたしがどんなに信用しようが、国のためとなれば言ってしまうかもしれない……

誰一人、心からの信用を置くことができない。
そのことが少しだけ悲しくて、苦しいと思った。

「そろそろ天子としての仕事が増えてくる。そなたも体調を整えておくと良い」

「えっ、あ……分かりました」

反応が遅れたわたしをフェジーはさして気にすることなく立ちあがった。

「それでは、私はこれで失礼する」

「はい、フェジーさんも体調にお気をつけて」

ニコリと微笑めば、フェジーの口角が少しだけ上がるのが見えた。

「すごい量だね」

フェジーが去っていくと、先ほどまで後ろに控えていたテルタッ

テがニコニコと笑いながらフェジーが座っていたソファに腰をかけた。

レヴォラは昨日の後処理だとかでどこかに行っていて、今私の護衛はテルタツテ一人である。

テルタツテは、机の上に置かれた資料をみて目をクルクルとさせているようだ。

その資料にわたしも一瞬だけ視線を向ける。
だがすぐに視線をそらした。

「闇の被害つて……こんなにあるんだね」

そう言えば、テルタツテは資料からこちらに視線を移した。

「闇の事件で人が死ぬなんて日常茶飯事だよ。だからこそ、この世界は天子を望んでいる」

「……そっか」

その事実をいい気味だと思う反面、ホンの少しだけ心が痛んだ。

「だからさ、前の天子様が偽者だって分かったとき、皆の怒りはすごかったよ」

「……テルタツテは前の天子を知ってるの？」

「会ったことはないかなあ………でも」

テルタツテのオッドアイの瞳がスッと細くなった。

「とても優しくて大人しい人だって、そう言っていた人がいたよ」

どこかで聞いたことがある。

「それって……前の一番隊隊長とか言う人？」

レヴォラに天子の話聞いたとき、同じようなことを言われたのを思い出しわたしは尋ねた。

「知ってるの？」

「うん、レヴォラに聞いたの」

「ふう〜ん」

テルタツテは、ニヤリと微笑んだ。

「ねえ花音。面白いこと教えてあげようか？」

「……何？」

悪戯っ子のようなその瞳に少しだけ嫌な予感をする。

「第一番隊隊長……彼はね、前の天子様に恋をしていたんだよ」

謎が、また一つ……

事情聴取と（後書き）

前の天子様が影状態……
亀更新申し訳ないです

恋心

「……恋？」

わたしは眉をひそめながらその言葉を繰り返した。
そうするとテルタツテは、ニヤリと笑いながら頷く。

「天子の方に会ったことはないけど、第一番隊の隊長とは何度か
会議で会ってるんだ。そのときに天子の話を聞いたらそれはそれは
褒め倒しだったよ」

「……それだけのことで恋してるなんて」
「それだけじゃないって」

テルタツテは身を乗り出した。

「あの目……前の天子様の話をしているときの隊長の目はとても
優しく、苦しそうだった」

「苦しそう……」

どうしてだろう。こんな子どもが恋愛について話したって説得力
がないはずなのに、何故かそうだったのだろうなと思ってしまった。

「身分違いの恋……どんなに天子様に恋焦がれようが気持ちを伝
えることは出来ない。それに加えて……」

テルタツテの瞳がより一層細く歪んだ。

「天子様には別の思い人がいた」

「思い人……？」

「そう……そしてその人物が……」

テルタツテの発した言葉にわたしは言葉を失った。

天子と彼女を守る騎士。

騎士は天子に恋をした

そして天子は……

「王子様のことが好きだったんだ」

王子というのはわたしが憎むあの男のことで……

あの男に恋をしていた？

信じられない。

そんな感想が一番に浮かんだ。

だってあの男はこの世界の人間たちの象徴みたいなものだ。

身勝手に傲慢で、人の気持ちなんて考えやしない。

自分が、国がよくなればそれでいいと考えているような人間だ。

そのためには他の人間がどれだけ不幸になろうが構わないと思っている。

だからこそわたしがここにいます。

そして、前の天子だってわたしと同じ状況にいたはずなのだ。

この国、王子、国民、言ってしまうはこの世界いるのすべての人間のわがままでせいでこの世界に召還された被害者。

わたしと同じような思いを抱えていると……そう思っていたのに。

「前の天子様は……王子のどこが好きだったのかな？」

「さあ？僕はそこまで知らないけど……彼女が召還された当時彼女に一番優しかったのは殿下だからね。やっぱり優しくされると惚れてしまうのかな？」

「王子様が？」

一番優しかった？

なんだか笑ってしまうような話だ。

わたしが来たときに一番憎いと思ったのは王子ですけど？

「でもそれも、彼女が偽者だと分かるまでの話だったけどね」

「そう……」

やっぱり酷い男。

天子が可哀想だとも思うが、騙された天子も悪いと思う。

本当に大切に思ってくれている人の気持ちにも気がつかないで……

「前の天子様はどこにいるのかな？」

「んーさあ？元の世界に帰されたって話を聞いたりするけどね。実際どうなったかは誰も知らないよ」

「……本当に？」

笑いながら言うテルタツテの瞳をわたしはソツと見返した。

嘔吐きなテルタツテ。

元の世界に帰された？そんなこと出来ないのはテルタツテ自身が良く知っているはずだ。五大魔術師の一人が知らないわけがない。もしわたしが“元の世界に帰す方法がこの世界に存在していない”と知らなければ信じたかも知れないが……生憎わたしは盗み聞きしてしまつたから知っている。

本当は天子が今どこにいるのか……知っているのではないだろうか？

わたしの中に疑問が生まれる。

だがその疑問を解決する方法はない。

だつてテルタツテは本当に子供なのかと疑うほどに何枚も上手だ。

わたしの追及に何の表情も崩すことなく

「本当だよ」

無邪気な笑みをわたしに返した。

そんな風に言われたら何も返すことなど出来はしない。

天子と騎士と王子様。

わたしがこの世界に来る前に何があつたのか。

その時コンコンと部屋をノックする音が聞こえた。

「誰？」

「レヴォラです」

「レヴォラさん？どうぞ入ってください」

扉が開くと少し疲れたような顔をしたレヴォラの姿が見えた。

「お疲れ様です」

「大変だった？」

「いえ、大丈夫です。それよりも天子としての仕事 came と聞きました」

「あつ、はい。でもどれから手をつけていいのやら」

「その話ですが……」

レヴォラはテーブルの上に散乱している資料のうちの一枚を手にとつてわたしに見せた。

それにしてもレヴォラの敬語にはまだ慣れない。

「先ほどこの町から連絡がありました。なんでも闇の量が急増していて大変なことになっているそうです。そこで最初の仕事はこの町からということになりました」

その資料を受け取ると、テルタツテが横から覗き込んできた。そして楽しそうに笑みをこぼす。

「へえ、コレは大変だね」

文字が読めないわたしにはさっぱり分からないが、仕事は決まったということだ。

天子のことにも気になるがソレより大事なのは国民の信頼を得ること。

まずはそれからだ……

恋心（後書き）

3週間ほど更新せず申し訳ないです。
お待ちになってくださった方がとうとうございます。

闇の卵

「東の森をぬけそのまま真っ直ぐ進むと今回の目的となる町、シルルクがあります」

そう言つてレヴオラは地図を広げて見せた。

わたしとテルタツテは地図を覗き込みレヴオラが指差す場所を見た。

わたしたちが今いる王都に比べれば小さいものの、なかなか大きな土地が描かれておりその中心にミミズのようなよく分からない文字が書かれている。きつとこの町の名前でも書かれているのだろう。そしてもう一つわかるのは海が近いということだ。

「シルルクは商人の町としても有名です。我が国各地の特産品や他国の品など数多くのものを取り揃えております」

「商人の町ですか……」

「マツシエルつていうお菓子が美味しいよ」

「へえ、食べる時間ありますかね？」

「それは……分かりかねます」

わたしに出される食事にはデザートというものがない。

だからお菓子という言葉にホンの少し心がうかれた。

「資料にも書いてあったと思いますが、今この町には闇の卵があります」

闇の卵？

わたしはビックリして目を見開いてしまったが直ぐにいつもの表情に戻した。

資料なんて読んでないのだから仕方がないであろつ。

「闇が卵を産んでも産まれてくるのは多くて10匹程度なのですが、この闇は他の闇と少々違いまして、卵から産まれてくる数は数千以上と言われております」

数千……

それはすごいと素直に感心してしまう。
なるほどね、この仕事の依頼内容が大体見えてきた。

「そして今、その卵が孵化する時期にあります。すでに町はパニック状態です。現在のはわが国の衛兵が対処しておりますが闇が一斉に孵化すればもたないでしょう。一刻も早く花音殿に行っていたきたい」

数千もの闇が一度に襲ってきたら確かにその町は大変だ。

それに商人の町よばれる場所。商品が闇に壊されたり食べられたりしては今後の生活に関わってくる。

天子様の助けを求めるのは当たり前であろつ。

「……………分かりました。出発はいつ頃ですか？」

表情は心配そうに、だけど心の中で細く笑む。

商人の町ということは国民が多く集まるということ。そして大量の闇……

天子としてのわたしを見せ付けるのにはちょうど良い場所だ。

本当に、こんなところばかり運が良い。

「出来るだけ早いほうが嬉しい。出来れば明日にでも……………」

随分早い。それほど深刻ということか……

「構いません。それでは明日出発しましょう」

「休む暇もなく申し訳ありません」

「大丈夫です。これがわたしの仕事ですから」

わたしはレヴオラを安心させるようにっこりと微笑んだ。
優しいレヴオラの気遣いだけで十分心が休まる。

「もしものときは僕は疲労回復の魔術でもかけてあげるよ」
「ありがとうテルタツテ」

テルタツテにも笑顔を向ける。するとレヴオラが少々呆れたような顔をした。

「テル、お前回復系の魔術は……」
「だから、もしものときはって言ってるでしょ？」

その会話の意味が分からず少しだけ首を傾げるとレヴオラが教えてくれた。

「回復系の魔術は魔術を使った人間への副作用があるんですよ」
「副作用……ですか」

「高熱が出たりね、髪がぬけたって人もいたかな？」

魔術も奥が深い……

「とにかく今日はゆっくりとおやすみ下さい。俺とテルはもう下がります」

「明日だからね。僕も準備しなきゃな……」

「レヴォラさんもテルタツテもゆつくり休んでくださいね」

「ありがとうございます」

「はい」

挨拶が終わるとレヴォラとテルタツテは部屋から出て行った。
わたしの部屋に静けさが戻る。

考えるべきことは多いが、とにかく明日の準備を始めるかなと思
いソファから立ち上がったそのとき、フツと誰かの気配を感じた。

今日は来客が多いな……

そう思いながら来客者の名前を呼ぶ。

「何の用？ナナリ」

黒い霧が悪戯に部屋を舞い、最後にはベットのの上に集まると人の
形を形成した。

「そんな邪険にしないでくれるかしら。カノンだって私に会いた
かったでしょう？」

「話を聞いていたの？」

「ええ、ふふふつあの闇たちが孵化するなんてすっかり忘れてい
たわ」

ナナリは可笑しそうに笑った。

「その闇ってどんな闇なの？」

「ふふつ、そうねえ……さつきも貴方の騎士が言ってたけど私た
ち闇には珍しく多くの子を産む種族なの。そしてすこぶる頭が悪い」

ナナリの言葉があまりにも自然だからそのまま流してしまおうと思ったがフと引っかかりを覚えた。

「頭が悪い？」

「そう、大人になっても低脳でね。闇の中じゃ1、2を争うほど馬鹿なのよ」

「……それに何か問題が？」

「大問題よ。大人になっても低脳なのに子供のころは脳がないんじゃないかと思うほどに馬鹿でね」

「……それって」

「つまり、こちらのいうこと聞かない可能性が大きいってこと」

わたしはその言葉に小さく眉をよせた。

商人の町シルルク

「花音殿、外を見てみてください」

その言葉にわたしは馬車の小窓を空けて外を見た。
するとそこに広がるのは一面の海……。

「キレイ……」

思わず呟いたわたしにレヴォラは小さく笑みをこぼした。
そのことに少し恥ずかしいと感じてしまう。海を見るは、はじめ
てではないのに……

「あと少しでシルルクだよ」

テルタツテが嬉しそうな顔でそう言った。

「お菓子食べれるといいね？花音」

「そうだね」

わたしはテルタツテに笑みを返しながらもう一度海を見た。
懐かしいと思う。地球の海も、この世界の海も同じものだ。フッ
と頭をよぎる家族との思い出にわたしは目を閉じた。

馬車の動きが止まると同時にわたしは目を開ける。
記憶が飛んでいるから浅い眠りについてたのかもしれない。

「花音殿、到着しました」

「はい」

頭に残る家族の笑顔を振り払いわたしは馬車の外に出た。
そして辺りを見回して思わず目を見開く。

「何だか、凄いですね……」

ざわめく人々の声。人の多さ。それから種族の多さ。王都では見れないものばかりだ。

「ここが商人の町シルルク。異国の者も多くおりますので絶対に俺たちから離れないでください」

「分かりました……」

王都の人間は上品な人ばかりで気に障ったが、この町の庶民的な感じをみると落ち着く。

商人の町シルルクか……

「嫌いな町じゃないわね……」

わたしは誰にも聞こえないように小さく呟いた。

「あつ！ほら花音、あそこにあるお店が僕の言ってたマツシエルのお菓子のお店だよ」

「どこ？」

そう言いながらテルタツテの指差す方向を見ると、行列のできる一つのお店を見つけた。可愛いピンクと白のお店である。

「ねえレヴォラ？買いに言っちゃだめ？」

「……花音殿をあのような場所に連れて行くわけにはいかないだろ」

「じゃあ僕が一人で買ってくるから！」

「お前は花音殿の護衛があるだろうが！」

「えー、じゃあ衛兵の誰かに買いに行かせてよ」

テルタツテとレヴォラの言い争いはしばらく続いたが一人の心優しい衛兵が「私が買いに行つて参ります」と言つたことで話は落ちついた。

テルタツテは上機嫌だがレヴォラは少々不服そうだ。

「お菓子を買つまでに時間がかかります。その間に宿泊先に参りましょう」

「分かりました」

本当はもう少しこの町を見て回りたいが、そんな時間はないのだろつ。

わたしは歩きながらも一度町を見回した。

一見、闇の被害なんてないように思えるほど活気に満ちた町。

だけど所々に闇の被害の痕跡がある。壊れた建物や営業していない店、怪我をした人。それに衛兵の誰かが「人が少ないな……」と呟いていた。普段はこれ以上の人がこの町にいるのだろう。

闇の活動時間は基本的に夜。昼間行動できる闇もいるが今回のターゲットとなる闇は全く昼間行動できないタイプの闇だ。おかげで町の人間は昼間は平和に過ごすことが出来るとレヴォラが説明してくれた。

「花音殿」

「はい？」

「この後、闇の卵を実際に見に行くことになっています。その場で始末出来れば一番良いのですが」

「……わたしもそれが出来ればと思ってますけど、わたしの力が卵の中の闇にも通用するかどうか……」

わたしは困ったように眉を寄せた。

「まあまあ！孵化の予定日まで3日あるんだし、あせらなくても大丈夫だよ」

「だが、予定日など所詮予測にすぎないだろ？」

「レヴォラは王都一の占い師を疑うの？」

「そうじゃないが、もしもということがある」

もしも、ねえ……

わたしは二人の会話に耳を傾けながらも目を閉じた。

今回の闇の卵の問題は彼らがわたしの言うことを聞かない可能性があるということ。

パーティー事件の闇は操られていただけだったが、今回はそうではない。

しかも“聞かないかも”なんて曖昧な表現だ。

失敗なんて許されない。

確実に、国民の信頼を得る方法が必要なのだ。

そのために闇の卵は邪魔でしかない。

昨夜のナナリとの会話を思い出す。

『わたしの言うことを聞かない?』

『そうよ、それに産まれたての闇はお腹を空かせているからすぐに食事をしようとする』

『最悪ね』

わたしがそういうとナナリは面白そうに笑った。

『さあどうするカノン?』

試すような視線にわたしは苛立ちを覚えた。本当はどうにかする方法を知っているのではないだろうか?と疑ってしまう。そうだと
しても、彼女は教えてくれないだろうけど……

闇の卵。

頭の悪い闇。

言うことを聞かない。

産まれたらすぐに食事をする。

いろいろな情報がわたしの頭を駆け巡る。
そこでフツとあることが浮かんた。

『ねえ? ナナリ』

『なあに?』

『ちよつと協力してほしいのだけど……』

『ふふふっ、もちろんいいわよ』

『なら……闇を少し貸してほしいの』

どうすれば上手くいくか。

答えは簡単だ。

邪魔な存在は潰すしかない。

「花音殿お疲れですか？」

声をかけられてハッとした。

レヴォラとテルタツテの顔が視界に入りびっくりする。

「あつ、ごめんなさい……。まだ馬車は慣れなくて疲れてしまっ
たみたいです」

「早く休んだほうがいいね。仕事もあるし」

「そうだな。行きましよう花音殿」

「ありがとう、レヴォラさん」

差し出された手を取りわたしはもう一度馬車に乗り込んだ。

奇妙な

「はい花音」

テルタツテはそう言っただけにそれ手渡した。それを恐る恐る手にとり見てみると思いのほか甘い香りがして素直に驚いた。だがその見た目とのミスマッチさにはつい言葉を失ってしまう。

テルタツテが言っていたお菓子マツシエルというのはかなり奇妙な色をしていた。

緑と紫のマーブル、なんて言えばまだ可愛らしいかもしれないが何だかネチャネチャしているし、どす黒いし、とにかく食べたいと思える見た目じゃない。

「どうしたの花音？」

お菓子を手に持ったまま食べようとしないわたしをテルタツテは不思議そうな顔をして覗き込んだ。

思わず笑みが引きつる。

「えっと、その……個性的な色をしているなって思ったの」

そう言えばテルタツテは手に持ったお菓子を見てああと呟いた。

「この見た目はマツシエルの原材料になってるキノコの色を再現してるんだって。確かに気味悪い色だけど味に問題はなし、すごくおいしいから騙されたと思って食べてみなよ」

そう言っただけでテルタツテはパクリと緑と紫の物体を口にしました。

おいしいと笑顔を見せる姿に嘘はないように思えるがどうしても口にする気になれない。

もう一度そのお菓子を見てみる。見た目が全てじゃないと思うが、見た目も重要だろう。

チラリとテルタツテを見てみれば早く食べてみてと言わんばかりにこちらを期待のこもった眼差しで見つめていた。

わたしは思わずゴクリと唾を飲む。

これは……何が何でも食べなくてはいけない雰囲気だろう。テルタツテは子供でわたしは大人。子供がわざわざわたしのためにくれたお菓子を無下にするほど性格ひん曲がってはいない。

「……いただきます」

思い切って口にしたらそれは口の中でふわりと溶けて……

「おいしい……？」

「でしょ！」

思わず声を漏らすとテルタツテが嬉しそうに目を輝かせた。

やつぱり見た目が全てじゃないなと心の中で感心したのと同時に馬車の扉がガチャリと開く。

「あつ、レヴォアラさん」

開いた扉から入ってきたレヴォアラはわたしに一礼するとテルタツテが手に持つお菓子を見た。

「レヴォラにはあげないよ?」

「いらん」

「そんなこと言って、本当は食べたいでしょ?レヴォラ甘いもの好きだもんね」

へえ、そうなんだ。

テルタツテの言葉に眉を顰めたレヴォラを見てわたしは以外に思う。

レヴォラと甘いものってなんだか似合わないな。

「テル、お前よくそこまでのん気にしてられるな。ここから後少し進めば闇の卵があるというのに……」

「僕だけじゃなくて花音だってそうでしょ?」

「花音殿」

「えっと、何だか実感がなくて……」

呆れるような表情のレヴォラにわたしは苦い笑みを浮かべた。

「衛兵達による安全確認が終わり次第花音殿に直接卵を見ていただきますので」

「あっはい、分かってます」

わたしは笑顔で返した。

宿泊先についた後すぐ、わたしたちは闇の卵があるという森にやってきたのだ。

今は天子様に危害がないように衛兵が事前の安全チェックを行っている。

ともあれ、こんな近くで待機しては何かあってもどうにも出

来ないと思うのはわたしだけだろうか？

「かつのん！」

「ご機嫌な様子でわたしに抱きついてきたテルタツテを思わず抱きとめる。」

「なに？」

「んー、少し心の準備をしいた方がいいかもよって助言をね」

そう言ってテルタツテは可愛らしく笑った。

「どういうこと？」

「闇の卵っていうのは女の人が見るにはちよつと気持ちが悪いものだと思うからね。まあそんなところに迷いもせず花音を送る殿下もどうかと思うけど……」

「ねえそれって」

言葉を続ける前に馬車の扉がノックされた。
タイミングが悪いなと思い舌打ちしたくなった。

「レヴォラ様、事前確認部隊が戻りました。異常はなしのことです」

「分かった。……では花音殿」

「ええ、行きましようか」

テルタツテの言葉は気になるけど、気持ち悪かろうが可愛かろうがどうせ見なくてはいけないのだ。覚悟を決めてわたしは立ち上がった。

馬車から降りると少し肌寒さを感じる。

街中の活気に溢れた雰囲気からはかけ離れた静かな空間。

いかにも何かがいそうな感じがする。

カサカサと草を踏む音を立てながらわたしたちは足を進めた。
わたしの周りは衛兵達は守ってくれているようだ。

「……っ？」

しばらく歩くとわたしは異変に気がついた。

だんだん強くなるそれにわたしは顔を顰める。

鼻を刺すような異臭が漂っているのだ。

鼻をつまみたくくなるような臭いにあたりを見渡せば景色もだいぶ
変わっていた。

先ほどまでの景色は緑生い茂る普通の森だったが、今は違う。

枯れ果てた草木は茶色く染まり、空気は濁っているように見える。
これは、闇の卵の影響なのだろうか？

そう疑問に思っているとき、先頭を歩いていた衛兵が振り返った。
そして前方を指差しながら口を開く。

「あれが闇の卵です」

その指の先を追って見た先には……

「……確かに、気持ち悪いわね」

例えるなら蛙の卵がいいかもしれない。

森の木に大きな白い物体が巻き付くようにへばりついていて、その白い物体の中に丸い球体が犇くように入っている。

体液か何かは知らないけどネチャリとした液体がドロドロと地面に落ちて水溜りを作っていた。

ある一定の場所を境にして、すべての木にその卵と思われる白い物体がくっ付いている。

奇妙としか言いようがない。

卵に付かれた木は養分を吸い取られたのだから？
触ればポロポロと取れてしまいそうだ。

闇の卵。

想像以上に気持ち悪い。

奇妙な（後書き）

久しぶりの更新です。

今回はほのぼのと書いたつもりです。

お願い

「花音殿、力は使えそうですか？」

「……もう少し近づいてみないと」

「分かりました」

レヴオラが差し出してきた手を見て一瞬戸惑ったけれど、せつかくの優しさを無下にすることも出来ずその手を取った。

「んじゃ、僕はここで待ってるね」

「え？」

テルタツテは一緒に行かないの？そういう意味をこめて視線を送るとテルタツテはいつものように可愛らしいを笑みを見せた。

「もし突然闇が孵化しても大丈夫なように花音を守らなくちゃいけないからね。ここで結界張ってるよ。ほらっ、僕これでも花音の専属護衛だからさ」

テルタツテはそう言って手を振りわたしとレヴオラを見送った。
なんだかんだでちゃんと仕事はしているみたいだ。

「……っ」

卵から出た液が地面に流れ、それを足で踏んでしまうとネチャリとした感触がした。卵に近づけば近づくほどに酷くなる異臭に顔を顰める。

時々、液に足をとられて転びそうになったがレヴオラが支えてくれた。

やっと一番近くにある卵のすぐ近くまで行くと、遠目から見ると、さらに卵が気持ち悪いことが分かる。

木の幹を覆い隠すほどに巨大な卵は、まるで心臓のように一定の間隔で脈打っている。

ドロドロと流れる液体がとめどなく溢れるその姿。同じ闇でも美しいナナリとは大違いだと思った。

「さあ、花音殿」

この闇を消し去ってください。

そう願うレヴォラの声を受けわたしは卵をじっと見つめた。
そして……

「消えなさい」

お決まりの台詞をはっきりとした口調で言う。

レヴォラや他の衛兵達が食い入るように闇の卵を見て数秒。

闇の卵がわたしの言葉に従って消えることはなかった。

まあわたしにしてみれば当たり前だが、レヴォラや衛兵は目に分かるほどにがっかりした様子を見せた。万能な力などありにはしないだろうに。

「ごっ、ごめんなさい……わたしの力で闇の卵までは……お力になれず申し訳ないです」

悲しそうな顔を心がけて言うと先に行動を起こしたのは衛兵で、

「いっいえ。天子殿のせいではございません」

「そうです！天子様は十分私たちを救ってくださいました」

「卵の状態で消せないのなら産まれた瞬間を狙えばよいことです」

わたしを慰めるようなその言葉に心の中で冷笑を浮かべながらわたしは表向き嬉しそうな笑顔を見せる。

「ありがとうございます。町に被害がでる前に……必ず産まれた瞬間この闇を退治してみせます」

「……しかしこの数。無理をなさらないようにしてください花音殿」

「はい、もちろんです」

レヴォラの言葉に笑顔で返すとわたしたちは元来た道を引き返した。

「駄目だったみたいだね」

テルタツテのところまで戻ると開口一番にそう言われた。

別に残念がつている様子はなく、むしろ楽しそうに見える。

「やっぱり卵にはわたしの力は使えないみたい」

「んー、花音の力は言霊みたいなものだからね。聴覚が未発達な

卵には意味をなさないのかな？」

「そうなのかな？」

「まああくまで僕の予想だけど」

そんな深い理由なんてないだろうに。

無邪気に笑うテルタツテにわたしは笑顔を返した。

「花音殿」

「はい、なんですか？レヴォオラさん」

「今日はこのまま宿舎に戻ります。卵の孵化が予想される3日後の夜になる前にここをもう一度訪れ、孵化した瞬間を狙うという形になります。がよろしいですか？」

「ええ、大丈夫です」

「では早く馬車へ、ここは空気が悪いですから……」

そう言っ てあたりを見回したレヴォオラは眉を潜めた。

確かにこの臭いの中には出来れば長くいたくない。それはここにいる全員が思っていることだろう。

「この臭い洗っても落ちなかったらどうしよう」

「それはないと思うけど……」

自分のローブを少しだけつまみながら嫌そうに言うテルタッテにわたしは苦笑した。

その後、他愛もない会話をしながら馬車に戻り、わたしたちはそのまま宿舎に戻った。

宿舎に戻るとどつと疲れが押し寄せてくる。

この町についてから大して休んでもいないし体はクタクタだ。

もう休んでいいと言うレヴォオラの言葉に甘え早々と部屋へ行こうとしてわたしはあることを思い出した。

「あの、レヴォオラさん」

「なんですか？」

「お願いがあるんですけど……」

申し訳なさそうに言えばレヴォラは不審そうな顔をする。
わたしがこんなことを言うのは珍しいからだろう。

「お願い？」

「はい。あの……無理だったらいいんですが、闇を退治するのは
3日後。ということは明日は暇ということですよね？」

「まあ、花音殿はそうになりますか？」

わたしはその言葉にっこりと微笑んだ。

「では明日、町に出掛けたのいのですが駄目でしょうか？」

「……………はっ？」

その言ったときのレヴォラは酷く間抜けな顔をしていた。

お出かけ

その日の夜のこと。

「それで？どういふつもりなのかしら」

楽しそうな笑みを浮かべて黒い人魚はわたしに問いかけた。

「どうもこうも、せつかくキレイな町だから見て回りたいと思っただけよ」

そう言えばナナリはよりいっそう笑みを深くする。

わたしが外に出たいという願いは護衛付きならと許された。

ただレヴォラとテルタツテは闇退治への準備で忙しいので付いてこれず、代わりに一般の衛兵がわたしを遠くから護衛するらしい。

「本当に好都合よね」

「何が？」

「別に」

小さな声で呟いたつもりでもナナリには聞こえてしまっらしい。

「まったく、作戦だってまだ完璧じゃないのにお出かけなんて…随分とのん気よね」

「大丈夫、ちゃんと考えてるわ」

言えば、あらっとナナリ少し驚いたような顔をして次の瞬間クスリと笑みをこぼした。

「また悪巧みをしていたの？」

「失礼ね、そんなんじゃないわ」

そう言っ てわたしも笑みを浮かべる。

「演出は派手に……てね」

ふふ、と笑いながらナナリはフワリと浮かび上がった。

「楽しみにしてるわ、女王様」

その一言の後、ナナリの姿は霧のように空気に溶けて消えていった。

翌日。

「おはようございます、天子様」

いつものようにメイドのような格好をした人がわたしを起こしにきてくれる。

「おはようございます」

すでに出かける準備がばっちりのわたしを見てメイドさんは少々呆れ顔だったが、すぐにいつもの表情に戻り食堂でレヴォラ様がお待ちです、と告げた。

食堂に行くとレヴォラとテルタツテ、その他数名の衛兵とメイドが待ち構えていた。

「おはようございます皆さん」

「おはようございます花音殿」

「おはよう花音！」

「おはようございます天子様」

それぞれの挨拶が終わると席に着き今日の詳細が話される。

「護衛はここにいる3人がメインで着きます。目立ちたくないという花音殿の意見を尊重して遠くから見守る形にしますが、もしものときはすぐに姿を現しますので」

「はい、分かってます。でもそんな無茶はしませんよ」

軽く笑えば、レヴォラはそれもそうですよねと同じく笑みを見せた。

「僕たちが着いていければよかったんだけどね」

「テルタツテは仕事に専念してよ。わたしのわがままなんだし」
「んー」

「とにかく、もしもということもありますのでご注意ください」
「分かってますよ、レヴォラさんは心配性ですね」

その後は食事をしながら話を進めた。
驚くほどスムーズに話が進む。

「それではお気をつけて」

「お土産よろしくね花音」

「はい、では行ってきます」

この町の衣装に着替えて外にでる。
その瞬間、天子から解放されてただの長沢花音に戻れて気がして
少し嬉しかった。

商人の町シルルク。

世界各国から人々が集まるその町の面積はかなり広い。
初めて見るお菓子、芸、装飾品すべてに目を奪われる。

でもそれと同時に自分が違う世界にいることを思い知らせて心
が嘆いた。

チラリと後ろを振り返ると、見えるか見えないかくらいの位置に
護衛の3人の姿がある。この微妙な距離感が何とも言えない。

そんな感じでキョロキョロといろんなものを見ていたら急にドン
と体に衝撃が走った。

「えっ」

なんの準備もしていなかったわたしの体はそのままバタリと後ろ
に倒れていく。

地面に尻餅をつき、体に痛みが走り顔を歪ませたが自分の上にあ
る重みを見みてそういうことかと納得した。

わたしの上には5歳くらいだろうか？そのくらいの子供が乗っか
っている。

後ろを振り返り、こちらに来ようとしていた衛兵に目で大丈夫だ
と伝えたあとわたしはその子供に話しかけた。

「ねえ、僕大丈夫、怪我はない？」

「え……あつ！ごめんなさいお姉さん！！大丈夫！？」

子供は今だよく自分の状況を理解していなかったのか、びっくりしたような顔をしたあと慌てて立ち上がった。

ボロボロになった服がその子の身分を分からせてくれる。

「アルジャっ大丈夫！！」

「アルジャ！！」

大丈夫だよとその子に言おうとした瞬間、その子と似たような身なりの子供が二人近づいてきた。

このこの友達だろうか？

「大丈夫、でもお姉さんが……」

「ごめんなさいお姉さん！アルジャのせいで……怪我はない？」

「ええ大丈夫よ、気にしないで」

アルジャと呼ばれる少年よりも少し年上に見えるその女の子は随分としっかりしている。

もう一人のアルジャと同じくらいの少年はぴったりとその女の子にくっついていた。チラリとその子に視線を向けて見るとすぐに視線をそらされてしまう。

「本当にごめんなさい、鬼ごっこしてて周りを見てなかったんだ」

「ああ、それで……。こんな人通りの多いところで遊んで危険ないよ、これからは気をつけてね」

そう言って、ふっと疑問が頭をよぎった。

そして、もう一度その子達に目を向ける。

ボロボロの身なり、人通りの多い道、鬼ごっこ。

なるほどね、そういうことが……。

「うん、これから気をつけるよ」

「本当にごめんなさいお姉さん。アルジャにはよく言いつけておくから」

「ええ、気をつけてね」

去っていかうとする子供たちにニコリと笑いかけた。

「でもその前に」

わたしはその言葉とともにスツと手をアルジャに伸ばす。

アルジャはえっ？とわけが分からないというような顔をしたあと自分に伸ばされる手にビクリと震えた。しかし何をするわけでもなくただわたしの手を見つめている。

他の二人の子供も同じような反応だ。

ボロボロになったアルジャの服の中に少しだけ手を入れると、そこに不釣り合いな物が目に入った。真新しく美しい縫い目と刺繍がされた袋。

ズシリとした重みを持ったその袋は間違いなくわたしのものだ。

出かけたいと言ったわたしに、見るだけではつまらないから何か買ってきてはどうですか？とレヴォラが渡してくれた大切なお金。

「これは返してもらっね。小さな泥棒さん」

その袋を片手に笑えば、子供たちの顔が恐怖に染まった。

偽善者

子供たちはわたしの顔を凝視したまま動けなくなった様子で、ただ呆然と立ち尽くしている。

一番年上であろう女の子の顔にはなぜ？どうして？というような疑問が浮かんでいた。自分たちの作戦が完璧だとも思っていたのだろうか？馬鹿らしい。

お金を取ったのは間違いなくアルジャがわたしにぶつかってきた時。わたしが狙われた理由はきつとこの町に馴染んでなかったからだろう。同じような服を着ていても新品であるから他より良く見えるし、肌だって焼けてない。どっかの金持ちの女がお忍びで町を見学、そんな風に見えるはずだ。

世間知らずなお嬢様だったら確かに今の作戦で騙されたかもしれないが、わたしはそこまで馬鹿じゃない。こんな人通りの多い道で走っていたらぶつかってしまうということはあるかもしれないが、こんなところで鬼ごっこをしているというのは不自然だ。

こんな人通りの多い道、すぐに相手を見失ってしまう。追いかける相手が見えなくては鬼ごっこもなにも出来ないだろう。

まあ最近の子供の事情なんてものは分からないし、もしかしたら本当に鬼ごっこをしていただけかもしれないと思ったが予想はあたた。

「やっぱりガキね」

誰にも聞こえないくらいの大きさで呟くと同時にバタバタと何かが近づいてくる音が聞こえてくる。

「てんっ……花音様どうなさいました!!」

「どこか怪我でも!？」

「子供が何か無礼をしましたか？」

振り返ってみればあの護衛役の衛兵達が顔色を変えてこちらに向かってきていた。

そしてわたしの前で固まる子供たちに目を向けた後、わたしが手に持つお金の袋をみてピンっときたらしい。

「スリかつ！」

「お前らこの方を誰だと思っている!!」

怒りをあらわにする衛兵たちに子供は恐怖を隠せず後ずさった。
何というか、大人げない。

「申し訳ございません花音様。私たちがついていながらこのよう
な……」

「この子供には相応の罰を与えますゆえ」

そうしてわたしのご機嫌取りをしようとする男たちを見ていると
呆れて何も言えなくなってしまう。

確かにわたしがこのことを彼らのせいにしてレヴォラに報告すれば
彼らはかなり大きな罰を受けるだろう。天子を守れなかったのだ
から当然だ。

だけど、わたしに言わせればわたしを守れなかったことよりこ
ういふ態度のほうがムカつくのだ。逆効果だとして分からないの
だろう。

そんなことを考えながらわたしはチラリと周りを見た。

ほら、衛兵達が騒ぎたてるから何事かと人々がこちらを注目してしまっただけではないか。

人々はこちらをチラチラと見ながら噂話をしている。

さて、この注目の中でどう対応するか……

今のわたしは天子。そう、天子なのだ。

そう思ってたわたしは優しく微笑んだ。

「この子達に罰を与える必要などありません」

そう言えば衛兵達はびっくりしたようにこちらを見てきた。

何を驚く必要があるのか。とても“天子様”らしい行動でしょう？

わたしはレヴォオラからもらったお金の袋から一番豪華そうに見える硬貨を1つ取り出すと地面に置いた。

「あげるわ」

「花音様!？」

「何をしているのですか!」

そんな衛兵など無視してわたしは話を続ける。

「貰って? こうしなければ生きられない子供がいるのに何も出来ないわたしからのせめてものお詫びよ」

「っ! こっこんなものいらない! 同情なんていらいない! ! !」

黙りこんでいた女の子が睨むようにそう言ってきた。

ム力つくでしょうね。わたしがもしこの子だったとしてもこんな同情にまみれた金なんて受け取りたくない。

でもね。

「いらなら受け取らなくていいわ。でもこのお金はここに置いて行く。貴方たちが受け取らないと言うなら他の誰かが見つけて持っていくだけよ」

そう言うとき女の子はゴクリと唾を飲んだ。

いらなと言いながらも本当はほしに決まっている。今受け取れば自分たちがもらえる。でも意地を張って受け取らなければ誰かのものになる。そう思うともったいなく感じるものだ。

素直でよろしい。

「後は自由にして頂戴」

わたしはそう言うとき立ち上がった。

そうしてその場から立ち去ろうとしてフツと足を止める。

「言っておくけど、2度はないわ。もし次を見つけたら容赦なんてしない」

そう言うとき今度こそ本当にその場から立ち去ろうとした。

「……………偽善者っ」

歩き出したわたしの背に小さく呟くような声が聞こえてくる。
たぶんあの少年、アルジャの声だろう。

大正解。とわたしはアルジャを褒め称えなくなった。

偽善、今の行動を表現するならそれが一番正しい。

「花音様、よろしいのですか？」

「ええ、それよりも聞きたいことがあるの」

「なんででしょう？」

「あのような子供たちを育てる場はないの？」

「えっ……ああ、あるにはありますがもういっぱいいいいで、お金に余裕がないのです」

「そう」

わたしは小さくニヤリと笑った。

予想外のアクセントだったけど、これは上手く見えそうだ。

「さて、買い物物の続きをしましょう？ テルタツテにお土産を買わなくちゃ」

「あつ、はい……承知しました」

闇のの孵化まであと少し。

やらなくてはならないことは多い。

すべては偽りの天子を作り上げるため……

心配

（それでは花音様、また明晩に……）

黒い闇にまぎれるようにしてギョロリとした目がこちらを見る。

「ええ、今日はゆっくり休んでね。また明日」

わたしの言葉を聞くとその目は夜に溶けるように消えていった。

「ふふふ、これであとは明日を待つだけね？」

振り返ると、ナナリが妖美な笑みを浮かべながら頬杖をついている。

「上手くいけばいいんだけどね……」

「あら？ 珍しく弱気じゃない。何か心配なところでもあるのかしら」

そう言われてわたしは少しだけ笑みを浮かべた。

「そういうわけじゃないわ。ただね、上手くいき過ぎていると怖くなるものなのよ……いつか失敗したときの代償は、成功した分だけ大きいだろうから」

そういえばナナリは可笑しそうに声を上げた笑った。

「ハハハハハッ、馬鹿ねえカノン！」

「……………何よ」

「そんな心配杞憂だわ。だって失敗なんてありえないもの」

そう言つとナナリはクルリと一周回つて深々とお辞儀した。

「我らが闇を甘く見られては困りますわ女王様。心配せずとも完璧かつすばらしき舞台を用意して差し上げましょう」

そう言つて顔を上げたナナリの顔は少し不気味だった。

「もし失敗する時がくるとすれば……それはカノン、貴方がこの世界を許したときよ」

わたしが……この世界を許す？

「……………そう」

わたしはナナリから視線を外すと空を見上げた。

「なら大丈夫ね、わたしがこの世界を許すときなんてきつと来ないわ……」

「ふふ、その言葉をきいて安心したわ」

ナナリはそう言つとスルリとわたしの首に腕を巻きつけた。

「さあもう寝ましょう？ 明日は忙しくなるわ」

「ええ、おやすみナナリ」

「おやすみなさい、カノン」

もし

もしわたしがこの世界を許すとしたら……それは一体どんな時だろう？

王子や五大魔術師がわたしに土下座をしたとき？
帰る方法が見つかったとき？
それともこの世界が壊れたとき？

「やめよ」

今は目の前のことだけを考えよう。
今すべきことを確実……そうすれば何か分かるかもしれない。

この復讐の先に何があるのか？
そんなの今のわたし……いや、きっと誰にも分からない。

「おはよー花音……！」

朝目が覚めて、食堂に行くとテルタツテが元気よく迎えてくれた。
しかし、いるのはテルタツテだけで他の衛兵やレヴオラの姿は見えない。

「おはよう、他のみんなは？」

「ん、闇の卵を見に行ってるよ。今日は孵化の予定日だからね。
警戒してるんだよ」

そう言つとテルタツテは無邪気に笑った。

「そっか……みんなあんまり寝てないみたいだけど大丈夫かな？
テルタツテも……」

「平気だって。僕らはそんなことには慣れっこだからね。花音が心配することないよ。それに僕に言わせれば花音のほうが心配」
「えっ？」

思わぬ言葉にわたしは首を傾げた。

「闇の卵が孵化した瞬間、花音は膨大な数の闇の赤子を消し去らなくちゃいけないんだよ？きつと体力的にも厳しい」

「ああ……」

一般的に考えればそうなるのか、とわたしは思った。

実質わたしは何の力も持っていないし、闇が消えるのだってただわたしの言う言葉に従って姿を消してくれているだけなのでわたしは何も大変じゃない。

ただレヴォラやテルタツテ、他の人間から見たらわたしは言霊の力を使って闇を消し去っているわけで、本当にそうだとしたらかなりの体力消費があるのだろう。

今回は数が多いから心配するのも当然だ。

「大丈夫だよ。数は多いけどみんな赤ちゃんなわけだし、そんなに心配することないって」

「だといいんだけどね……」

テルタツテはまだ心配そうにわたしを見ていた。

その心配は長沢花音に対して？それとも救世主である天子花音様に対して？

考えるだけ、馬鹿馬鹿しいか……

「さあ、朝ごはんにしよう？お腹が空いてたら元気がでないよ」
「うん、そうだね」

闇の卵の孵化まであと数時間。

心配（後書き）

いつ…… 1ヶ月ぶりの更新です

更新待っててくれる人なんているのですかね？
いつも遅くて申し訳ないです

ごめんなさい

夕方から夜に移る瞬間というのはあっという間だ。
さっきまで明るかったのに、フツと気がつけば夜になってる。

いつの間にこんなに暗くなってたんだろう……
なんて思うことが人生のうちに何度かあるはずだ。

わたしは木々の微かな隙間から見える赤と青の月を眺めていた。
この月を見るたびに、ここが異世界だと思い知る。

「……………」

赤と青の月が二つ並ぶ。この時こちらの世界がいう夕方の時刻になる。

夜が来るまで、本当にあと数分といったところだろう。

バタバタと衛兵達が走り回り、レヴォラが指示を出す。

テルタツテがいつになく真剣な顔で、魔術みたいなものを唱えていた。

今夜が闇の卵の孵化の予定日。

だからといって、夜になった瞬間孵化するというわけではないらしい。

もしかしたらすぐに産まれるかもしれない、夜中かもしれない、朝になるホンの少し前かもしれない。

いつどの瞬間で卵が産まれるか……それは分からないのだ。

だから今夜は気が抜けない。

どの瞬間に闇が生まれても大丈夫のように、みんな動いている。

それは万全の計画。

失敗なんて許されない。

失敗なんてあるはずない。

そのはずなんだ。

でも、だけどね……

「ごめんなさい」

隠せない笑みを浮かべながら、こつそりと言っておいた。

ごめんなさい。

全部壊しちゃうから先に謝っておきます。

「夜だ……」

衛兵の誰かが呟いた言葉に、周りの空気がピンと張り詰めたように感じた。

森は急激に暗くなり、衛兵達が持つ火とランプが唯一の明りだ。

この瞬間からいつ闇の卵が孵化してもおかしくない。
不気味な感じだった。

まだ数分も経っていないのに、長い時間を過ごした気がする。
長い長い夜だ。

「……………まだ……………ですかね」

夜になって数時間ほど経ったであろうか？

最初の頃のピリピリした空気は随分と和らいでいた。

闇の卵は孵化する様子を見せず、今だ静寂を保っている。

そのことに気の緩みがでて、衛兵達もどこか和んでいた。

だが、

「集中しろ、いつ産まれてもおかしくない状況だ」

レヴォラの言葉に、緩んでいた衛兵たちの顔が引き締まる。
だがそれも、1時間ともないであろう。

時間が経てば経つほど、緊張は緩んでくる。
だから怖いのだ。

気が緩んでいる瞬間、人は無防備である。
無防備な人間は余りにも脆い。

そしてそれが起こったのは、そんなみんなの心に緩みがうまれて
いる時だった。

「きやあああああああつつつつつあ!!!!!!!!!!」

耳に響くような叫び声が響いた。

衛兵たちが一斉に声のしたほうを向く。

その方向にあるのは……

「町の方から！？どうしてっ！」

その言葉と同時にレヴォラが走り出した。

その姿を見て衛兵たちも後を追う。

だがそれもその前に立ちはだかる者の姿によって止めた。

「や……みつ？」

夜に溶けるようにしてこちらを見る瞳。

低くうなるような声やクスクスと笑う声。

そこにいる存在は間違いなく闇だった。

「なんで!？」

テルタツテがそう叫びながら、瞬時に魔術を唱える。
次の瞬間、光の矢のようなものが飛び交った。

光の矢が闇に突き刺さる瞬間わたしは思わず顔を顰めてしまう。

かわいそうに……

そう思ったのはわたしだけじゃないらしく

「あらあら、わたしの可愛い僕たちに何をしてくれるの？」

耳に響いたのは聞きなれた声。

その声とともに、テルタツテの光の弓が水の膜に包まれてしばらくすると光を失った。

「チツ、上級の闇か」

テルタツテは舌打ちした後、すぐ次の魔術を唱えはじめる。

今の所は計画通り。

さて、わたしも動かなくてはね。

「テルタツテ！闇はわたしがっ」

「花音は町の方に！！こいつは僕がどうにかするからっ」

テルタツテに駆け寄りながらいうと、グイッと押し返された。

「でもっ……」

「行きましよう花音殿！」

いつの間にかそばに来ていたレヴォラに腕を引かれてわたしはそのまま町へと走り出す。

慌てて振り返ると、テルタツテと妖美な笑みを浮かべたナナリの姿があった。

大丈夫だろうか？と心配になりながら見つめていると

（ふふ、心配せずともこんな餓鬼に負けないわ。殺したりもしないから安心なさいよ）

頭に響くナナリの声に少しだけ安心して、わたしは前を向き直す。

「くそっ、どうして闇が！」

悪態をはきながら走り続けるレヴォラについて行くのは正直キツイ。

いつも鍛えているレヴォラと違って、こっちは凡人だというのにそんなことすら今のレヴォラの頭から抜け落ちているらしい。

それはそうだろう。

予想外の闇の襲撃。

闇の卵の孵化どころではなくなっている。

頭はさぞ混乱していることだろう。

腕を引かれたまま、森を抜ける。そして森を抜けてすぐ目に入ったその光景にレヴォラの足が止まった。後ろについて来ていた衛兵達も同じように足を止める。

夜の空に浮かぶ闇の姿。地を駆ける闇の姿。

なるほどね、これはわたしも予想以上だ。

「なんて数だ……」

呆然としたままその光景を見ているレヴォラや衛兵達をチラリと見回した。

まだだ……

驚くのも、絶望するもまだ早い。

ここからが本番なのだから……

わたしは邪魔な靴を脱ぎ捨て、長いスカートの裾を破った。

「花音殿!？」

「一体何をつ」

「……行きましょう。止まってる暇はありません。闇を何とかしなくては!」

破ったスカートの裾を投げ捨ててわたしは前を見る。

立ち止まっていたレヴォラの手をとり、今度はわたしが引っ張った。

そんなわたしに衛兵達も続いてくる。

「花音殿……無理はしないように」

「……何を言ってるんですかレヴォラさん。わたしは天子ですよ? こういうときのための天子じゃないですか」

そう言って微笑めば、レヴォラはぎゅっと手を握り締めてくれた。こんなときでもレヴォラは優しい。

でもごめんねレヴオラ。

謝ることはしても止めることはしないの。

だって、憎いんだもの。

悪巧み

「消えなさいっ!」

わたしがそう叫べば、目の前にいる闇は夜に溶けるように消えていった。

何度その言葉を言ったかは分からない。

消しても消しても溢れるほどにいる闇がこの町を覆い尽くしていた。

「……っ」

「花音殿!？」

グラリと揺れて倒れそうになったわたしの体をレヴォラが慌てながらもしっかり支えてくれる。

こついうところはさすがと言っべきだろうか。

「大丈夫ですか花音殿?」

心配そうに覗き込んでくるレヴォラにわたしは小さく笑みを返した。

「大丈夫……です。少しめまいがしただけですから」

弱弱しい声で言えばレヴォラの眉がぎゅっとよった。ホンの少しの罪悪感。

本当はめまいなどしてないし疲れているわけでもないが、前テルタツテが言っていたことを参考に見ようと思ったのだ。

力を使えば体力が消耗する。そのほうが“らしい”だろうから……

「少し休んでください」

「いえ、そんなことしている暇なんてないですよ……こんな数の闇を前に休んでなんていられません」

真剣な目で言えば、レヴォラは少しだけ考える素振りを見せた。
答えなど1つしかないのに。

レヴォラはすぐに顔をあげて、決心したような顔をした。

「……………失礼します花音殿」

「え？」

よく分からない発言にわたしが首を傾げるよりも早くわたしの視界はいつもよりも高くなった。

「えっ…ちょレヴォラさんっ？」

自分が抱っこされていることに気が付きさすがのわたしも慌てる。
こんなの想定外すぎる。

「おっおろしてください！」

「花音殿はお疲れです。せめて移動中は体力を使わないよう失礼ながら抱き上げさせてもらいます」

「自分で歩けます!!」

「さあ、行きましょう。闇の被害を少しでも最小限に抑えなければなりません」

「レヴォラさん!!」

何度か説得を試みたものの、結局レヴォラはわたしをおろしてはくれなかった。

かなり恥ずかしかったが、こんなことでいつまでも言い争ってるわけにはいけないので仕方がなく大人しくする。

そうだ。

時間を無駄にすることは許されない。

こちらの計画にもタイムリミットがある。

「急ぎましょう。まだ孵化していないようですが、闇の卵が産まれたらもつと大変なことになります」

「ええ……分かってます」

いくら同じ闇だからといってこちらにも闇の卵がいつ孵化するか分からない。

もし卵が孵化したら、赤子は町の人間や衛兵を見境なく食らうだろう。知能の低い赤子にわたしの言葉は届かない。ナナリたちが殺すにしても闇の卵から産まれてくる子の数はあまりにも多すぎる。すなわち、闇の卵が孵化したら終わりなのだ。

闇たちの演技にも限界がある。

少しでも早く計画を終わらせなくては……

レヴォラの腕に抱かれながら、わたしは闇を消し続けた。

しかし、わたしの声が届く範囲はそう広くなく、加えて人々の悲鳴や闇のうめき声なども混じって声がかき消されるため闇はなかなか

か減らない。

「キリがありませんね」

建物の影に隠れながらレヴォラが囁いた。

さすがのレヴォラも疲れたようで息を切らしている。

「何かいい方法があればいいんですけどね……」
「……………いい方法ですか」

焦っている頭で考えても何も浮かんでこないだろうと思いながらわたしは問いかけた。

やはり何も出てこなかったようで、レヴォラは悔しそうな顔をする。

焦ると頭の回転が良くなる人もいるが、レヴォラはそういうタイプじゃないらしい。

そこでわたしは少し考えた。

闇は十分に暴れたし、住民をわたしの言霊で何人も助けた。そろそろ茶番は終わらせてもいい頃だろう。

そう思ってレヴォラにヒントを言おうとしたとき……

わたしの視界に面白いものが映った。

見たことある子供が3人。

あれは、この前町に出たときスリをした子供だろう。

闇にやられたのかどうかは知らないが、この前よりも服はボロボロで顔は涙で汚れていた。

必死な形相で逃げる子供たちを可笑しそうに追いかける闇をチラリと見た後、わたしはあることを思い出してレヴォラに見えないようにそっと笑みを浮かべた。

“ 前の天子は闇に襲われそうになったとき、子供を盾にした ”

そういえば、そんなことがあったはずだ。
ならば……

「っ！花音殿！？」

疲れきって力が抜けていたレヴォラの腕からスルリと抜けるとわたしは地に足をつき走り出した。

レヴォラのわたしを呼ぶ声が聞こえたのか子供たちを追いかけていた闇の視線がこちらに向く。

” お・そ・え ”

口パクでそう言ったあと子供たちに視線をやると闇は分かったというように大きく吼えた。

そして一気にスピードを上げて子供たちに襲い掛かろうとする。

「 いやっあああああああああああ 」

女の子の悲鳴が聞こえて、少年たちが目を見張る。

「やめなさい！！！！」

闇の牙が子供たちに届く直前、わたしは叫んだ。
そこで闇の動きが止まりこちらに視線が向く。

瞬間わたしは闇と子供たちの間に滑り込み、子供たちを庇うように両手を広げた。

そして不気味な色をする闇の瞳を真正面から睨みつける。
従順なその瞳は、どこか優しい。

「消えて」

その一言で闇は夜に溶けるように消えていった。

少年少女

「花音殿、大丈夫ですか？」

わたしが闇を消した後、数秒遅れてレヴオラが駆けつけてきた。焦りながらも心配するレヴオラの顔には疲労の色が伺える。かなり疲れているようだ。

「平気ですよ。子供たちに怪我はありません」

そう言っただけでわたしは後ろで小さく固まりながら呆然とする子供たちを見て微笑んだ。

「……アンタ……この前の」

その時やっとなわたしがスリのターゲットだった女だと気がついたようで、わたしにぶつかってきた少年アルジャは驚いたように目を見開いた。

隣にいた女の子も、一番小さなもう一人の少年も同じような表情だ。

「大丈夫？怪我はなかった？」

優しく問いかければ少年たちは一瞬呆気にとられたような顔をしたものの、その顔はだんだん怒りにそまっていた。

「どうして！どうして助けたんだっ！誰も助けてくれなんて言っていない！！」

「……でもわたしが助けなかったら殺されてたでしょ？」

叫ぶように言うアルジャにわたしは落ち着いた声で答えた。
そんなわたしを女の子が睨み付けるようにして見る。

「そんなに楽しい！？哀れな子供を助けて正義の味方にでもなつたつもりなの！！アンタに助けてもらわなくなつて逃げ切れた！それっ……………やっ！！！」

女の子の言葉が急に止まった。
その瞳は恐怖に染まっている。

「お前たちこの方が誰か知っていたの暴言か？助けていたいただいた分際でギャーギャー喚くな。それ以上この方を罵倒するような言葉を吐いてみる。その首を今ここで斬つてやる。子供だからって容赦はしない」

女の子の喉元にはレヴォラの剣先が向けられていた。
恐怖に歪み、思わず涙を流すその姿に冷笑する。

「…………レヴォラさん、わたし大丈夫ですから」

そう言つてわたしはその剣先を女の子の喉元から退かした。

「ですが花音殿…………」

素直に剣を退かす手とは裏腹にその言葉は反抗的だ。レヴォラらしい。

だがそんなレヴォラを無視してわたしは子供たちに目を向けた。

「目の前に殺されかけている人間がいれば助ける。それが道理よ。」

貴方たちのためでもわたしの自己満足のためでもないわ」

わたしがそう言うと、子供たちは黙ってしまった。

これ以上ここにいても無駄かなと思って立ち去ろうとしたとき、小さな声がわたしを引き止める。

「……お姉さん何者なの？」

そう言ったのは今までしゃべらなかった一番小さな男の子だった。女の子の服をしっかりと握り締めながら、真剣な目でこちらを見つめてくる。

まさかこの子に突っ込まれるとは思わなかった。

アルジャも女の子もわたしへの怒りからかわたしが使った力のことなど気にしていなかったようだ……この子が一番冷静だったということだろう。

「闇が人の言う事に従うなんて見たことも聞いたこともない……一体何者なの？」

アルジャと女の子もやっとそのことに気がついたらしく、こちらに視線を向けた。

教えるということか……

「花音殿」

レヴォラが代わりに言いましょうか？とでも言うように声をかけてくるがわたしは首を横にふった。

そして子供たちにニコリと微笑む。

「秘密」

そう言えば子供たちは怪訝そうな顔をした。

「どうせすぐに分かるから、そのときまでのお楽しみ」
「……なにそれ」

女の子が気に食わないとでも言うような声で言った。
別に言ってしまったてもよかったのだが、自分で天子だと名乗るのもなんだし、名乗りたくもなかった。

「それよりもそろそろ行きましょうレヴオラさん」
「……そうですね。時間ありません」

レヴオラはそう言って空を見上げた。
同じように空を見上げれば、夜に紛れる黒い闇が視界に入る。
そろそろ時間の限界が近いだろう。

「やはり効率が悪いですね。もっと一気にわたしの声を届けられたら……」

目を伏せながら呟いた。

「何か方法があればいいのですが……」
「そういう魔術とかはないんですか？」
「魔術……」

さりげなく言った言葉にレヴォラは考え込む。
だがわたしの問いに答えたのはレヴォラではなかった。

「風……」

「……………え？」

声の聞こえてきた方向を見ると、一番小さな少年がこっちを見上げている。

「ちよつとキール……！」

「……………お姉さんのその力の理屈なんて知らないけど……………声を届けることが出来れば闇を一気に倒せるの？」

「ああそうだ」

レヴォラが受け答えるとキールと呼ばれた少年はコクリと頷いた。

「なら、風の魔法を使えば……………風を伝って広範囲に、この町全体に声を届けることが出来る」

「そうか！」

レヴォラは一瞬嬉しそうな顔をしたがすぐに落ち込んだ顔をした。
どうしたのだろうと思うとレヴォラは申し訳なさそうな顔でこちらを見てくる。

「どうかしたんですか？」

「……………俺は魔術が駄目なんです。テルタツテがいればよかったんですが……………」

なるほど、テルタツテは今頃ナナリと対戦中だ。

どうやら思ったよりも手こずっているらしい。当初の予定ではこ

のあたりでテルタツテがこちらと合流するはずだったのだが……

他の周りにいた衛兵に聞いてみても、風を得意とする魔術師はいないようだ。

これは……どうすべきか、やはり別の策を……

そう思ったとき、何か言おうとしてすぐに口を閉じるアルジャが視界に入った。

「ねえ……何か方法があるの？」

アルジャに問いかければビクッとして視線を下に向ける。

「別に……何も」

「何か方法があるなら言って。このままじゃこの町は全部闇に食われる……それでもいいの？」

そう言えば、アルジャは少し躊躇した瞳をキョロキョロとした後に決心したように顔を上げた。

「ミーシャなら……」

「え？」

ミーシャというのはどうやら女の子の名前らしい。自分の名前を呼ばれて女の子がびっくりしたように顔を上げた。

「ミーシャなら出来るよ」

信じて

「ミーシャなら出来るよ」

その言葉に女の子は勢いよく立ち上がった。

「ちょー！アルジャ何言ってるの！！」

「……それにキールが増幅の魔術を使える。二人が魔術を使えば町全体に声が届くかも」

「アルジャ！！」

女の子の声を無視してアルジャは話を続けた。

「それは本当か？」

レヴオラの言葉にアルジャはしっかりと頷く。
しかし

「いや！わたしは協力なんてしないからね！！」

ミーシャと呼ばれた女の子は首を大きく振って叫んだ。
そんなミーシャを見てアルジャは悲しい顔をする。

「ミーシャ……」

「どうしてこんな奴にわたしが手を貸さなくちゃいけないの？アルジャだってこの女にムカついてたじゃん！！なのにどうして！！」

「だけどねミーシャ」

「嫌ったら嫌！この女に助けられるくらいなら闇に食われたほうがまだまっ」

「ミーシャー！！」

大きな声を出すアルジャにびっくりしたのかミーシャはピタリと叫ぶのを止めた。

「僕だつてこんな分けの分らない奴に協力なんてしたくないけど……でも、このままじゃこいつらの言つたようにこの町は闇に食われちゃうんだよ！？僕はそんなの嫌だ！」

「……でも」

「僕は……嫌な想いもいっぱいしたけどこの町が好きだよ？ミーシャは違うの？」

アルジャの言葉に、ミーシャは下を向いてしまった。

「花音殿」

「……様子を見ましょう」

これは、この子達の問題だからわたしは口出しする必要なんてない。駄目なら駄目で別の方法を考えるまで……

さあ、どうする？

「……僕はやるよ」

「キールまで！！」

「僕も同じだから。僕もミーシャやアルジャと出会えたこの町が好き」

キールはそう言って小さく微笑んだ。

「……………もう」

ミーシャはそう言っでギョツと目を瞑る。
そして開かれた瞳に迷いはなかつた。

「分かつた。わたしも協力する」

「ミーシャ！」

その言葉にアルジャとキールは満面の笑みを浮かべ、ミーシャは少し照れたように笑つた。

何とも綺麗な友情だこと。

笑つちやうくらいにね。

「ありがとう、助かるわ」

わたしが微笑みながら言えば、ミーシャはキツとこちらを睨み付けてきた。

「アンタのためじゃない！アルジャとキールのためよ！！」

「ええ、分かつてるわ。でも、そうだとしてもわたしが助かることに変わらないから。だからありがとね」

そう言えばミーシャはプイツと視線反らしてしまつた。

「そうと決まれば時間がありません。急ぎましょう」

「ええ」

「他に増幅の魔術か風の魔術が少しでも使える奴はいないか？小

さな魔力でも多少の役には立つ」

「なら、私が！」

「私も……！」

名乗りを上げる衛兵たちを横目にわたしは町に視線をやった。

ナナリや他の闇たちは上手くやっているだろうか？

少しだけ心配になる。

この作戦の目的は2つ。

1つは闇を暴れさせ、わたしの力をこの町の人間に知らしめること。

もう1つは……

「花音殿、増幅の魔術で彼女の風の魔術が一番高まった瞬間に力をお使い下さい」

「あつ……はい、分かりました」

ナナリたちならきつと大丈夫。

わたしはそう思っただけで考えるのを止めることにした。

悩んでもどうにもならない。

「それでははじめましょう」

ミーシャとキール、その他の衛兵達の魔術はすぐにはじまった。だが、魔術は思った以上に上手くいかない。

「ミーシャ、大丈夫？」

「わたしは平気。それよりも……もっと力を高めないと……これ

じや町全体に声なんて届かない」

ミーシャの額に一筋の汗が伝う。

やはり、子供の魔術では難しいか……

そう思ったとき、周りの景色が一瞬だけ歪んだ。
そして次の瞬間、小さな人影がその場に現れる。

「テル！」

「テルタツテ！」

そこに現れたのはテルタツテだった。彼の登場に一瞬心が躍るが、その姿が傷だらけなことに気がついて思わず目を見開く。
しかしテルタツテ本人は気にした様子もなくニヤリと笑みを見せた。

「やっぱ僕がいないと不便でしょ？」

そう言ってすぐに増幅の魔術を使う人々に加わってくれる。

いつもよりも苦しそうな表情だがそれを気にしている暇などなかった。

「風が……」

テルタツテが加わってしばらくすると、ミーシャの周りに風が起こりはじめる。

それを確認するとテルタツテがわたしを振り返った。

「花音、今だ！！！」

テルタツテの合図とともに、わたし指を絡めて祈るような格好をする。

そして……

「お願い、これ以上誰にも傷ついてほしくないの……………消えて」

わたしの言葉は風を伝い闇へと届く。

それは一瞬の出来事。

闇たちはわたしの言葉に従うように夜に溶けて消えていった。

「すごい……」

「これが天子様のお力」

「なんと素晴らしい」

衛兵達の呆然とした声が聞こえてきた。

レヴォラやテルタツテ、子供たちも闇が消えていく空を呆然と見上げている。

でも、これだけじゃ計画にはまだ足りない。

「ミーシャ」

「なつ、何？」

「もう一回この町全体に言葉を届けてほしいのだけど……出来る？」

ミーシャは一瞬不思議そうな顔をしたが小さく頷いてくれた。

テルタツテやキール、衛兵達がもう一度増幅の魔術を使いミーシヤの力を高めてくれる。

「花音、いいよ」

「ありがとう」

わたしはそう言って微笑み、もう一度言葉を発した。

「シルルクの町の皆様」

今度は闇ではなく、この町の人々に話しかける。

「闇はわたしの力で消し去りました。……ごめんなさい。もっとわたしの力が強ければこんな大きな被害を出さずにすんだのに……」

そこまで言っただけでわたしは静かに目を伏せた。

「わたしが見たこの町は明るく活気に溢れた町でした。どうか、諦めないで。わたしが貴方たちを支援します。きっとすぐに明るく活気の溢れた町に帰ることが出来るでしょう。わたしはそう信じています。だからどうか、気を落とさずに。わたしは貴方たちの力を信じています。だからどうか、貴方たちもわたしのことを信じてください。天子であるこのわたしを……」

風を伝い町に広がる声。

「信じて」

信じて、なんてよく言えたものだ……自分で自分を笑いたく
なった。

楽しい楽しい

「国の医療魔術師が追いつかぬほどの怪我人は出たが、それに反して死者はたったの10名ほど……。天子、民を守ってくれたこと本当に感謝しよう」

目の前でフェジーが微かに頭を下げた。

それに従うように周りにいた衛兵やフェジーの側近と思われる人々が深く頭を下げる。

だがそんな態度にわたしは眉を顰めて、俯いてしまう。

「……………違いますよフェジーさん。たったの10名ではなく10名もです。わたしは10名もの犠牲を出してしまいました。天子失格ですね……………」

悲しげ表情で告げるとそれを見ていた衛兵達が身を乗り出した。

「そんな！天子様は我々をお救い下しましたっ！」

「あれだけの被害ですんだのも天子様のおかげです！」

「天子様がいなければどうなっていたことかっ」

そうやって衛兵達はわたしの言葉を否定してくれる。

わたしはそんな衛兵達にありがとうございますと声をかけて小さく微笑んだ。

シルルクの町での事件から数日が経ち、わたしはあの忌々しい王宮に戻ってきていた。

今はシルルクの事件のその後の詳細をフェジーから聞いているところである。

「これらの言うとおり、そなたの力がなければ死者は軽く1000を越えていたであろう。そなた自身を卑下することはない」

「あれはわたしの力だけではありません。テルタツテや町の子供の力があつたからこそです。わたし一人では何も出来なかつた」

「……花音殿」

わたしの後ろでレヴォラが悲しそうな声を出す。

フェジーも眉を寄せて難しそうな顔をしていた。

「それにつゝ、わたしは結局闇の卵の孵化を止めることも出来なかつたんですよ！」

「……それはっ」

レヴォラが口を開きかけたが言い返せずに押し黙つた。

わたしは流れる涙をグツと我慢するような演技をする。

その姿を見て衛兵たちの表情は苦しそうに歪んだ。

フェジーの顔も顔を歪ませて小さな声で呟く。

「まさかこちらの計画が闇にばれていたとはな……」

シルルクの町を闇が襲撃している間の出来事だつた。

わたしが闇を消し去ったとき、すでに闇の卵はどこにもなくなつていた。もちろん闇の卵がわたしの声に従つたわけではない。

ナナリを含む森に残つた闇たちが卵を持ち出したのだ。

今回の計画の目的。

1つはわたしの力を見せ付けること。

そしてもう1つは闇の卵をシルルクの町から持ち出すことだつた。

孵化してしまったらわたしは産まれた闇を止めるすべがない。そんな失態を見せてしまえばわたしが偽者だとばれてしまう。だからといって闇の卵の孵化は止められないことだ。

ならば闇の卵をわたしの前で孵化させなければいい。それが結論だった。

どこか遠い町で孵化してしまえばわたしの偽りはばれない。

だから今回の計画で闇の卵を持ち出すように言ったのだ。

「闇も天子様の力を恐れているということですよ。だからこそ自分たちの繁殖を邪魔されないように持ち出したのです」

「報告や状況を見る限りそれが一番納得がいくな」

もちろん、この計画をフェジーやレヴォラが知るはずがない。

天子が闇の卵を消そうとしていることを知った闇が、孵化の邪魔をさせないように卵を別の場所に持ち出した。真実を知らない人間はそういうふうに思い込んでいる。

ちなみに、真実を言うならば持ち出された闇の卵は闇の領地に近い町で無事孵化し、その町に住んでいた人々は赤子の食事となった。

「でも……もしどこかの町で卵が孵化していたら……」

「大丈夫ですよ花音殿。そのような報告はまだありませんから」

当たり前だ。

ばれないような場所で孵化させたのだから。ばれては困る。

「ああ、そうだ」

いつまでも不安げなわたしを氣遣ってかフェジーは思いついたように話題を変えてきた。

「シルルクの町の民はそなたにとっても感謝していた。町の復興作業の支援を殿下に頼んだそうだな」

「はい。それくらいしか……わたしには出来ませんので……」

ソッ目を伏せる。

「花音殿。そんなに落ち込まれることはありません。花音殿に感謝する者はいても花音殿を非難する人間など一人もおりませんから

……」

レヴオラの慰めに小さく微笑んでからわたしは顔を上げた。

「もうこんな思いはしたくありません……。こんな戦い早く終わらせてしまいたい」

その小さな呟きに答える人はいなかった。

真夜中。

いつものようにナナリが妖美な笑みを浮かべている。

「ふふふ、ねえカノン？人殺しになった気分はどう？やっぱり気持ちいい？」

最近のナナリはそればかり聞く。
わたしは少々うんざりしていた。

「何度も言ってるでしょ？なんとも思わないって……」

そう……

わたし人を殺したのだ。

実際に手を下したわけではないが、今回の事件で死んだシルルクの10人も闇の赤子の食事となった人もわたしが殺したも同然。

わたしが命令しなければ死ぬこともなかった人たち。
わたしが殺した。

でも人を殺したというのにわたしは特に何も感じることはなかった。

やっぱりこの世界はわたしにとって現実味にかけるのかもしれない。

そうじゃなければ……

「わたしって可笑しいのかな？」

「ふふっそうね、可笑しいわ」

ナナリは可笑しそうに笑う。

「でもねカノン、可笑しくなくちゃやっていけないわよ？普通の

ままじゃ復讐なんて出来ないわ」

「……そうだね」

わたしはこれから何人も人間を殺すだろう。

男も女も大人も子供も関係なく、わたしは殺す。

そしていつかこの世界を壊すのだ。

「やっぱりわたし可笑しいみたい」

でもこれがわたしの選んだ道だから

「ナナリ、やっぱりさっきのは嘘」

「さっきのって？」

「人を殺して何も思わなかったってのよ」

ナナリは首を傾げる。

「正確に言えば、人殺しがってわけじゃないけど……」

よく分からないという顔をしたナナリにわたしは満面の笑みを浮かべた。

「復讐をするのはとっても楽しいわ」

そうしてまた夜が明ける。

わたしの復讐はまた一歩終わりに近づいた。

楽しい楽しい（後書き）

ここで一区切りとなります。

読んで下さった方々本当にありがとうございました。
幕章をはさんでまた続きを書いていこうと思います。

今回の話は闇の卵事件での花音の計画の種明かしのつもりで書いたんですけど分かりにくいところが多くて申し訳ないです。
書き直しをするかもしれませんが。

幕章で補足や後日談をちょこちょこ入れる予定です。

それから、見直し軽くしかしてないです……。
間違いが多くて読みにくかったら申し訳ないです。

それでは、これからもお付き合い頂けると嬉しいです。

【幕章】嵐の前の・上

王宮の一室。

そこには気難しそうな顔をしたテルタツテとレヴォラが腰掛けていた。

「あれはどう見たって上級の闇だよ」

テルタツテは先日の戦いを思い出してそう言う。

「だろうな。あれだけの魔術を使えたんだ」

「それも、僕以上のね……」

そう言ったテルタツテは少し悔しそうだ。

「闇を甘く見たか？」

「冗談。僕は全力だった」

レヴォラは本当に悔しそうなテルタツテを見て可哀想になる。

「あの闇……僕の攻撃はあっさりかわすくせに、こっちには確実に当ててくる。最終的には気絶させられて、その間に闇の卵は持ち去られた。本当に五大魔術師の名が廃るよね」

「テル……」

闇の卵事件は根本的に成功をしたわけではない。花音が関わった事件の中では唯一失敗したといってもいい。

闇の卵は持ち去られ、どこかで孵化したのだろうと王宮でも判断された。

それでも、他の闇からシルルクの町の人間を救ったことのほうが大きくとられそのことはあまり公にされなかったが……テルタツテは大きな責任を感じていた。

自分があ闇、黒い人魚のような姿をした闇に勝っていれば闇の卵を持ち去られることはなかったのだと。

「そんなに気落ちすることはない。確かに卵は持ち去られたが、その後の増幅の魔術のときお前はよく貢献してくれた。プラマイゼ口ってところだろ」

「王宮の判断もそうだよ。おかげでお咎めなし……花音も殿下に何か言ってくれたみたいだし」

「花音殿が？」

「そう……でもね、僕的には罰せられたほうが気分がよかった」

闇に負けてテルタツテのプライドは少なからず傷ついていた。

最年少で五大魔術師となり、今の位は第2位。この国で2番目の魔術師ということになっている。

それなのにあっさりと負けた自分が惨めで悔しくて仕方がないのだ。

思わず唇をかみ締めたテルタツテの頭を柔らかな温もりがクシャリと撫でた。

びっくりしてテルタツテが顔を上げると、レヴォラが少し気恥ずかしそうにテルタツテの頭を撫でている。

じいっと見つめられて恥ずかしさが増したのかその手つきは次第に乱暴になり、テルタツテはそんな様子のレヴォラを見て軽く笑った。

「乱暴」

「うるさい」

レヴォラはそっけなく言うと、頭から手を離れた。そして少し考えたあと、テルタツテに向きなおす。

「悔しい気持ちを忘れるな。悔しいなら次は勝て。それがお前のへの罰だ」

「……言われなくても、僕は負けず嫌いだからね」

そう言ったテルタツテの顔は先ほどまでよりずっと明るかった。そんなテルタツテの様子を満足そうに見ると、レヴォラはもう一度テルタツテの頭を撫でてから立ち上がる。

そんなレヴォラおテルタツテは不思議そうな顔で見た。

「出かけるの？」

「ああ」

少し表情の硬いレヴォラを見てテルタツテは何か感づいたようにニヤリとした笑みを浮かべた。

「なるほど、アレね」

「ああ……ああいうのは苦手なんだ」

「うん、僕も苦手。まあ頑張ってね」

ニコニコと笑顔で手を振るテルタツテを、恨めしそうに見ながらレヴォラは部屋を後にした。

今日も町は賑わいを見せている。

「ねえ知っているかい？」

「ん？何を」

一人の主婦の問いにもう一人の主婦は首を傾げた。

「天子様のことだよ。また1つ闇の問題を解決したそうだ」

「ああ知ってるわ！北の森の闇でしょう？」

「それは一昨日の話！昨日は……」

町を歩けば、どこからともなく天子の単語が聞こえてくる。

「ああ、それから天子様が学校を建設したって話聞いた？」

「聞いた聞いた！貧しくて魔術の勉強が出来ない子供達を入学させてるって話よね」

「さすが天子様。まさにこの世界の救世主だわ」

天子を褒め称える声は町中後を絶たない。

「……すごいね、グール」

そんな町人たちの声を聞きながら、一人の少女が傍らに立つ背の高い男に話しかけた。

それに反応した男は背の小さな女を気遣ってか、地に膝をつく。

「闇の数が急激に減ってるんだって。闇を操る言霊だっけか？…
…便利そうだね」

男は少女の言葉に何を返すわけでもなく、ただ聞いている。
少女もそのことを気にしている様子はない。

「みんな天子、天子って。少し前までは口にするのも嫌そうにしていたのに……そのことが嘘みたい」

すっぽりと被ったフードから微かに見える黒い瞳がスッと細くな
った。

「偽者のクセに」

忌々しげにそう言うと、少女は視線を男にやる。
その瞳は、先ほどまでと違いどこか縋るように弱い。

「ねえ、グール。そうだね。あの女は偽者だね。そして……」
「……何を心配しておられます、愛美様」

男は、ソツと少女の手に口付けた。
そのことに少女はホツとしたような顔をする。

「何も心配することなどございません。偽者の天子に臆すること

などないのです」

男がそう言った瞬間ふわりと吹いた風が彼女のフードを揺らした。少女の長く美しい黒髪がサラリと肩に落ちる。

「そうだね。だってわたしが、わたしこそが本当の……」

呟くように言った少女を男はただじっと見つめていた。

【幕章】嵐の前の・中

「アルジャ！アルジャ！」

三つ編みにした髪を揺らしながら嬉しそうに走ってくるミーシャとその後ろを必死に走ってくるキールの姿を見つけてアルジャは手を振った。

アルジャの前まで来るとミーシャは嬉しそうに手に持っていた紙をアルジャに見せる。

「見て！わたしAクラスになったの！！」

手に持っているのはクラス分けの表。
そのAクラスの欄にミーシャの名前が載っていた。

「すごいじゃんミーシャ！さすがだね」

微笑ながら言うとミーシャは少しだけ照れくさそうに笑う。

「キール。キールはどうだった？」

今だに息が整っていない様子のキールを見て少しだけ笑いながらアルジャは聞いた。

するとキールは少しだけふて腐れたような顔をして

「B」

とだけ答えてくれる。

どうやら、Bクラスだったことが気に食わないらしい。

「Bでもすごいじゃん。Aクラスはかなり小クラスだって聞いたし、仕方がないよ」

そう言っただけで、キールはまたしてもふて腐れた顔をした。

「でもミーシャはAクラスに入れた」

それが嫉妬なのか、それともミーシャと離れてしまった寂しさなのか、あるいは両方なのか……

どちらにしても滅多に感情を露にしないキールのふて腐れた顔に笑顔が止まらなかった。

王立天子学園。

闇の卵の事件後に天子自ら設立した学校として国中の注目を集めている。

学生の9割が魔術の才能がありながら貧しくて魔術を学べない子供たち。

そして、クラスの9割が魔術専門の学科であり、残り1割が普通学科という仕組みになっている。

何よりも注目される点は子供たちの学費等が全て天子自身の負担ということだ。

アルジャ、ミーシャ、キールはあの事件の後、天子自らの誘いを受けてこの学校に入学した。

ミーシャとキールの魔力はとて高くこの学園の先生たちも高く評価している。

アルジャは魔術を使えないが、勉学への興味が高く、覚えもいい

ためこの学園の普通学科の生徒として通っている。

そして今日は魔法専門学科のクラスの発表の日だった。

AからFまであるクラスでAがもっとも優秀とされるのである。

「それにしてもさ、僕たちみたいなのがこの国にはこんなにいたんだね」

アルジャはそつと周りを見渡しながら言った。

この学園に集められた生徒のほとんどはアルジャ達と同じような生活を送ってきた子どもだ。

苦しいのは自分たちだけだと思っていたが、似たような人間がこんなにもいたことに三人は素直に驚いていた。

「いい人だった。天子様」

キールが呟くように言う。

その言葉にアルジャが頷き、しばらくしてミーシャも頷いた。

事件から数日、天子がもう一度アルジャたちを訪ねてきたときを思い出す。

『学校を作ろうと思うの』

そう言ってアルジャたちに入学を促してきた天子はまさに天使のようだった。

学校という場所で学べる幸せを3人はかみ締めている。

それは3人だけではなくこの学校に入学することを許された子どもたち全員が思っていることだった。

「Aクラスの皆は主席卒業を狙ってるみたいよ」

「確か主席で卒業すると、天子様の護衛部隊の一員になれるんだっけ？」

「そつ。みんな天子様を守ることで恩返しをしたいみたい」

同じクラスの子たちをみて、ミーシャはこれは大変な学校生活になりそうだと思った。

「ミーシャも負けてられないね」

「べつ別にわたしはっ！」

笑顔で言うアルジャにミーシャは顔を赤くしながら答える。

しかししばらくすると恥ずかしそうにしながらもポツリポツリと言葉を口にした。

「まあ、あの女には命を助けてもらったのと町を助けてもらった飯があるからね。飯を作るのは好きじゃないし……だから、その……」

言葉に詰まったミーシャにアルジャとキールは声を立てて笑ってしまう。

天子が助けてくれなければ、こうして3人で笑いあうこともなかっただろう。

そんな様子で3人が談笑を続けていると不意にザワリと校舎内にざわめきが起こった。

3人は何事かと思っ
てみんなの視線の先に目をやる。

するとそこには見たことのある、赤茶の髪の姿があった。

「あれは……」

「天子様の護衛係だね」

「そういえば、特別講師として来るって言ってたっけ」

レヴォラの姿に見とれている人も多かったが、中にはすぐさま駆け寄って何か質問している生徒もいた。

「あれAクラスの子だ」

レヴォラに質問をする子達の中に見覚えにある顔を見つけてミィシャはつい呆れてしまう。

「まあ、天子様直属の騎士になんてそうそう会えないからね。質問したいこといっぱいあるんじゃないかな？」

アルジヤはそう言って困り顔のレヴォラに視線を向けた。

「後で僕たちもお礼を言いに行かなきゃね」

アルジヤの言葉に二人はコクリと頷く。

世界に降り立った2人目の天子、花音。
彼女の良い噂は後を立たない。
その1つに自分たちも関わったと思うと、3人は少し鼻が高かった。

「きっと、もうじき闇との戦いは終わるだろうね」

「うん、天子様がいれば必ず」

「そうね」

3人は近いうちに来るであろう闇のいなくなった明るい世界を想像し、微笑んだ。

【幕章】嵐の前の・中（後書き）

天子のお金を盗もうとした3人の子供たちのその後です。

少々懐きすぎてゐるかなとも思いましたが……ご愛嬌ということで。
花音の策略にまんまと嵌った人たちを書きたかったです。

余談ですが、講師として来たレヴォラは案外人気で、その後も何度か授業をしたとかしないとか（笑）

【幕章】嵐の前の・下

「ごっ、ごめんなさい」

右肩に走った衝撃に花音は咄嗟に誤った。

どうやら、誰かとぶつかったらしい。

「んーん、こっちこそ御免ね？前見てなかった」

そう言っただけでぶつかった相手の男は甘い笑顔を見せる。
見た瞬間モテるんだろーなと思った。

漆黒の美しい髪。

片方の瞳は髪に隠れて見えないがもう片方は宝石のように赤い。
180はあるであろう身長に引き締まった筋肉。

そして極めつけは子供のように甘ったるい笑顔。

母性本能をくすぐるというのだろうか、こういう人物は。

「いえ、お怪我はありませんか？」

「平気だよ。君こそ大丈夫だった？」

「はい、大丈夫です」

「良かった。君にかすり傷でもつけたら俺殺されちゃう」

そう言っただけで、男は可笑しそうに笑うが花音は顔を引きつらせた。
殺される？何を言ってるのだろう。

「あの……えっと」

「ああ、今は気にしなくていいよ。軽い冗談だから。かすり傷くらいじゃ殺されはしないって」

ニコニコと笑う男に何故か寒気がしてくる。
なんというか、演技っぽいのだ。

それに、よく考えればこの男可笑しい。

城の衛兵と同じ服を着ているが、態度が衛兵じゃない。
この世界に來た当初ならまだしも、今じゃ花音はこの世界の救世主として特に城の中では崇められていた。

それなのに敬語も使わず、むしろからかわれている。

「あなた……誰ですか？」

回りくどいことをしても仕方がないと思いそう聞くと、男は笑みを深めた。

「俺？この城の衛兵だけど」

「誤魔化さないで下さい！」

少し強めに言うが、男には全く効果はないようだ。

やばいな。

本능が危険だと告げる。ここにいてはいけない。

逃げよう。そう思い、わたしが一步後ろに下がったと同時に男は再び口を開いた。

「ねえ。君は神様を信じる？」

「は？」

男の唐突な問いに思わず変な声が出る。逃げようと思って出した足も止まってしまった。

「もし神様がいたら君は相当嫌われているね」

クスクスと可笑しそうに笑みを浮かべる彼にわたしは何も言えなかった。

神様がいるとしたら……ね

確かにもしいるのなら嫌われているのだろ。
じゃなきゃこんな目にあうはずがない。

「ああでも」

男は思い直したかのようにそう言った。

花音に視線を合わせるとあの甘ったるい笑みを見せる。

「逆に相当愛されているっていう可能性もあるか」

「……何を」

言ってるんですか？

そう言おうとして、言うことが出来なかった。

頬に触れる柔らかな感触。

それが何か理解するのに時間がかかった。

「お近づきの印に」

そう言いながら離れていく男の顔を呆然として見る。
何なんだこの男……

「俺は、ウラオモテ。せいぜい足搔いてよ天子様」

そう言っただけ男は花音から離れいつてしまう。
追いかけてはと頭の片隅で思う。さっきは逃げなくては思
ったのに。今は逆のことを考えている。

でも、あの男は知っている。

何をとかそんなのよく分からないけど、とにかく花音に関する何
かを知っているはずだ。

追いかけてくちや。

そう思っているのに、動くことが出来なかった。

彼は途中一度だけ振り返って言った。

「やっと全てが動きだしたね」

その言葉の意味は分からない。

ただ、これから何かあることだけは分かった。

そう。

今まで何もかもが上手くいっていて……だから少しだけ怖かった。
このまま案外すんなりと復讐は終わるのかな？なんて考えていた。
そしたらその後はどうしようか。
なんて少し考えたりして……

だけど、例えるならそれは嵐の前の静けさで……

「だから何よ」

だからといってここで立ち止まる訳にも行かないのだ。

花音は何事もなかったかのように、上質な赤い絨毯の上を歩き出した。

ザワリと木々が揺らめく。

深き深き森の奥。

日の光が一切入らないその場所で、幾多もの闇がひれ伏していた。

その中にはナナリの姿もある。

闇たちが敬意を示す方向には何かの姿があった。

ソレは少し眠たげな表情をしながらもゆっくりと立ち上がる。

「眠っていたか」

「ええ、我が君」

呟くようなその声にナナリが答えた。

「最後にお力をお使いになった時からずっと眠られていましたわ」

そう言うナナリを一瞥した後、ソレは問いかけた。

「アイツはどこだ？」

その瞳が求める者は一人だけ。

【幕章】嵐の前の・下（後書き）

【あとがき】

これにて今回の幕章は終了です。

たった3話の幕章の中にいろいろ出して申し訳ありません。

意味深な新キャラたちが誰なのか想像出来ている方もいると思いますが、この新キャラたちを交えてまた続きを書いていきます。

前の天子、あの方、花音の過去。

いろいろと重要なところが出てくる予定です。

拙い文章ですが、お付き合い頂けると嬉しいです。

結木

月日

人の声がやけに耳障りに感じた。

「天子様、貴方様のお陰でわたくしたちの村は救われました」

「ああ何とお礼を申し上げればよいのか」

「天子様、ぜひ我が町へ。我が町にはそれはそれは美しい海がありまして……」

「いいえ天子様。ぜひ我が町へ」

「それなら我が村にも」

「天子様のおかげで闇がいなくなり、村人がみな心穏やかに過ごせるようになりました」

「天子様、次はわたしの町に」

「天子様、天子様」

そう一気にしゃべられても聞き取れるはずがないだろうに……
わたしは我先にとしゃべる人々を見て呆れてしまった。

これでは幼い子供と何も変わらない。

「お前たち、天子様のことも良く考えろ！そんなにいつぺんに話しては聞くに聞けない」

「天子と話したいなら順番に並んでよね」

どうしようかと困り果てていたわたしのフォローをしてくれたのはもちろんレヴォラとテルタツテだ。

わたしにむらがつっていた人々をレヴォラが注意して、わたしから引き離してくれた。

随分な人数だなとわたしは感心する。

これでは護衛も大変だろう。

人々が離れたと思ったたらわたしの周りに透明な壁のようなものが出来上がった。

びっくりしてテルタツテを見るといつものように無邪気な笑顔を浮かべている。

「大事な天子に何かあつたら困るからね。バリアだよ」

なるほどね。

そう思いながら目の前を壁を叩いてみるとコツコツという音がした。どうやら幻覚ではないらしい。

魔法の原理は良く分からないが、素直に便利そうだなと思う。

この世界にきて、もう半年以上の月日がたった。

そしてその時間の大半をこの世界の信頼を勝ち取ることに費やしてきた。

王族、貴族、国民、他国。たくさんの人々と交流してきたと思う。

もちろんわたしを疑う人は後を絶たないが、それでも初めてこの世界に来たときを思えば、今の状況はなんともすばらしいものだろう。

前の天子様がやっていたという国民との交流会。

それをわたしもやってみたいとフェジーに言ったのが今から2週間前。

もちろん良い顔をはされなかった。

国民との交流会のとき、前の天子は乱入してきた闇に驚き咄嗟に近くにいた子供を自分の盾にした。それが前の天子が国民の……すべての信頼を失ったきっかけである。

だが、国民と交流はわたしにとってかなり有益であると思ったのだ。

信頼を勝ち取るだけでなく、王宮の人間が教えてくれない情報も知ることが出来る可能性がある。

齒の浮くような綺麗事を並べて反対する人間を説得し、何とかここまで持ち込んだ。

そして今日がその交流会の初日というわけである。

そこに集まった人数にさすがのわたしも驚いた。

用意された会場には入りきらずに、外にまで溢れる人々の姿。

皆が、一目天子を見ようと必死だった。

「さあ！早く並べ！！天子様とて暇ではない」

「レヴォラさんわたし結構暇ですよ？」

「花音殿、今はそのようなお言葉は……」

「ふふつ、ごめんなさい」

わたしの突っ込みに困った笑みを浮かべるレヴォラが可愛かった。

レヴォラやテルタツテ、そのほかにも何人かの衛兵が溢れかえった人々を並ばせてくれる。

そうしてやっと落ち着いたところで、わたしは一番前に並んでいる人に視線を向けた。

小柄な老婆である。

その瞳には天子への敬意があった。

そういう瞳を見ていると、どうしても傷つけたくなくなってしまふ。

つい、笑みがこぼれた。

わたしも随分と変わってしまったなと感じる。

半年。短いようでいて長い。

その月日がわたしはこんなにも変えてしまった。

もう昔のわたしには戻れない。

「はじめまして、おばあさん。わたしに話したいこととはなんですか？」

わたしは老婆に優しい笑みを浮かべる。

それは天子様の笑みだ。

その笑顔に人は騙されてくれる。

「ああ、天子様。どれほどお会いしたかったか」

涙すらつかべるその姿に吐き気がした。

「わたしも国民の皆様にお会いしたかったです。この日をどんなに待ち焦がれたか……」

この舌は何のためらいもなく嘘をつく。

月日（後書き）

またまた日数をあけてしまい申し訳ありません。

番外編のリクエストを下さった皆様ありがとうございます。
決して忘れていたわけではありません！

もう少し時間が出たら書きますのでお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4721o/>

世界を壊す救世主

2011年9月30日10時56分発行